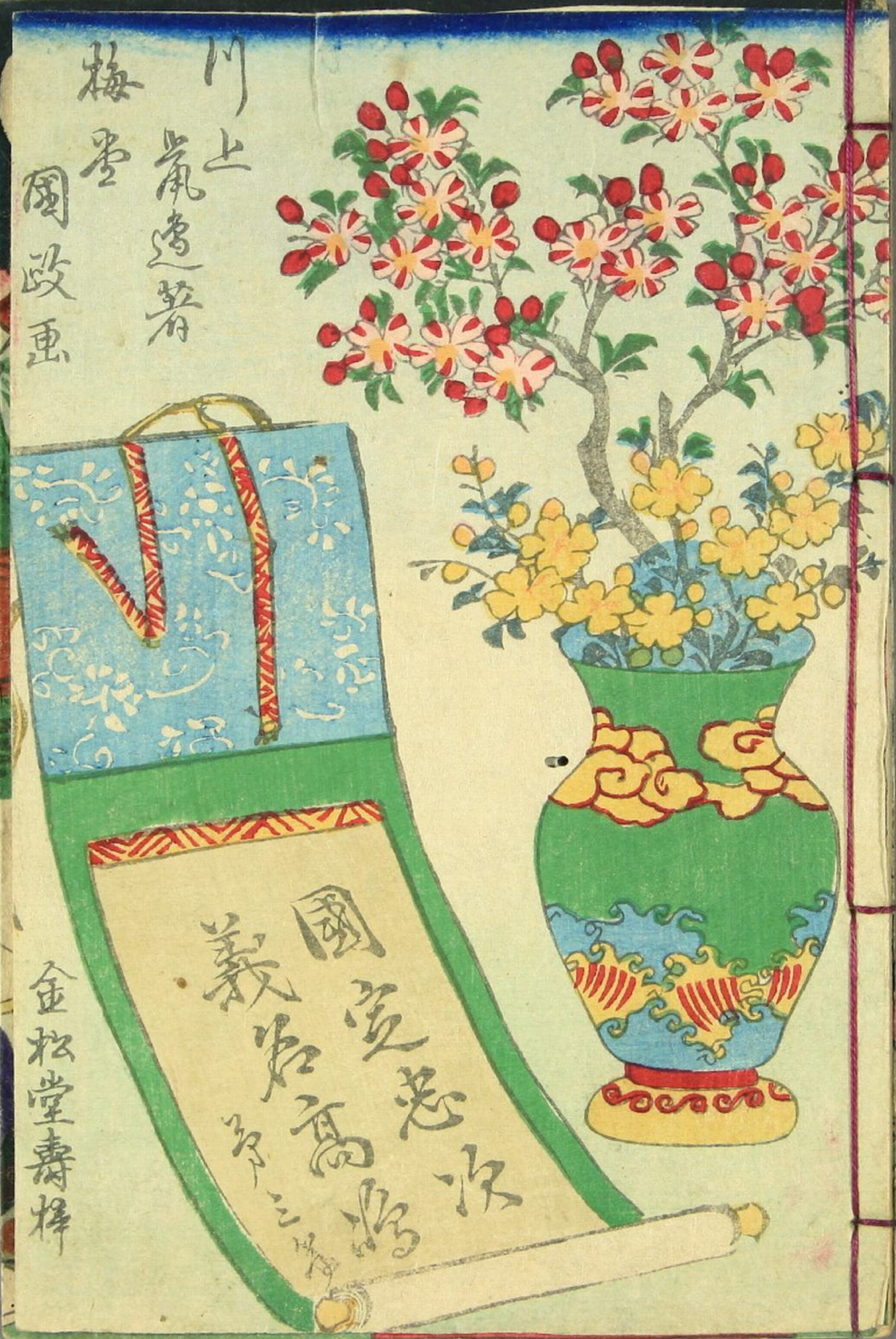
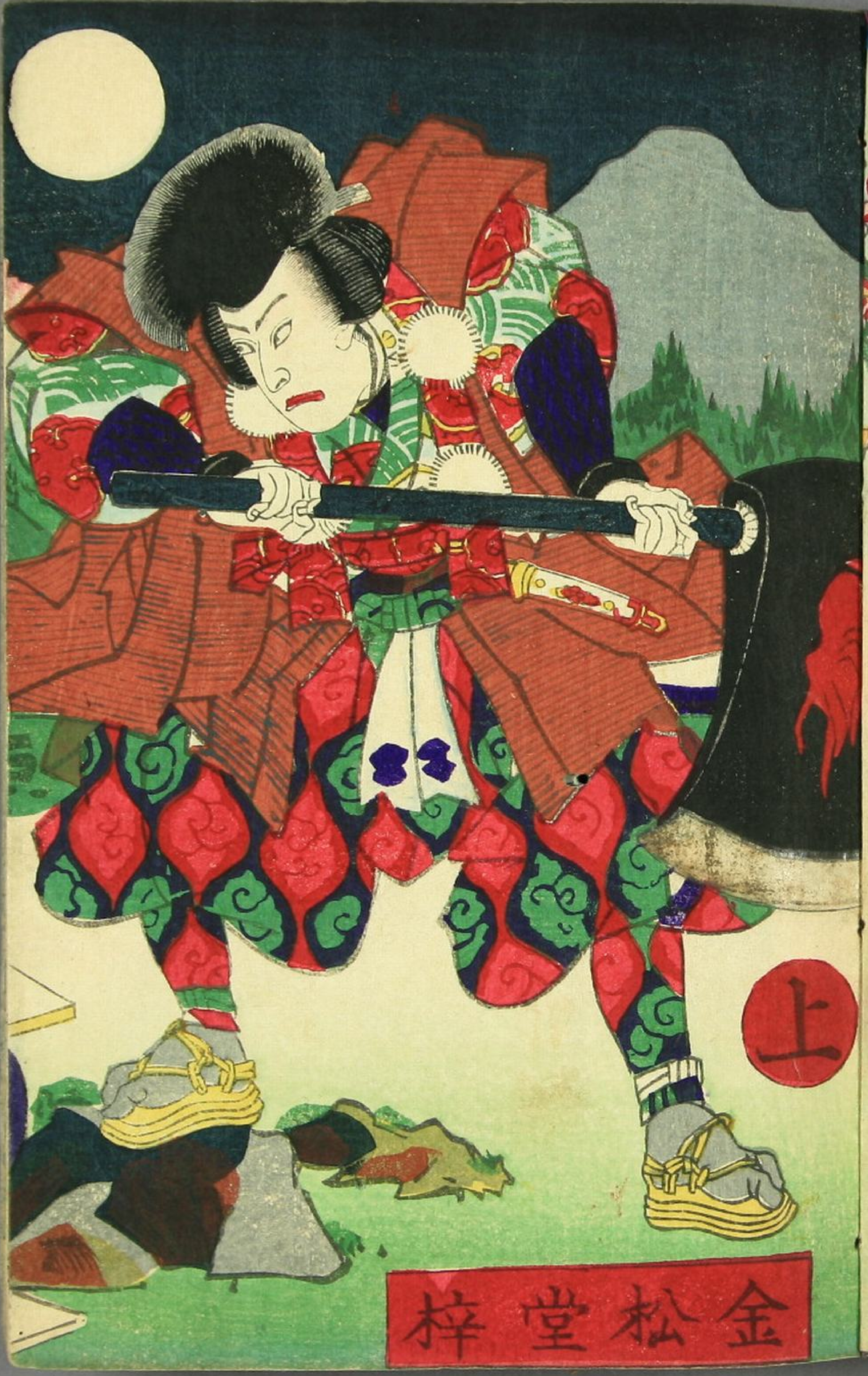

國家忠次
義君高鶴
芳三

川上嵐邊著
梅堂國政画

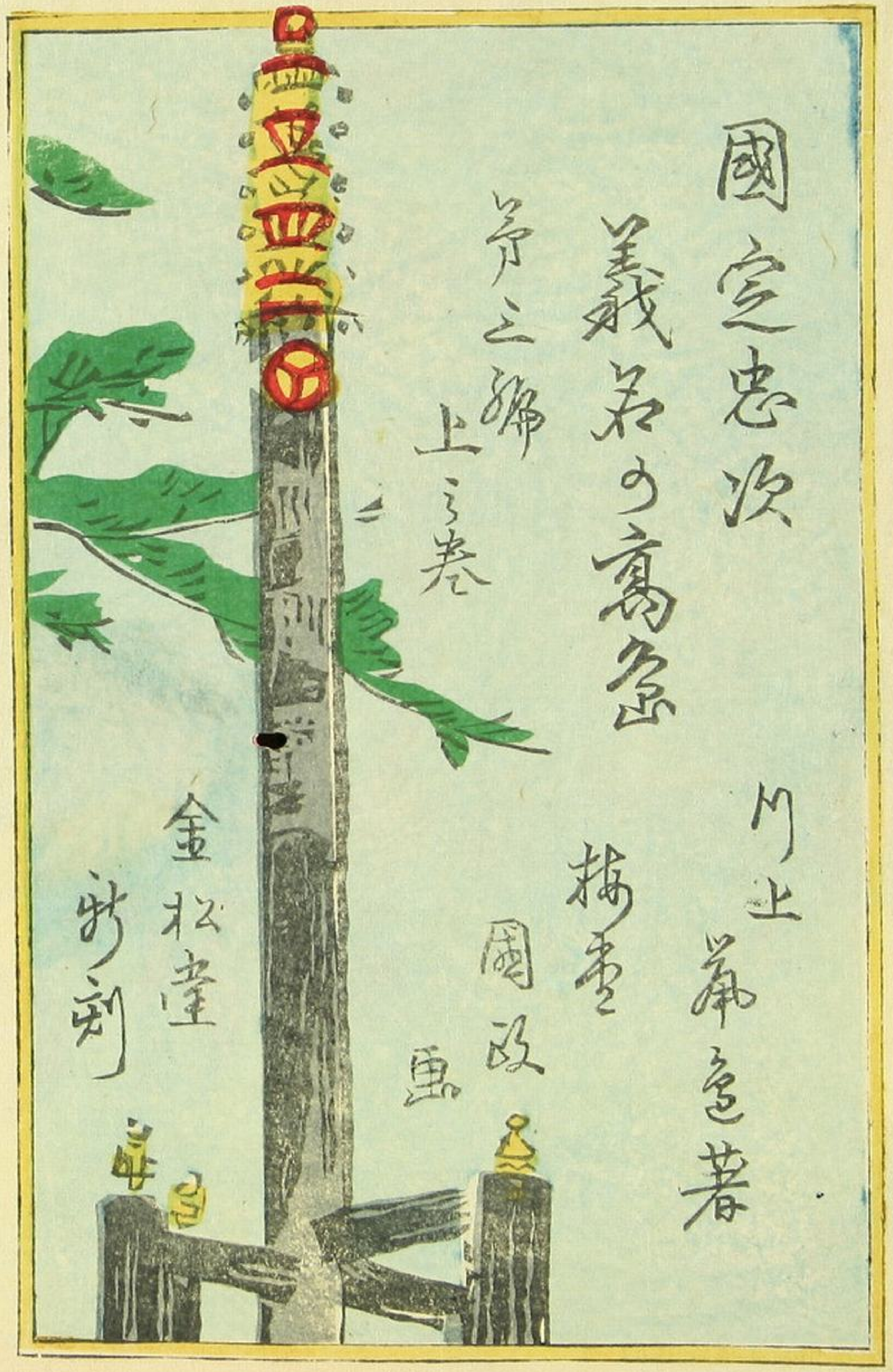
金松堂壽梓



金松堂梓

A485
3

48-8213



國定忠次
義名の高島

第三編
上之巻

川上　鼠邉著

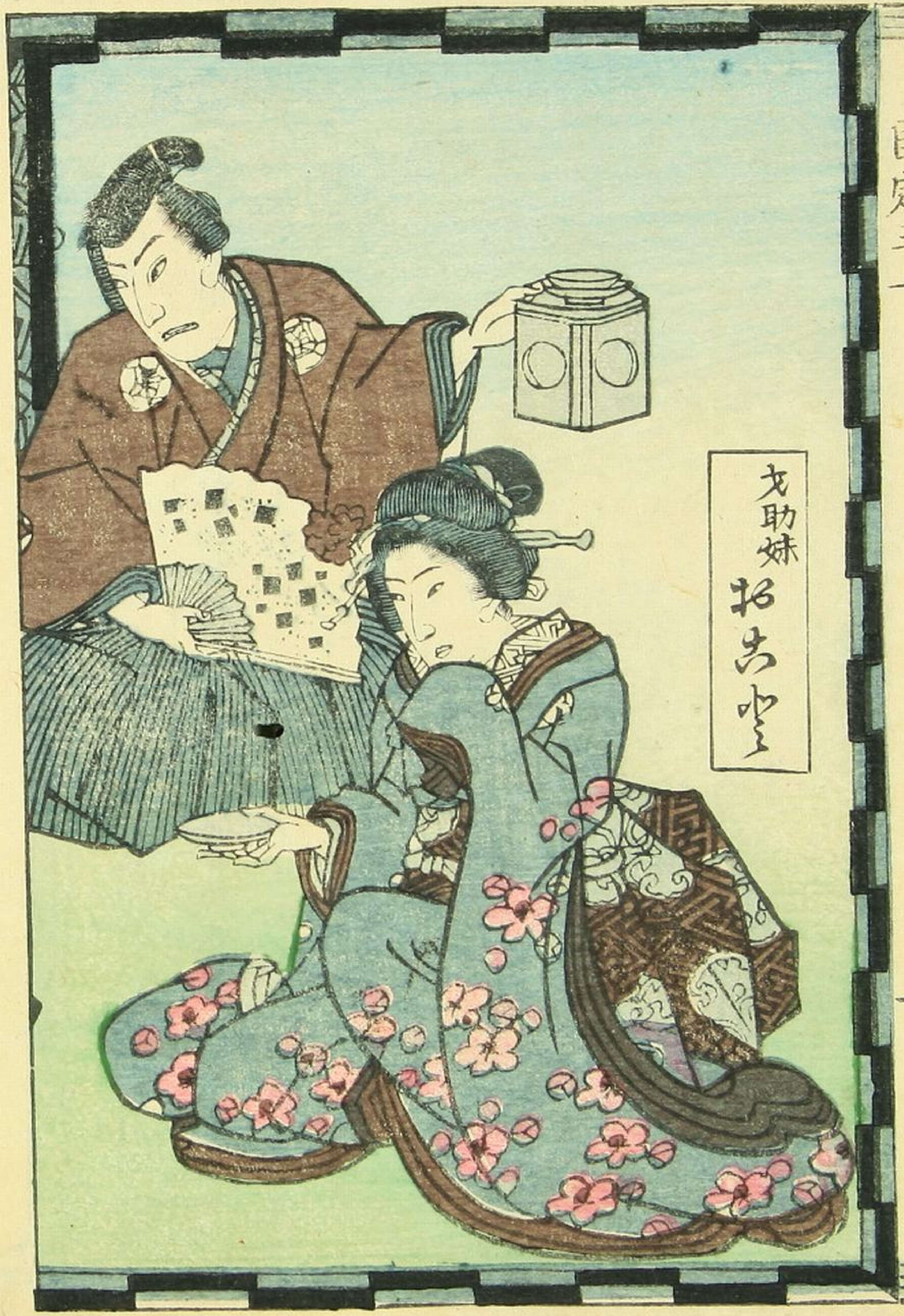
梅堂　國政　画

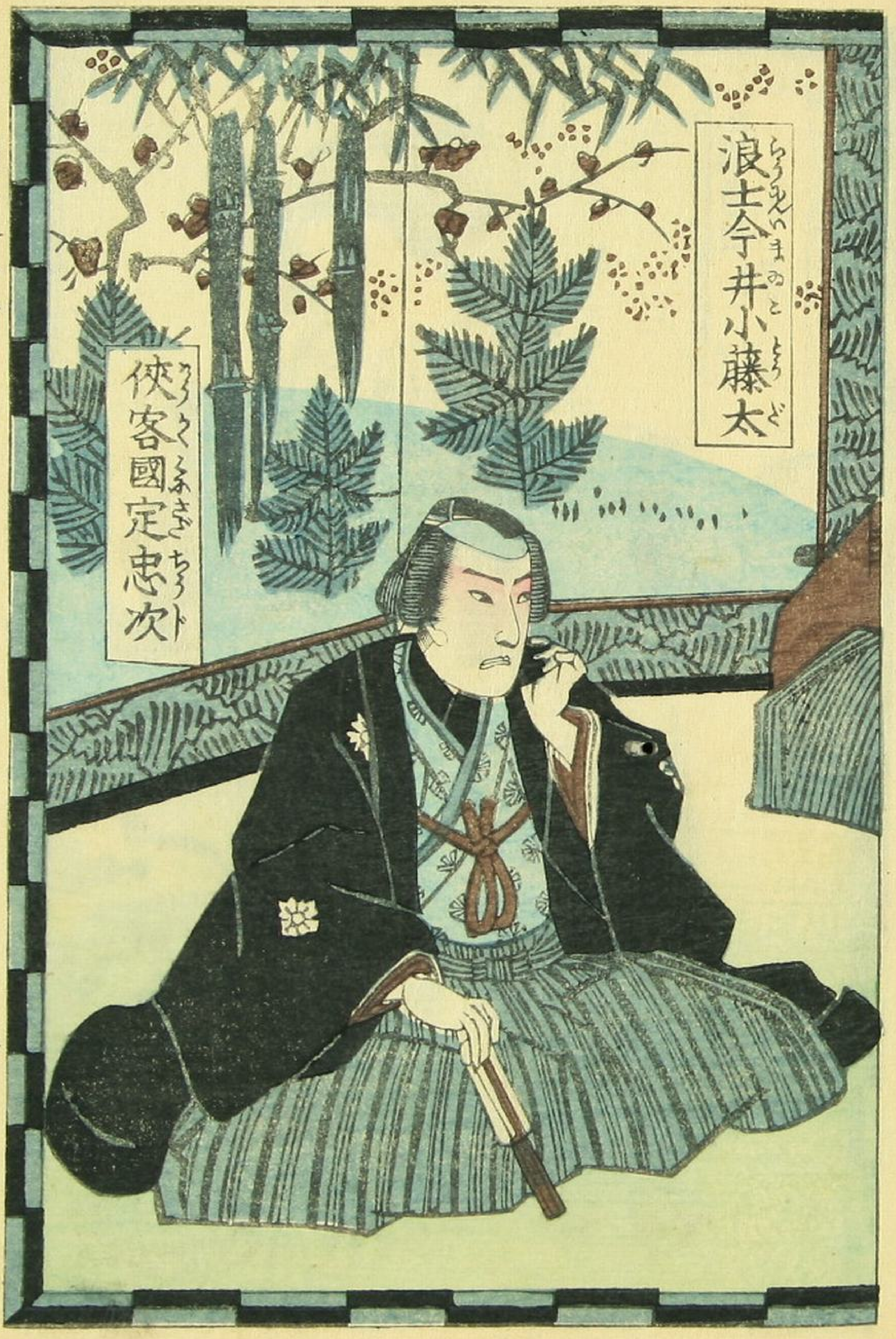
金松堂　新刻

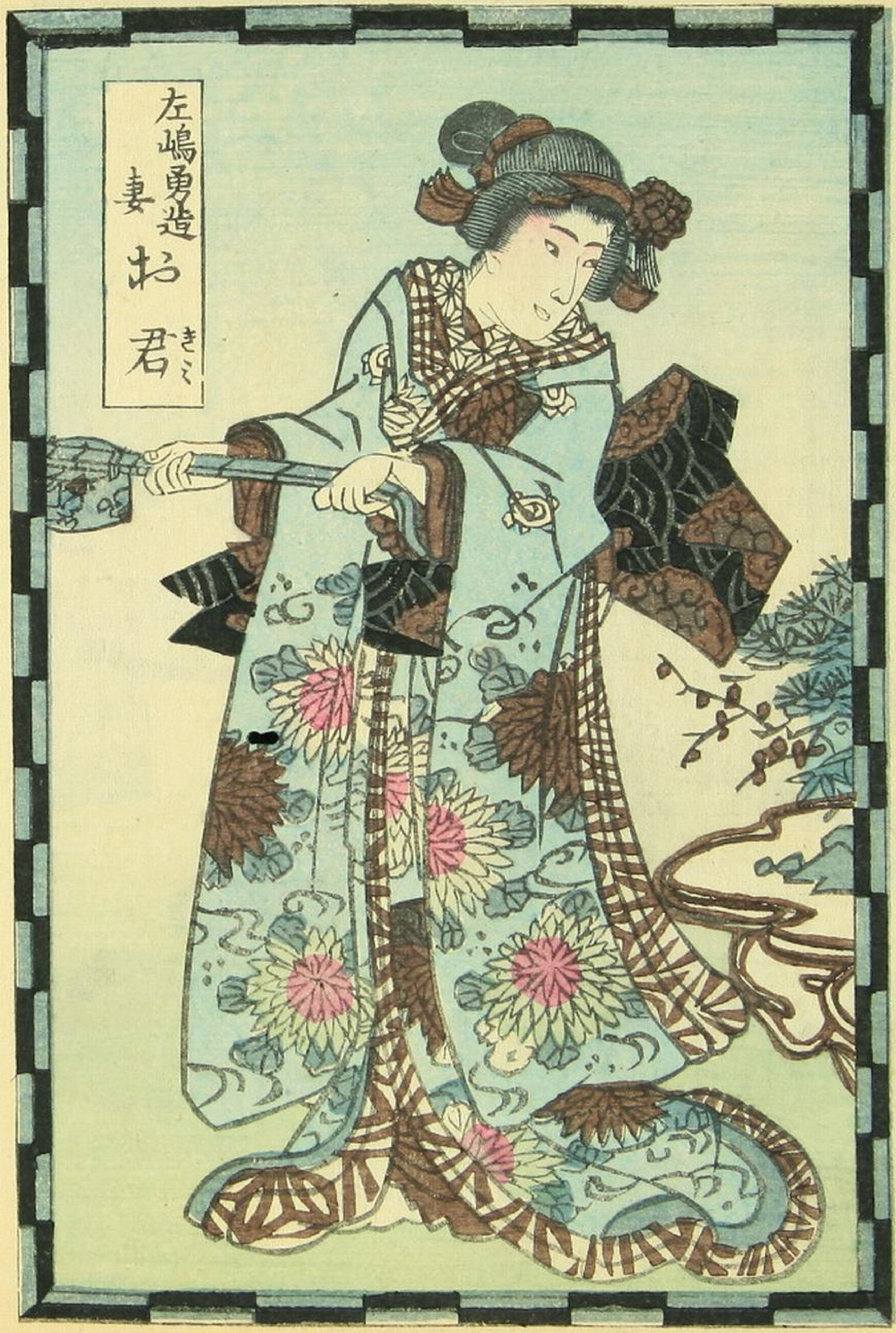
切附普請が相應のかまちくれ記者が職ままさ三編綴り我手初めに表題ハ古くも餘のを撰え又新しきも取交てどうやらかうやら二編ざけ雑作までも仕上りてイザ三編と硯箱取出し長柱と短よせんと筆の鋸りかりくと切初る仕事場へ金松堂の廻り來てきしき餘筋とむぎくつめびと五編よしてよし望むよ是非なくまゝも修行と足場我のけ棟梁なしの我儘作り浮雲仕事のダイカグラも萬歳樂の大尾迄手抜の場處ハ見好者方の御曲尺を願ふ鑿

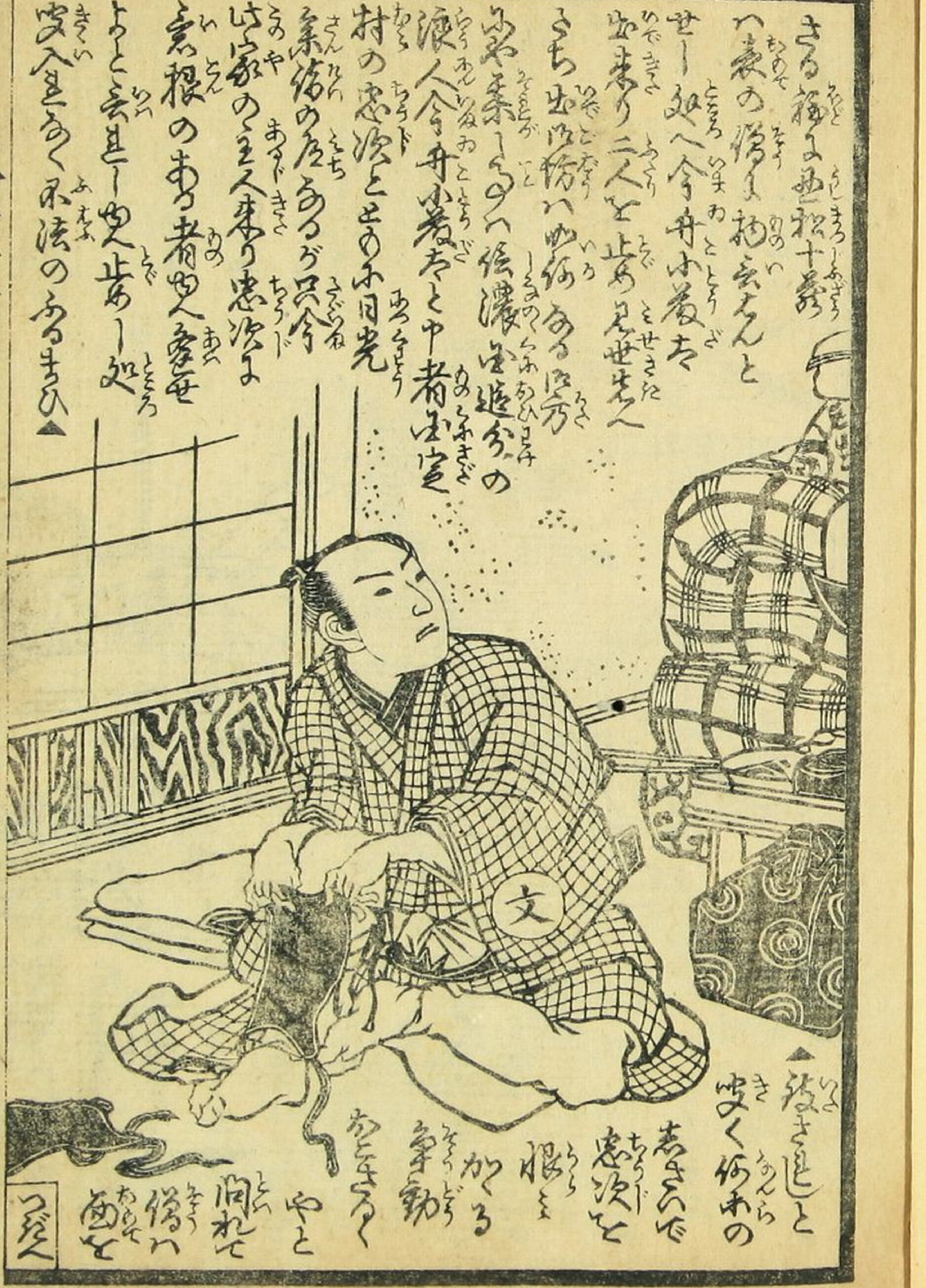
明治十三年第三月

川上鼠邉記


戈助妹
お志づ


浪士今井小藤太
侠客國定忠次



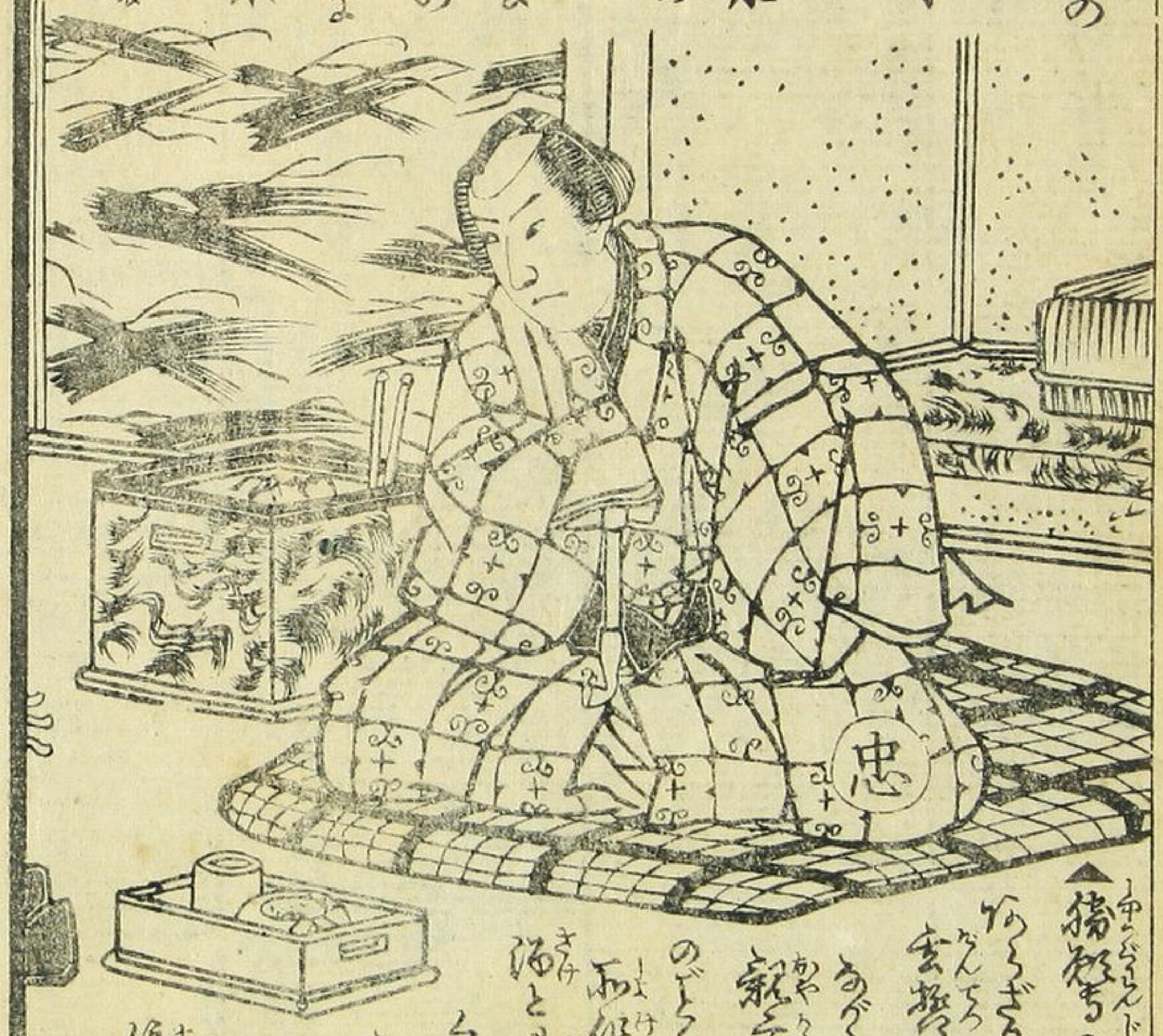


さる程に丑松十蔵は己の傍は神気なんとせし処へ今井小藤太出来り二人を止め足世出之へうち出汝等は如何なる所存ぞ我等こゝへ信濃生遊分の浪人今井小藤太と申者也定村の忠次と云は日光参詣の店ある所只今此家の主人来り忠次は意恨のある者也又金子よつて云且て其共て処忠入是なく不法の事まで▲

▲彼是と聞く何等の者をも忠次を恨みかゝる争動何とまろくやと問れて答れ面を

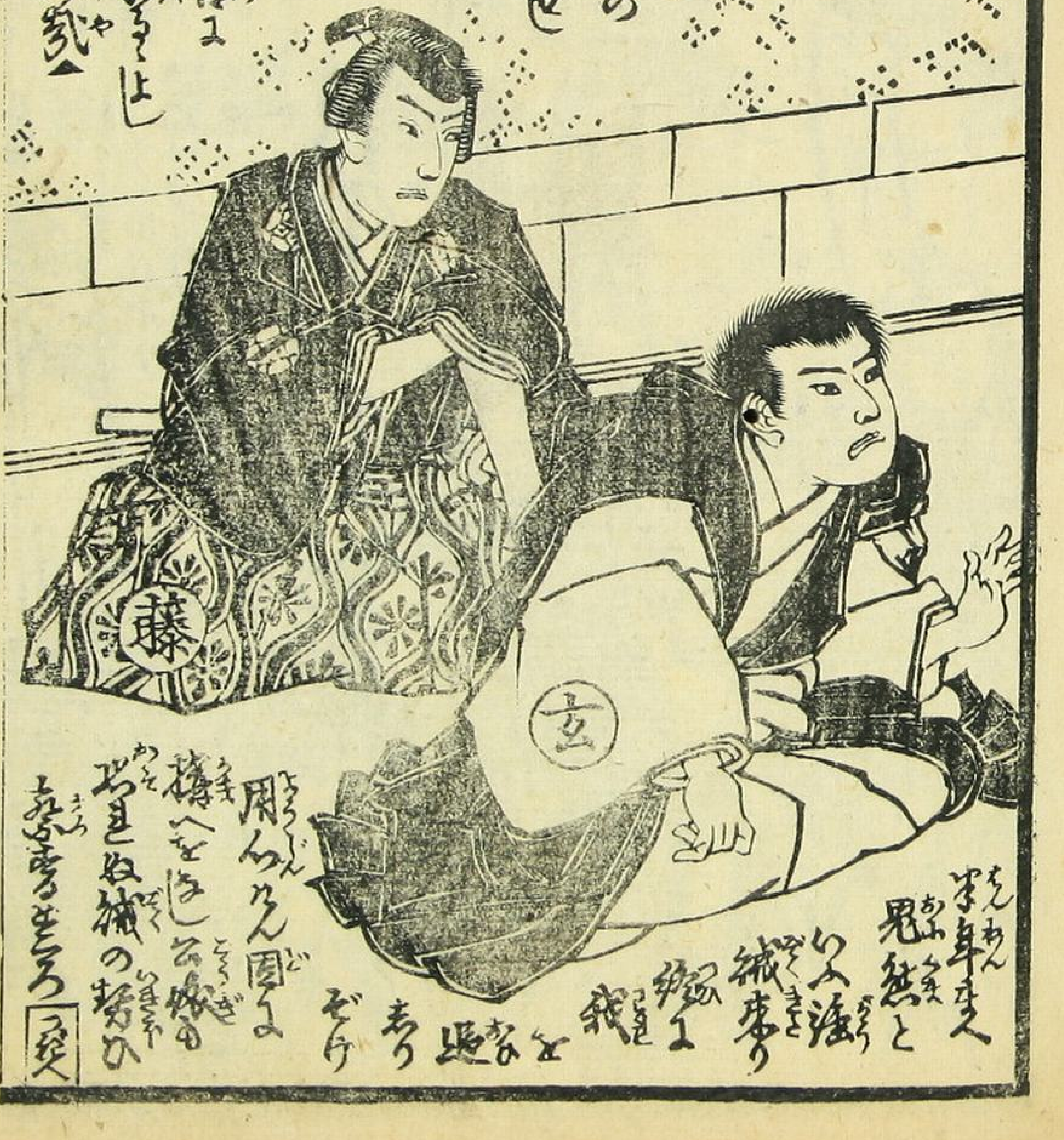
つゞく

つゞき　斯とはしらず二人の若者殺さんやり小腰をかゞめ今井に向ひ之はもし当ねその仰せ忝偽りは閻魔の玄猪と申者当今此村八幡の社のとよ驚しき今家名の若者が酒宴を催す玉宝の親分が来く久保の織に敷物とうけ奈良の内へまじりとなりあゐ



▲博奕ちのお役儀なれハかゝざりしと問ふに玄猪ちゝ殺さゝあゞら何何かも親分の御推量のごとく博奕ちの下地なりしが酒と博奕に身を持崩しより此処かゝ奉公いたし若久保の織と逃げ住家を捨てさうしる

りり親方の面会し中へきまで細ある史つぎく此家へ参り当面をや入まし狂人よと気合の悪い遠族の命の名の御目も初めてるらく親方を驚る色悦ようまふ顔色なれと宝を取る体は顔色をみる小家も息をはなく息をつけ玄猪を一の人振る酒宴を悪に忠次が玄猪に岩の中の嘉のに閻魔と云ふとし今井氏の噂ばかりなれ▲



宇年来鬼熊と此法織をも魔えて我を返る ぞけ 閑くん園にも悪念を起し玄猪の恐ろ織の勢ひ 喜之えろ

つゞき親方の島を奪ひし由

其群あつまりて親方の又左衛

に怪我をさせて気を逐ひ

擁せし怪よ気上せり玄

なれども岩窟は猿なる

又赤城山のつゞきにて

樹木も繁く鬱々たる

究竟の要害へ

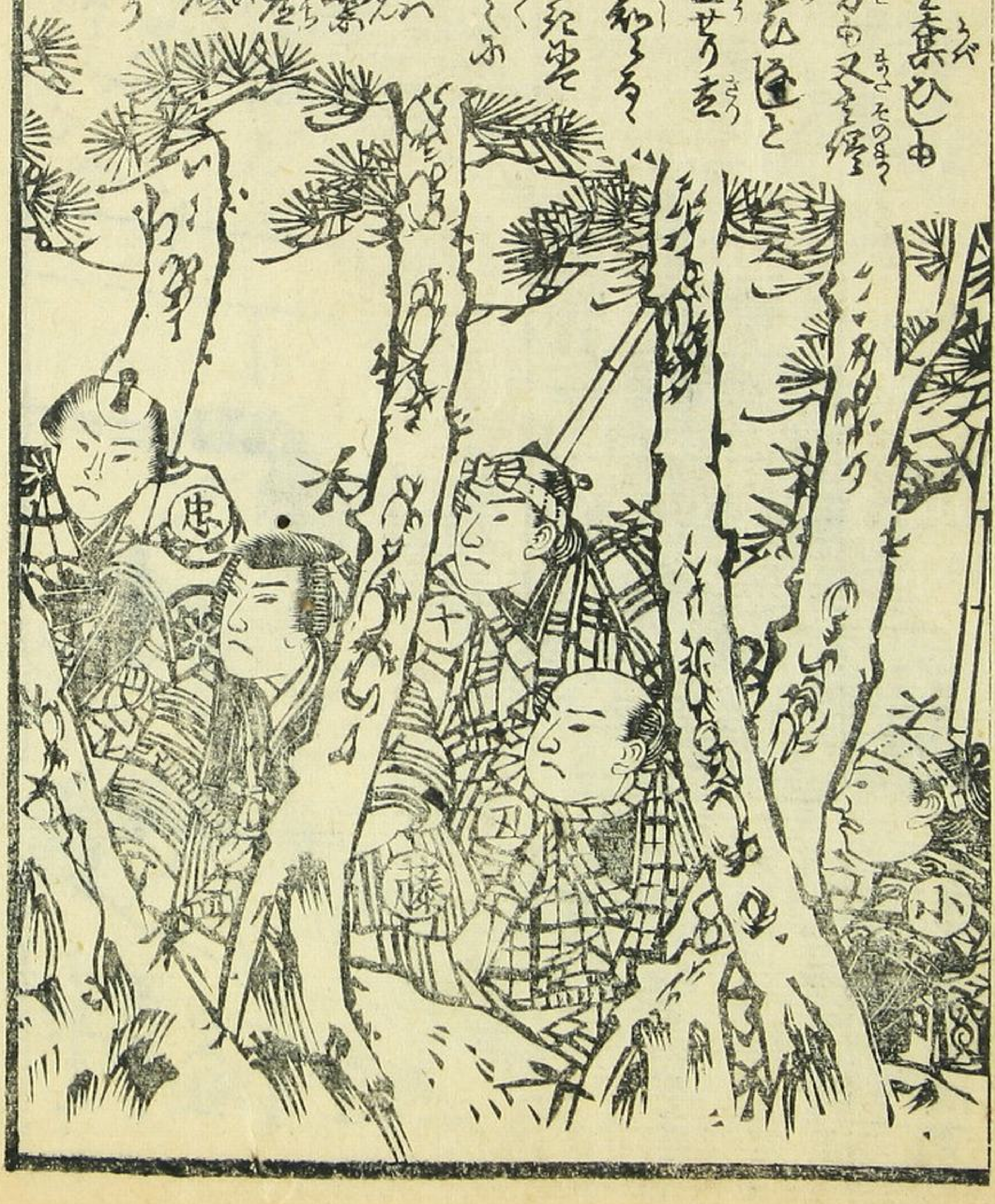
住し如何土地の案

内を能く知りたる處

忠治中天べき山館

小屋を設ゆの間より

忠治は善き者を



の縁り家元を推察

なし全盛を

忍びつゝ下しれ

酒のまこともよく

盃をくさむけ

折から新手なる備も

万屋文治郎は

忠治が安くの役つるぎ

を侍怖元の酒宴

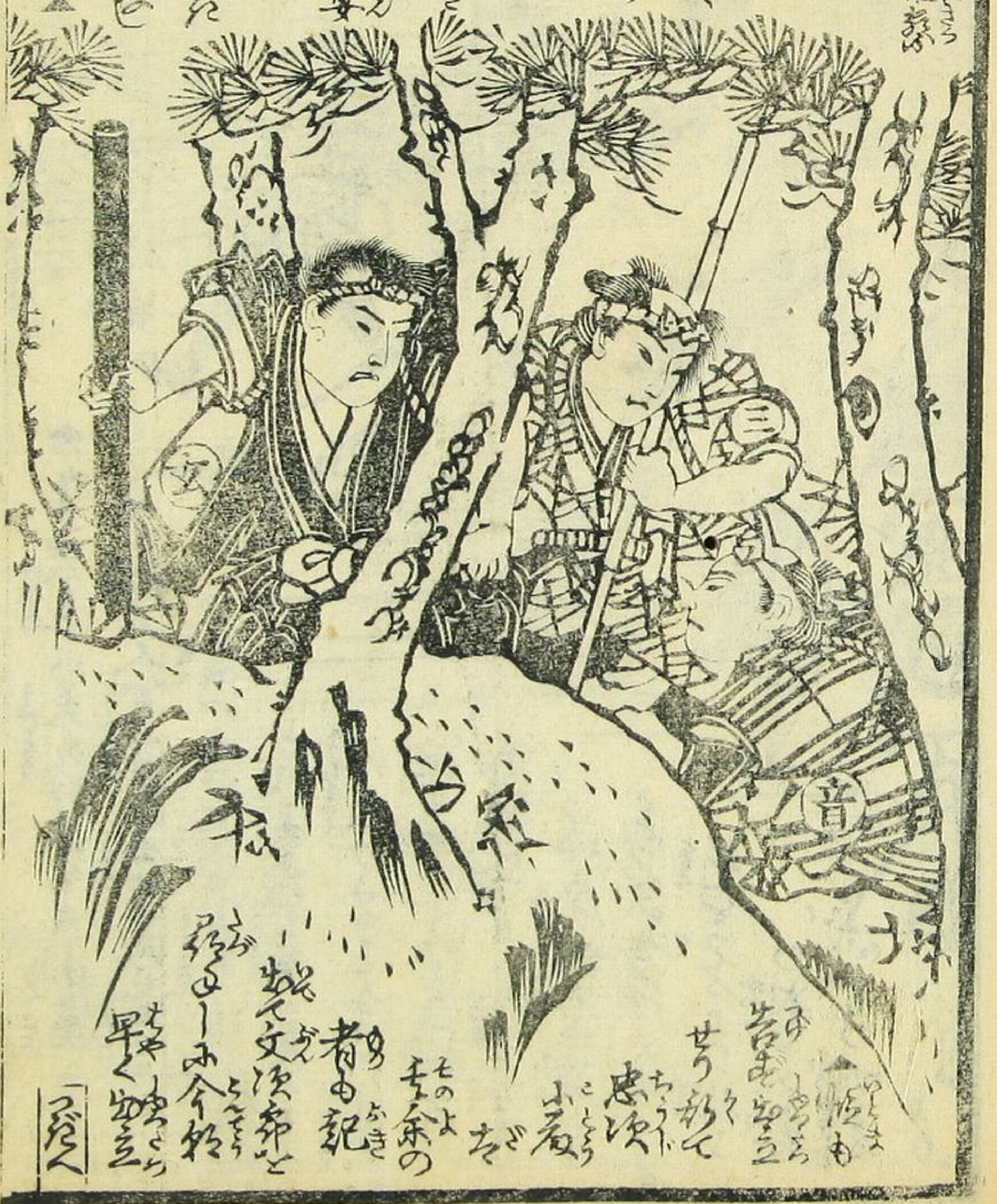
の杉大力多数の

玄藝が来るふつれ

既に一綴安諸也

そのよくてうまく

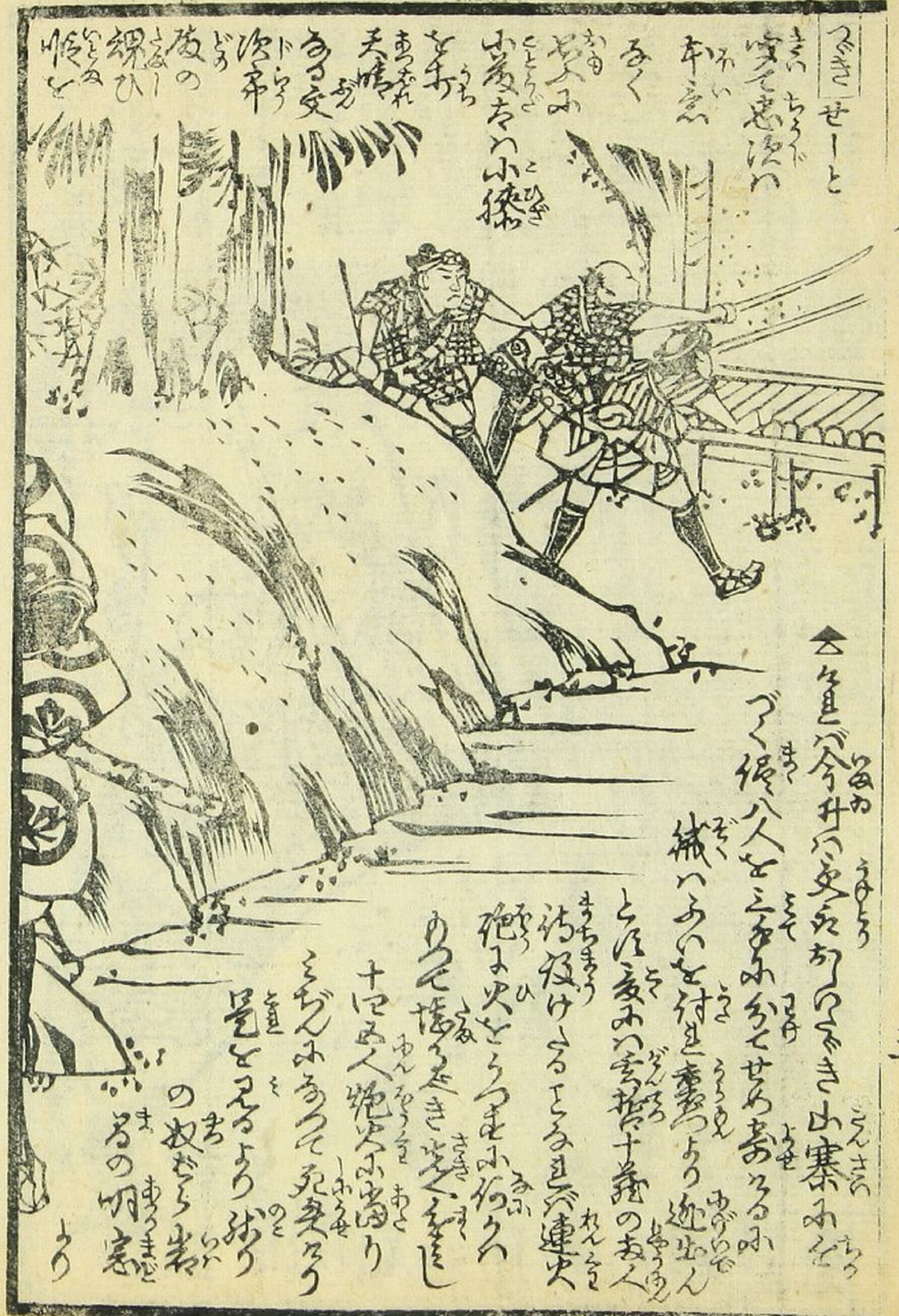
手羽立つ鋭箸くや



一旦も若き者を立せう行て忠治小屋ぞこそ

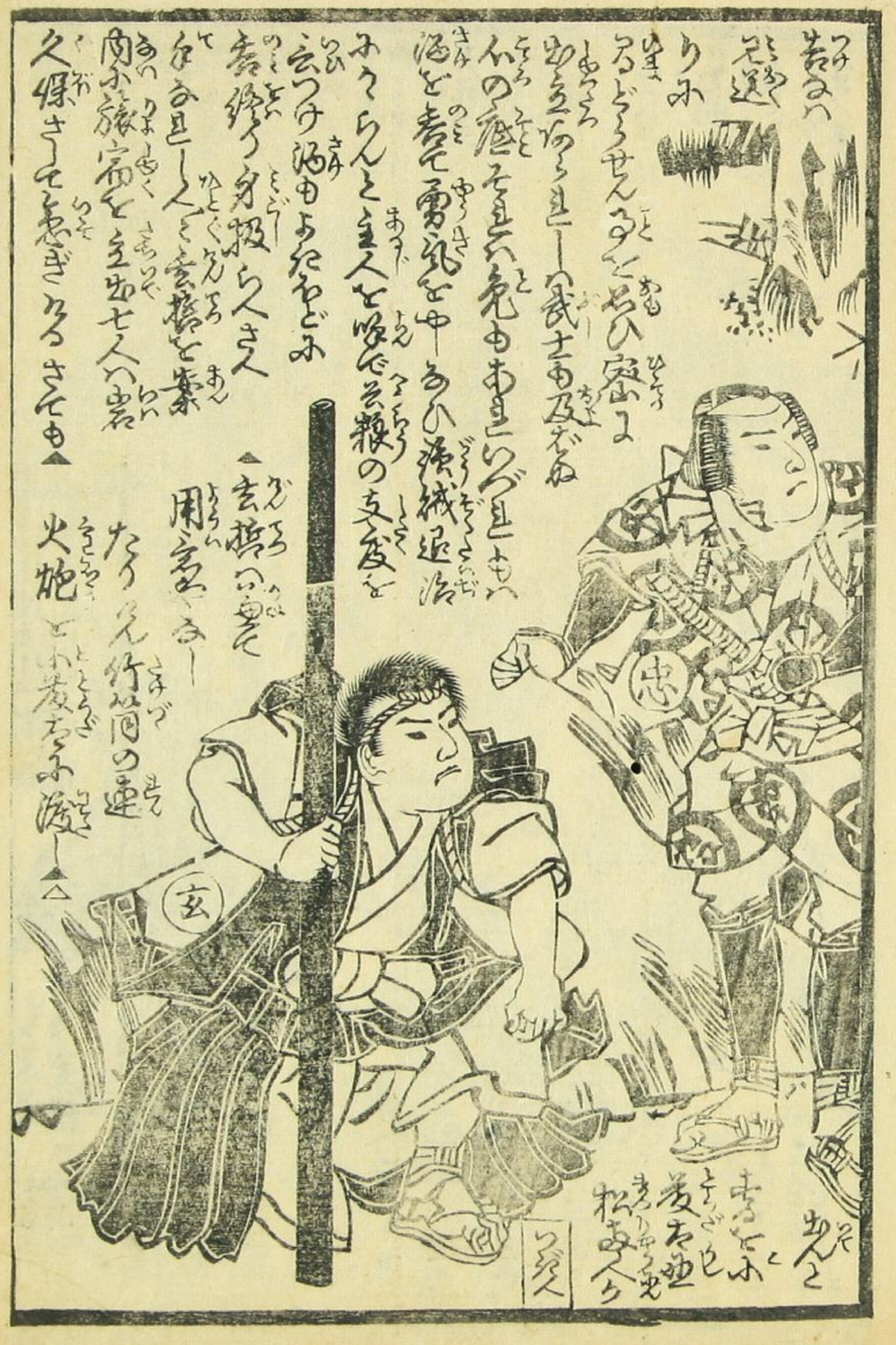
その夜手余の者も記き文治郎と縁らしみ今朝早く出立

つゞく



〔つゞき〕せしと
實で忠次ハ
本意
なく
名みハ
古藤右ハ小膝を
うち
天晴なる
父ハ
ドウ
次郎
殿の
なし
親ひ
かたみ
快を

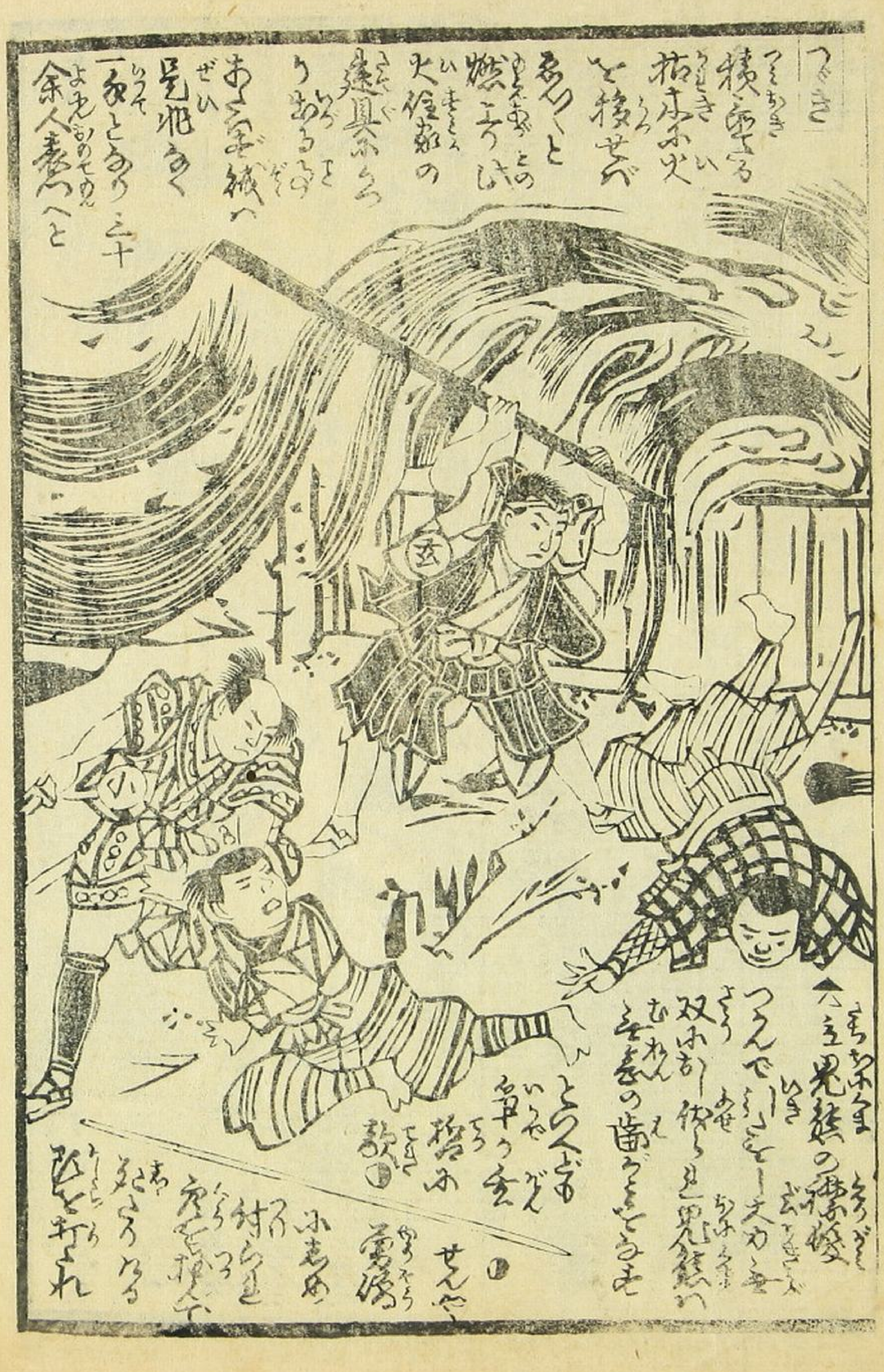
△扨ハ今井ハ更なりつゞき山寨に伝ふ
づく保八人をみちにむかへせめ来るに
織ハあいを付て裏つより逃出ん
と屋表にハ玄蕃十蔵の両人
待設けゐるとも足ハ連火
砲を火をうつ其まゝに行くハ
めつた撃の其先へ進ミし
十四五人砲火にあたり
ことごとく死果たり
是を見るより縦に
の叔父かきまで
為の切害
より



つけ若者ハ
足早く逃
りに
生ま
なかなかせんかたなしと思ひ密に
出立ゆへ主ハ一ツの武士も及ばぬ
人の危急を見も知らず
酒を呑で勇気を中にたのミ濱織退治
みだらんと主人を呼で兵粮の支度を
云つけ酒もあたへどに
森縄を身搦ら人さえ
身分ありし人を玄蕃を案
内に旅宿を立出七人ハ岩
久保さして急ぎけるさても▲

△玄蕃ハ早くも
用意なし
たゞ竹筒の連
火砲を忘れず腰に添へ▲△

出そと
まさとふ
菱右亟
松亭人々



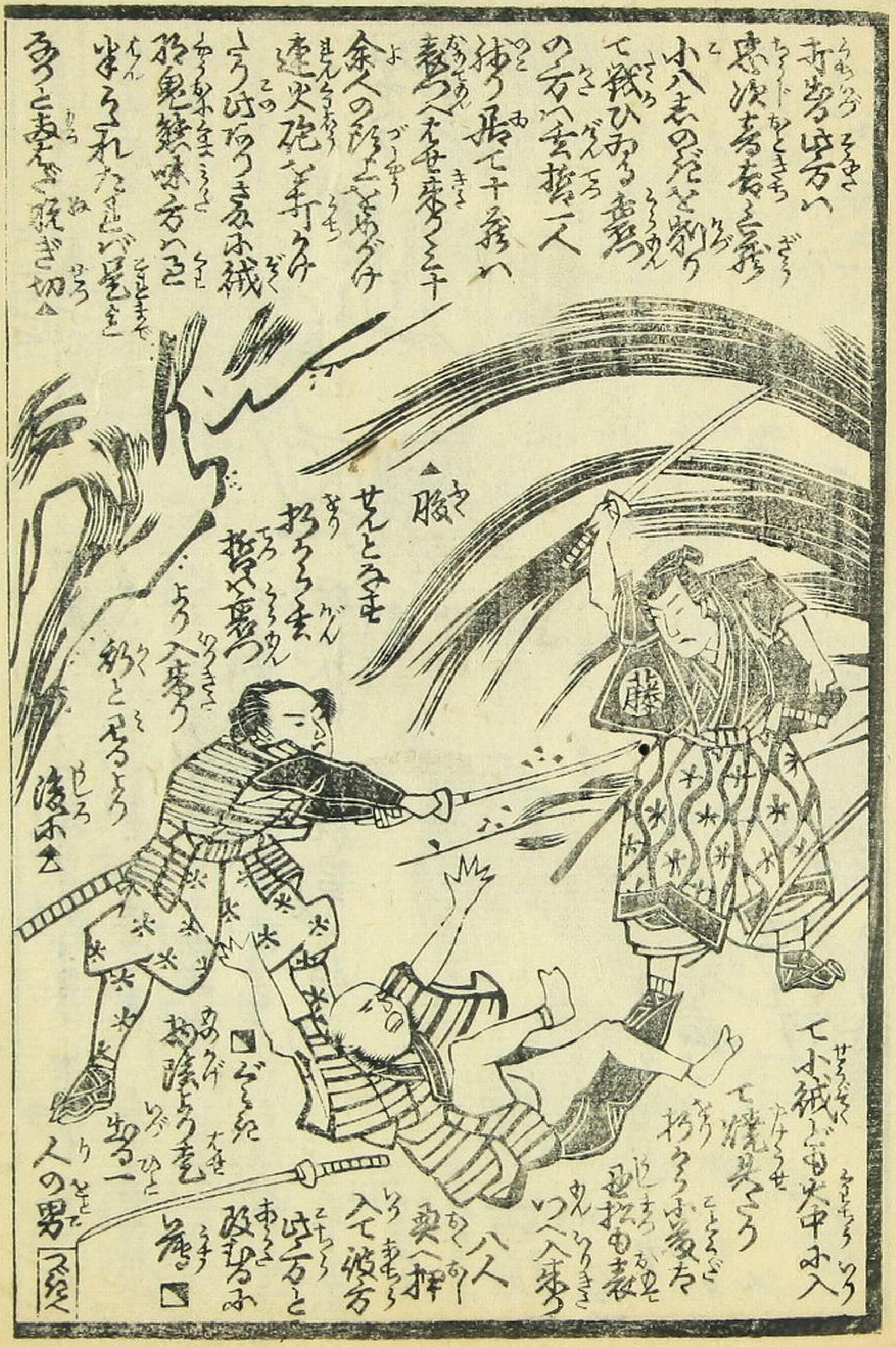
つゞき 積重ねたる枯木に火を移せば ゑひ〳〵と燃上りし火焔の建具に移らうとするうち あまたの賊へ是非なく一角となり三十余人数へと

▲六三鬼熊の稗楼 つかんでくるりと大力無双 双ねおし伏ら王鬼熊は むねんの歯がみしてなき

とらへんも いやでん 王手を指 敵

せんや 蒙

小悪め 村らを 容を掴んで 起らうとる 頭を打れ



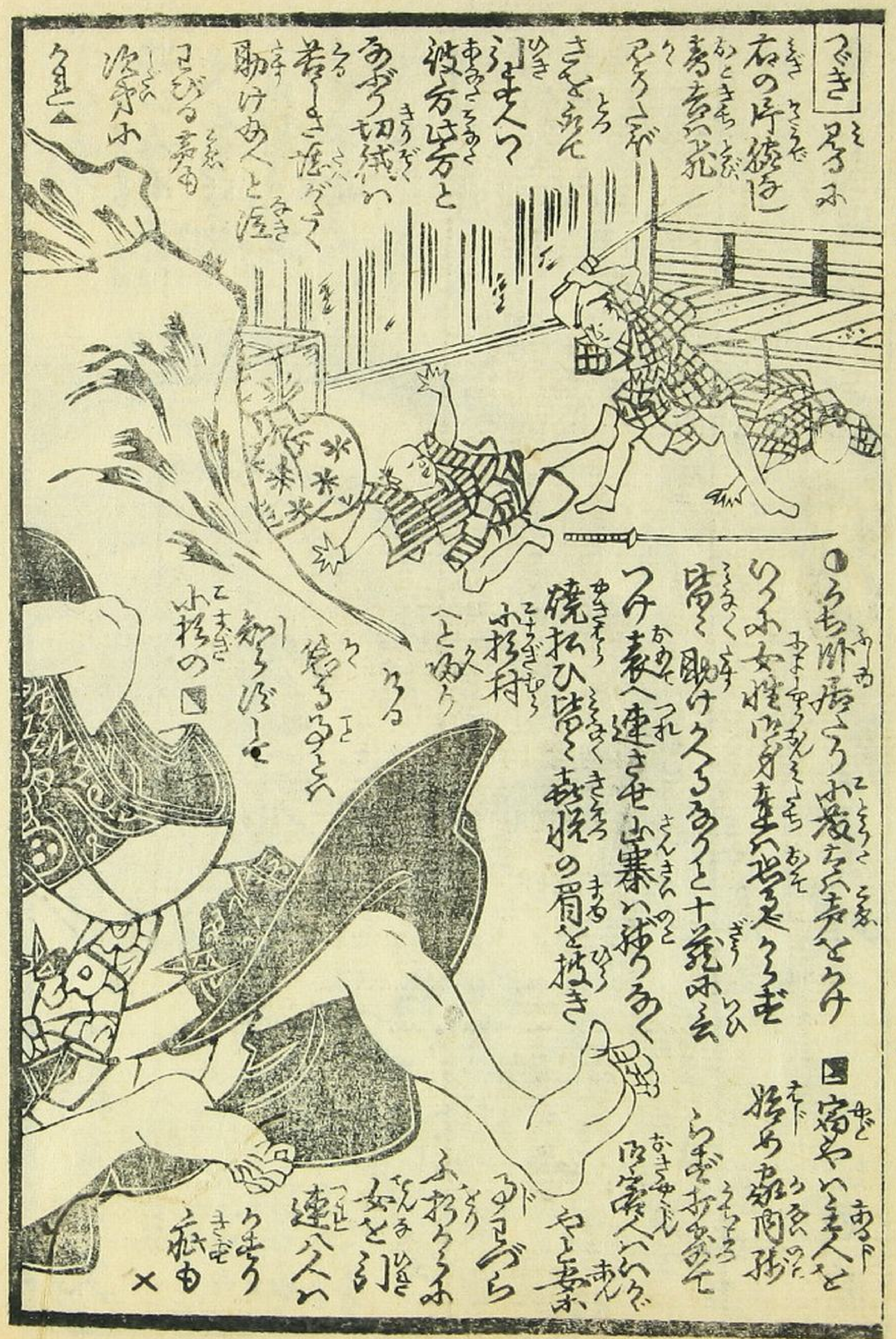
浪花方此方へ 忽ち駈寄る 小八者の兜を割りて戦ひけるが 雲の方へ雲掛一人 神の居て千番へ 義つくへ来る三十余人の頭をあげ 連火砲を手にうけ 云ふより 猩鬼熊方へ 半ろされたれば 多くと無き切▲

▲勝 せんとする 打ちかゝる 旗を 入来り 射とするより 後ろ玉▲

七小賊が中に入て焼具くろ 打かゝる者を 死に切て 四へ入乱 八人 奥へ押入て 彼方此方と あまる敵を斬る者▲

▲ぐるりと 数多の者を 当る一人の男

つゞく



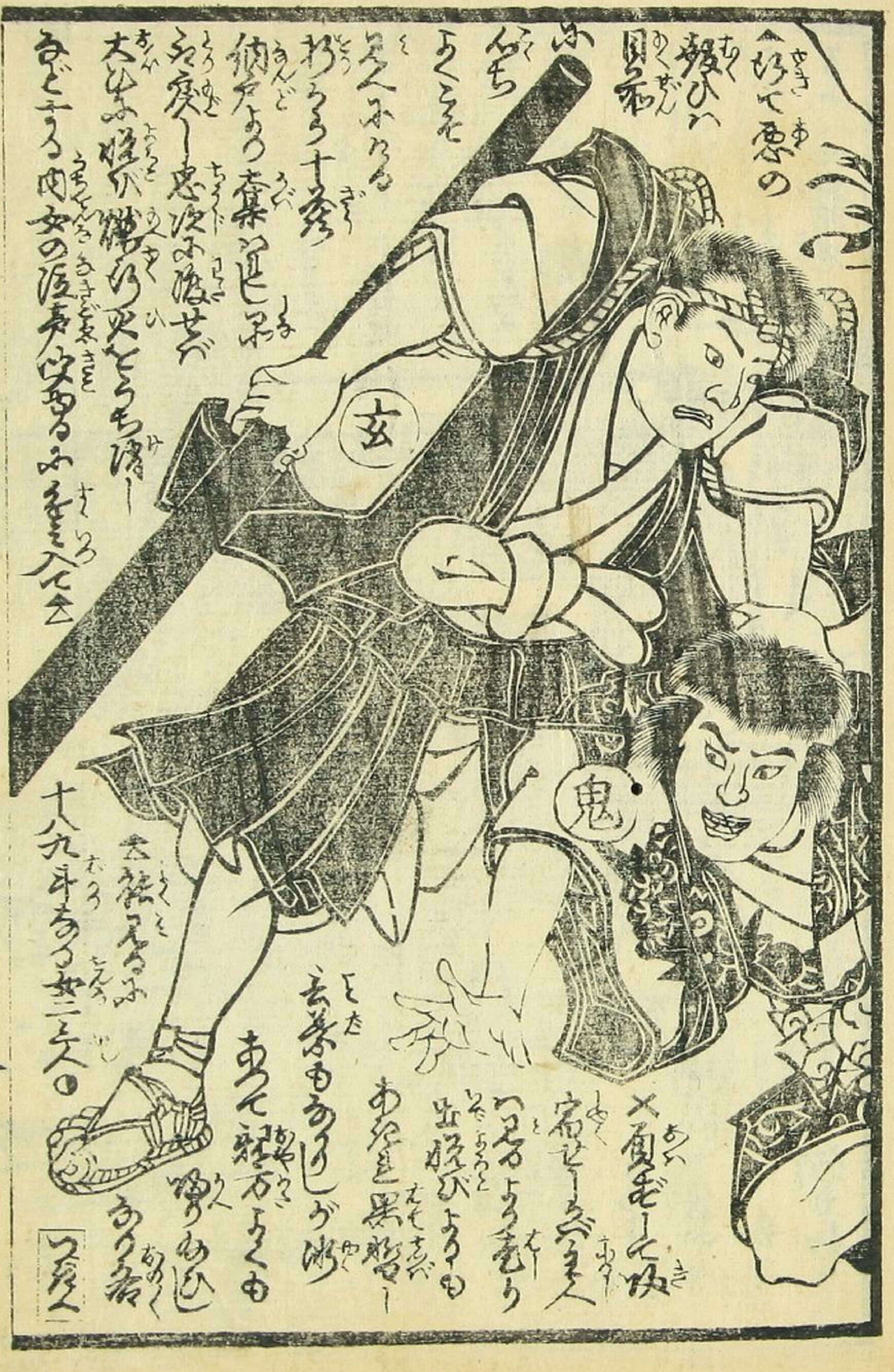
つゞき

そ見るに右の[illegible]は[illegible]と[illegible]さんとせし[illegible]彼方は我と[illegible]切結ぶ若[illegible]助けぬ人と[illegible]

▲

●[illegible]声をかけ[illegible]女[illegible]皆々[illegible]十方に云つれ[illegible]連れ山寨へ[illegible]焼払ひ皆々[illegible]の眉を抜き小杉村へと[illegible]小杉の▣

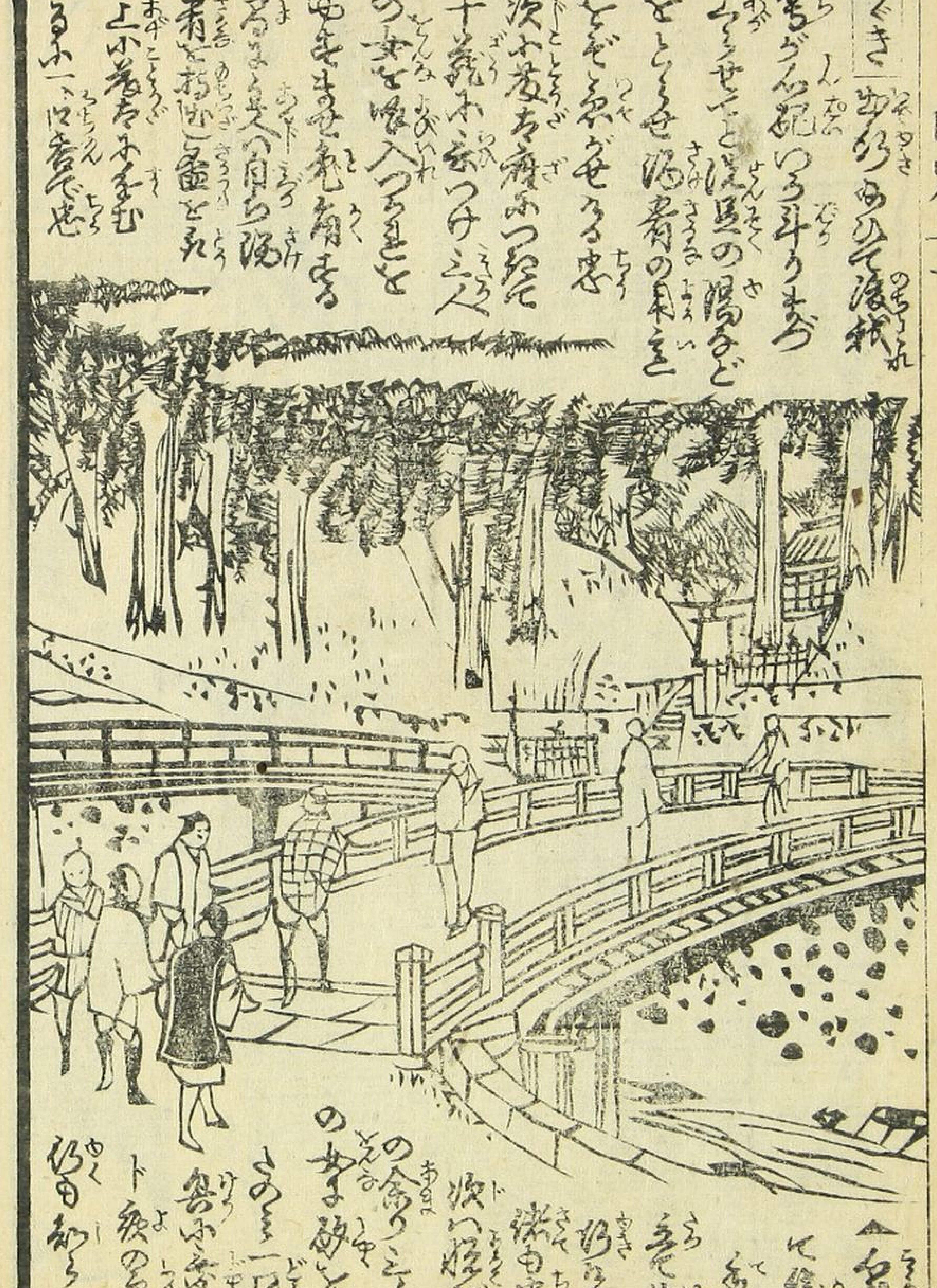
▣ 宿やは主人を[illegible]やと妻[illegible]女を引連れ人[illegible]×



▲さて悪の報ひは因果に[illegible]よくこそ思ひ知れる[illegible]十蔵[illegible]忠治[illegible]十八九年ある女二人●

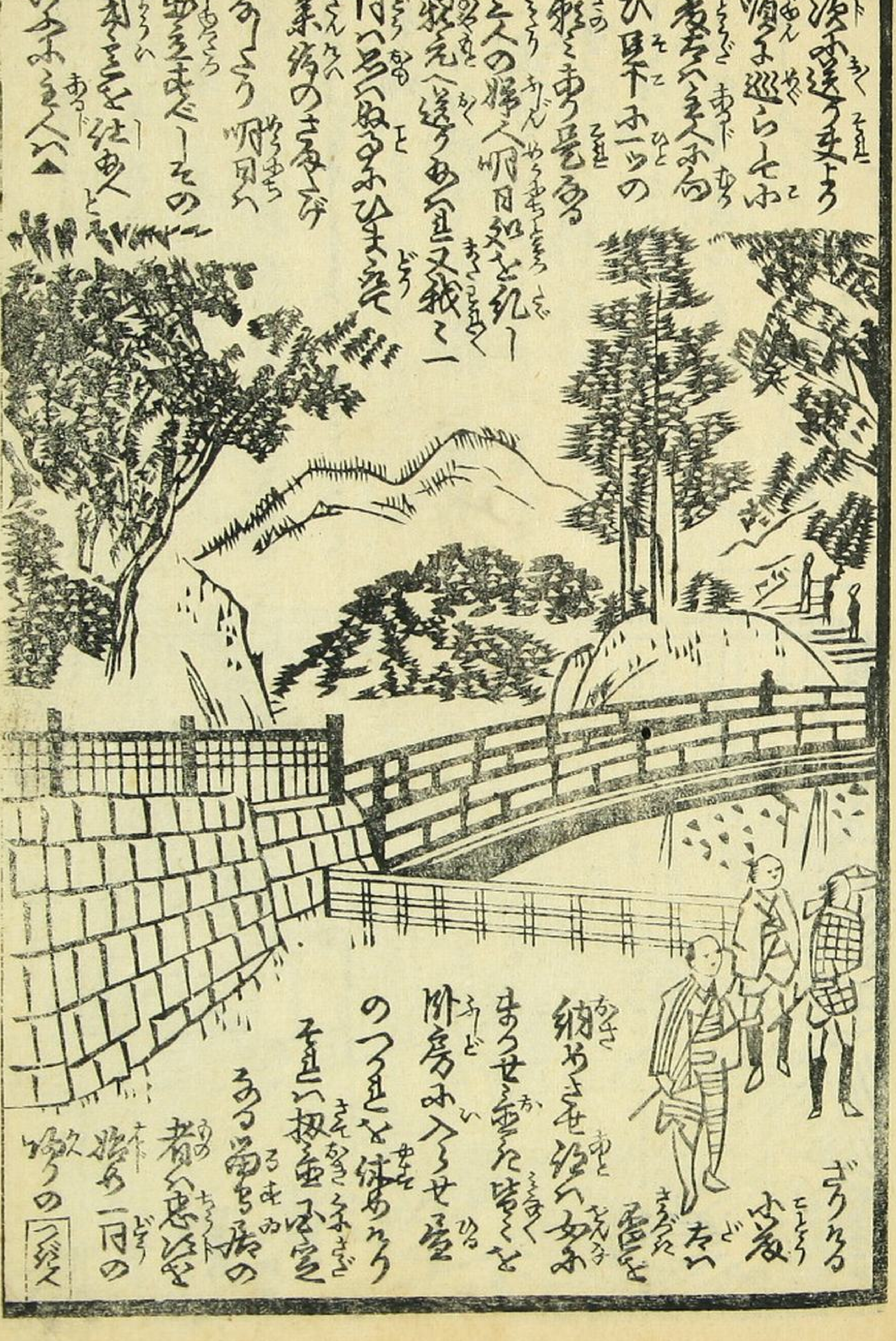
× [illegible]宿[illegible]主人[illegible]

つゞく



〔つゞき〕出行やへ浅枝
ら人な旁ゲ山跪いて斗りもぢ
ふらをせてと浅見の陽子ど
どとくせ清者の果ミ
とぞゑがそる忠
次ふ苦ち森ふつ?て
十義ふ?つけ三人
の姿を暗入つるとを
也まを浮色ありる
君まら丈へ自ら浅
剤を?面を見
よふ若ち[illegible]手む
るふ一ハ[illegible]で出

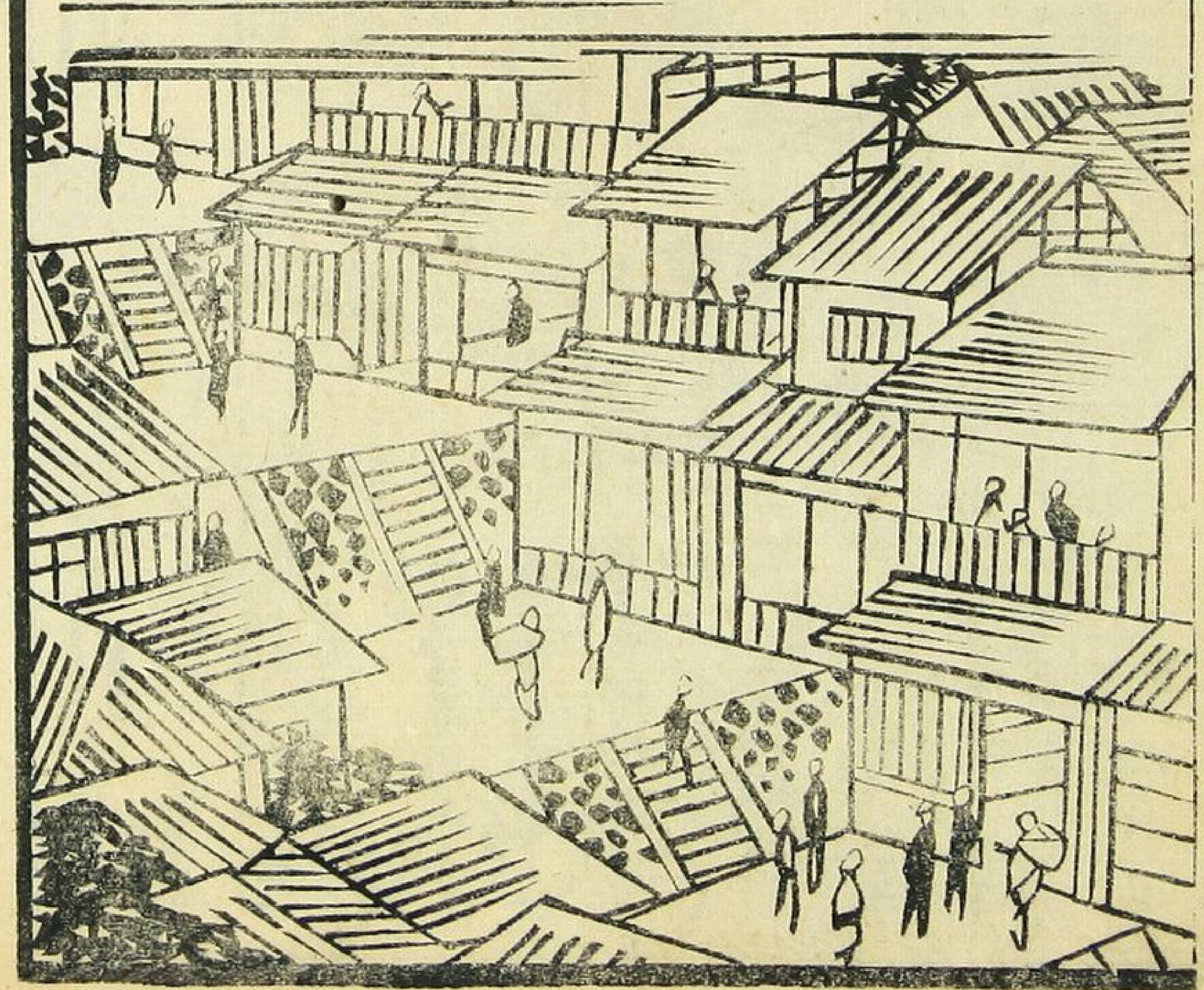
△白雁
に鍾
て文
ろえ出
きみうり
さそ浦田忠
次へ娘び
の余りこ人
の女子好と
この一間
けらふ胡蝶
ト炙の丈
行目知ら



次お送り来よう
頃まで巡らせゝふ
若ちへ来人ふ為
ひ果下ふ一ッの
船を虫る是なる
三人の婦人明日知を紀し
釈元へ送りあ至又我と一
日へ号へぬるふひま免
来待のさゑびる
あつくう明日へ
出来まべしそのう
周ゑを往来人と
らふ来主人へ▲

ごうる
小夜
たい
盃を
紛やよをせ給ふ女ふ
まうせ盃わたさくを
所亭ふ入らせ置
のつるとを仲より
夫ハ扱置ふ定
ある宿ち[illegible]の
者ハ忠浮を
勝手一同の
歎ゆりの〔つゞく〕

つゞき　かくてたゞ心痛も遂にハむねがふさぎと
喜三郎も毒するに小猿伝吉三太郎が死
其の後ハ兎角に心楽まぎらハしくとのゝ
苦しみるに此殿様風の心ちなりしが若
去悪事に染りしところ打身とあつさく
苦痛にさへ久しく孫勇造丸郎助
とも喜三郎を一緒に有保の温泉
へ湯治に行しがまづ初に十月
余りも久しく全く平癒となり
しかバ今ハ出立せんと湯宿を立出
しが帰りまで喜三郎へ夫相せしが
さしもづゝの身の家に行でんと
足を早めて出ける



官許
朝鮮名法
牛肉丸
大包代二十五銭
中包代十二銭五厘
小包代六銭二厘五毛

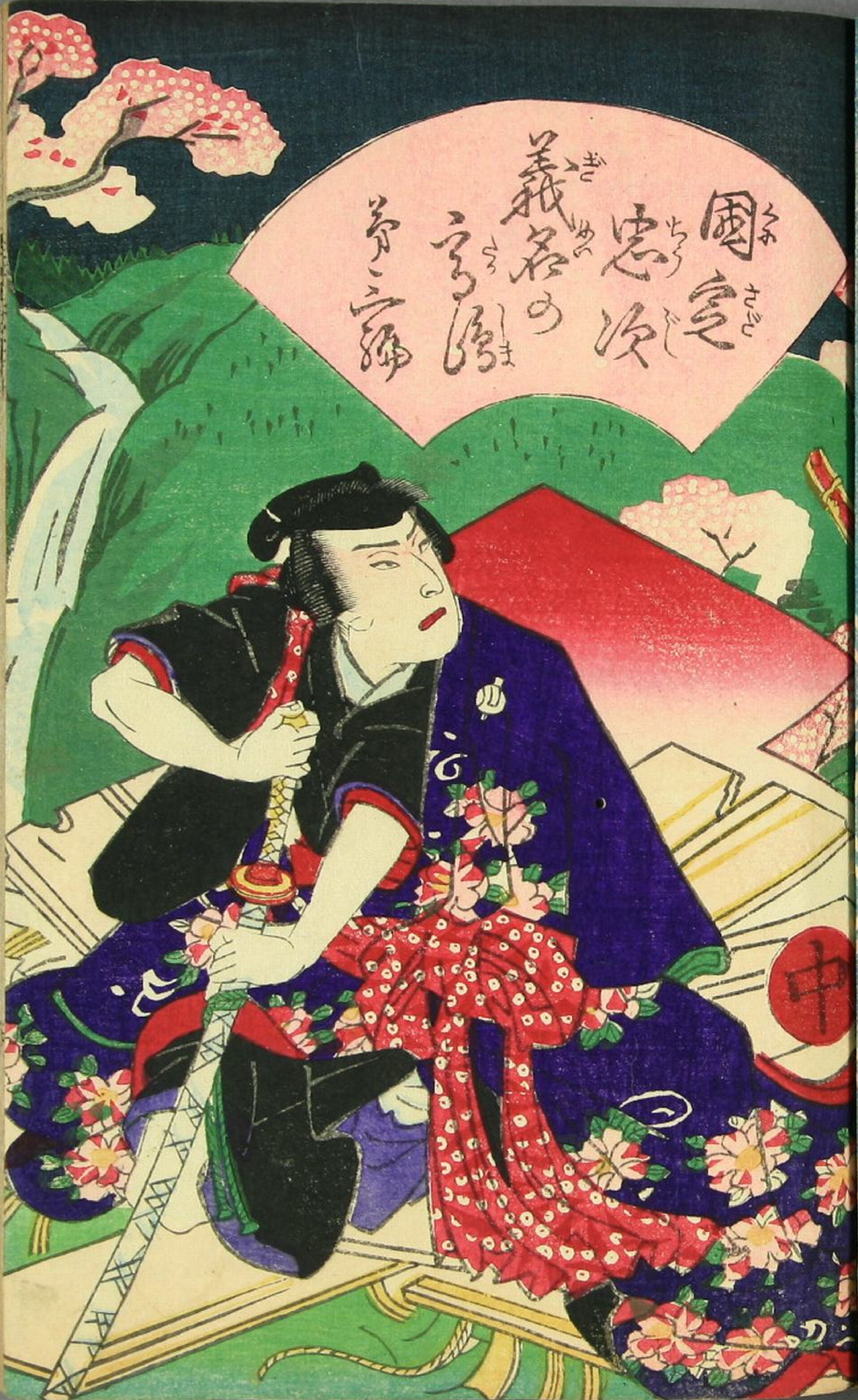
官許
たんせきの薬
天泰丸
一包代弐銭二厘五毛

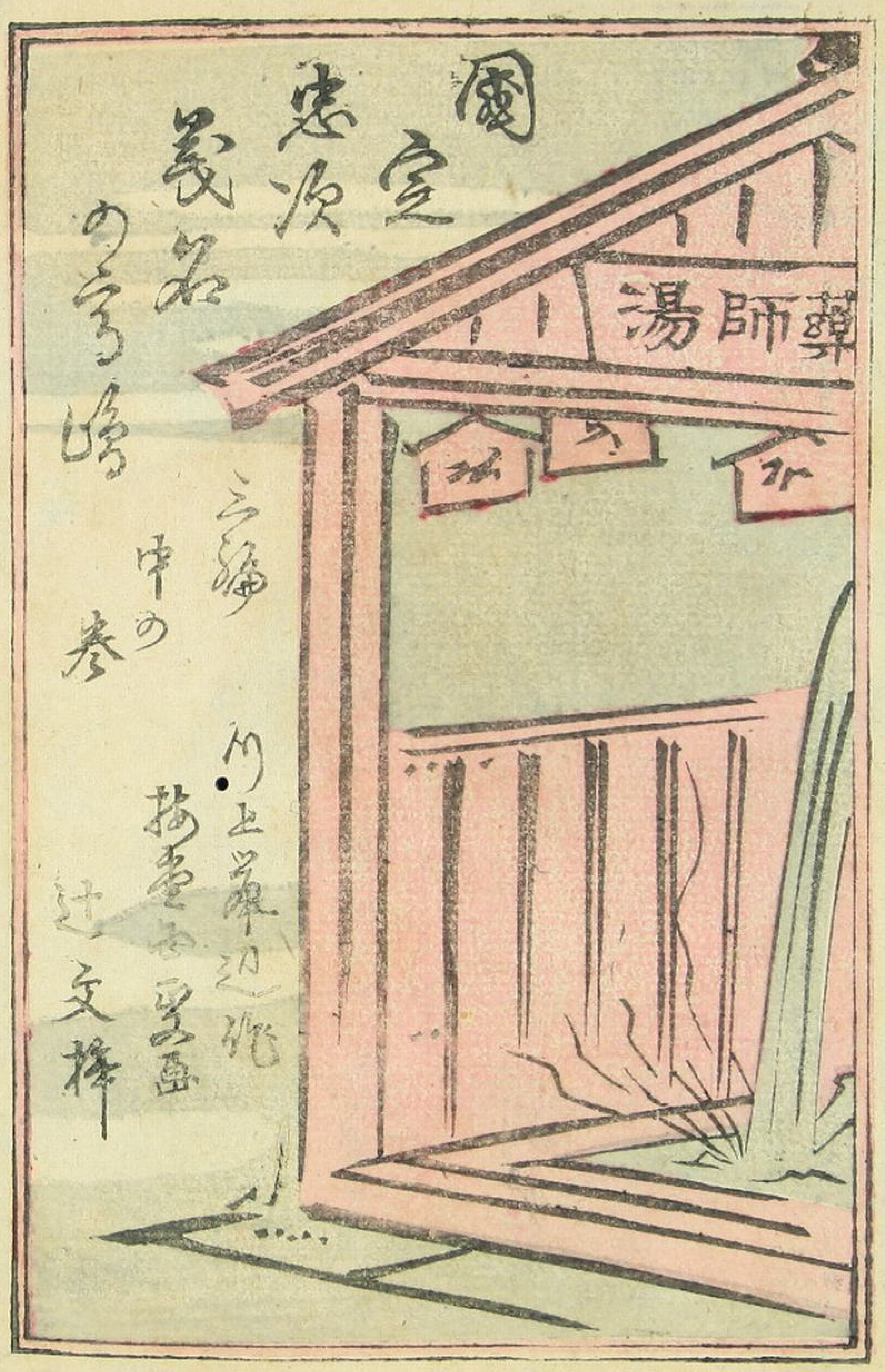
此牛肉丸ハ[illegible]
第一ひゐきそゝのふしぎ[illegible]
名く[illegible]
[illegible]
あれバ虚弱の人をして[illegible]
むかし[illegible]求[illegible]

此天泰丸ハ第一たんせき○ぜんそく○らうがい○せきやく○ねつ○うちみ○さんぜん○さんごのせんき○小児百日ぜき○其外一切のせきに用ひて功能速かなり
患ふる人ハ求め試し給へ

⌃文
地本錦絵問屋
金松堂

出板御届明治十二年十一月二日
本所区元町廿五番地
編輯人　川上謂一郎
日本橋区横山町三丁目二番地
出板人　辻岡文助


國定（くにさだ）忠次（ちうじ）
義名（ぎめい）の高嶋（こうしま）
菊五郎
中



國定忠次義名の高嶋

三編 中の巻

川上鼎辺述
梅堂豊斎画
辻文梓

○未刻すぎの嵐風にて
日も和らぐ霞薄雲
岩角繁く山道を
ひろふて登る
傳吉が池の辺
り人を付て待
ら知る人気あ
かねて来る
て二人の乞食
合図となして
呼子の笛
がでんとおぞと
傳吉が来向▲

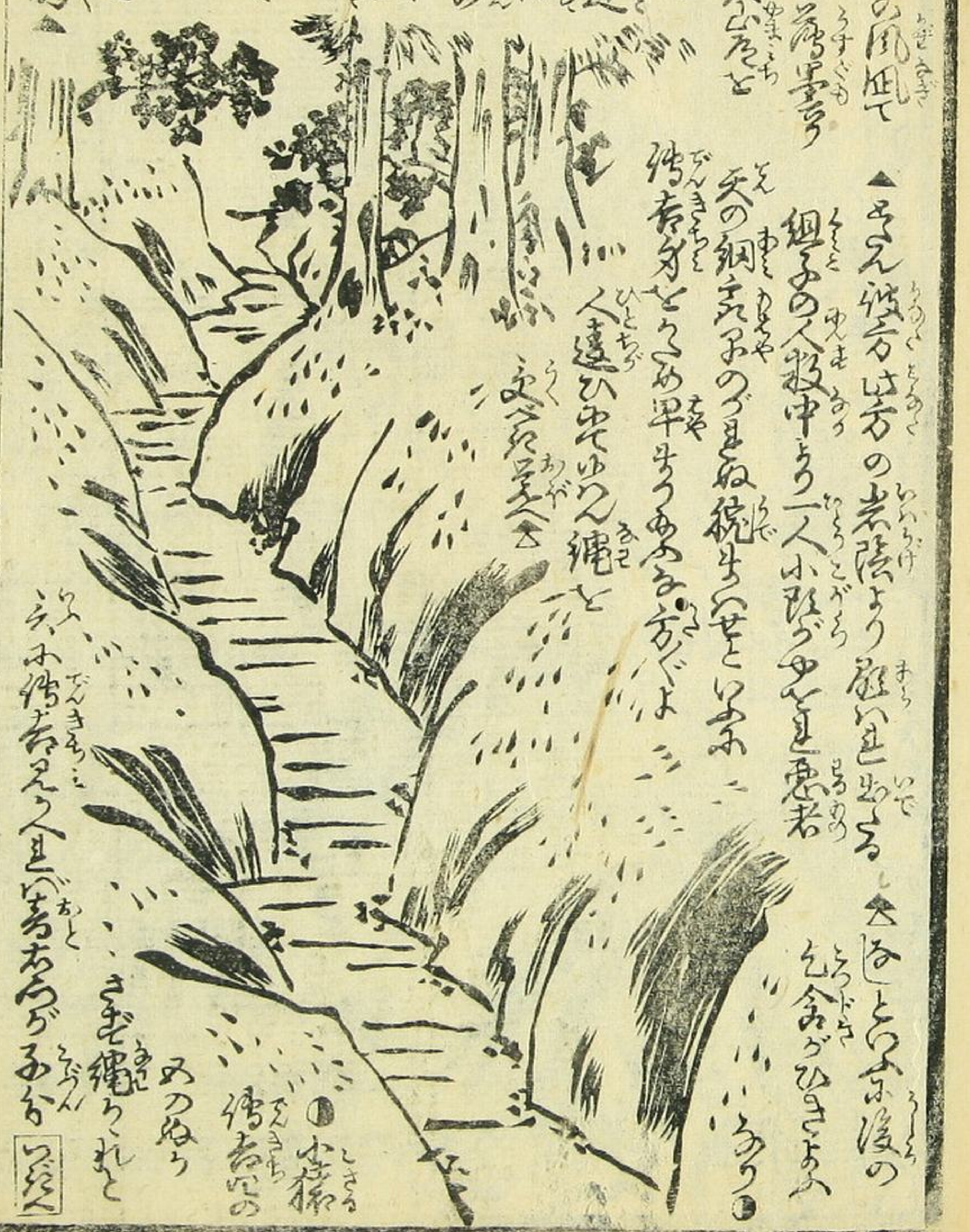
▲「さん彼方此方の岩陰より躍り出る
其処の人数中より一人小柄な男が悪者
其の綱をおのづとはね縄をかせと叫ぶに
傳吉をとらめ手早くかゝるも方へよ
人違ひせでゆるん縄を
文句とはしらへ△

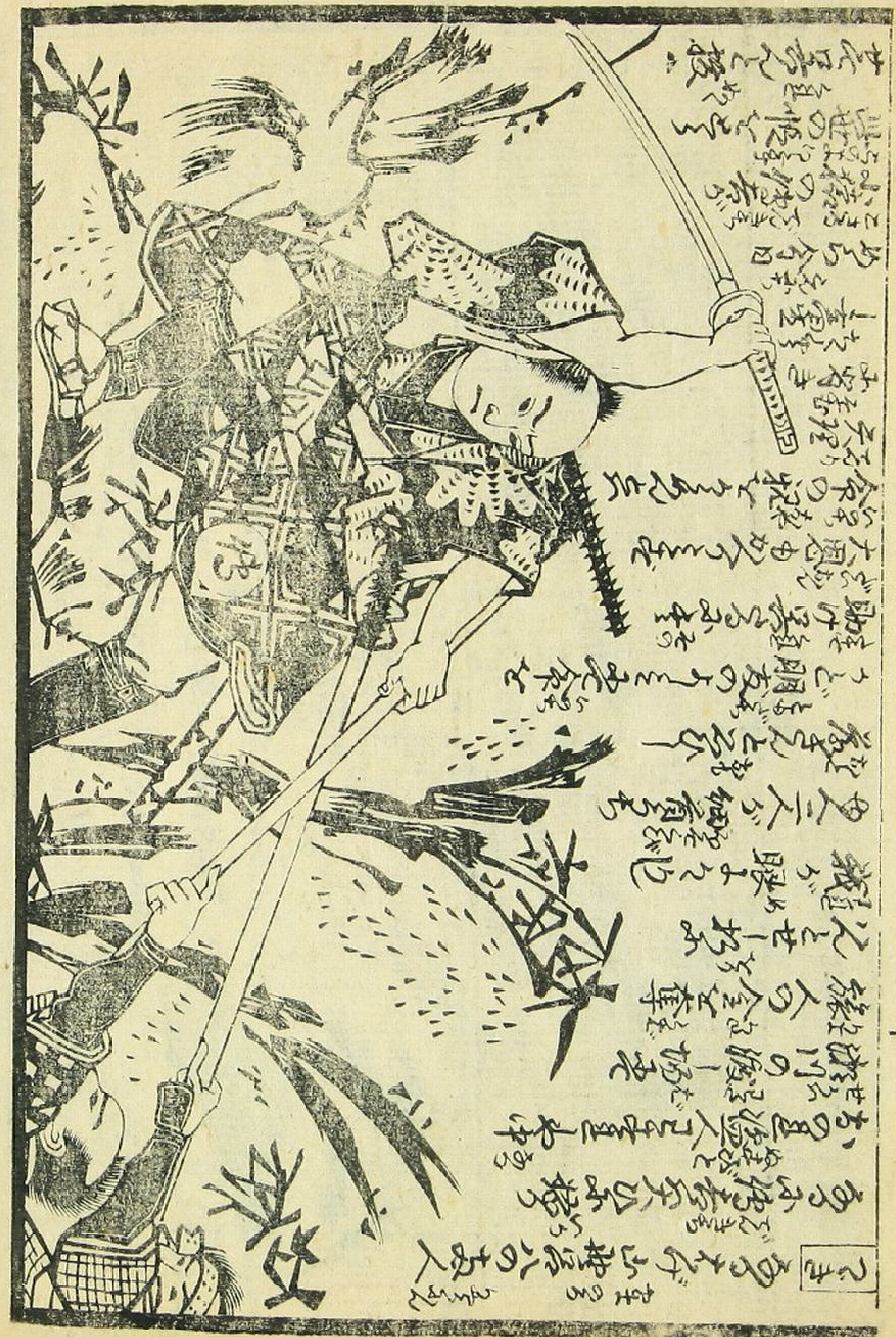
大谷とはいふ未後の
乞食がひきさよふ
あり●

●小柄
傳吉の
ぬのかち
さぞ縄うれしと

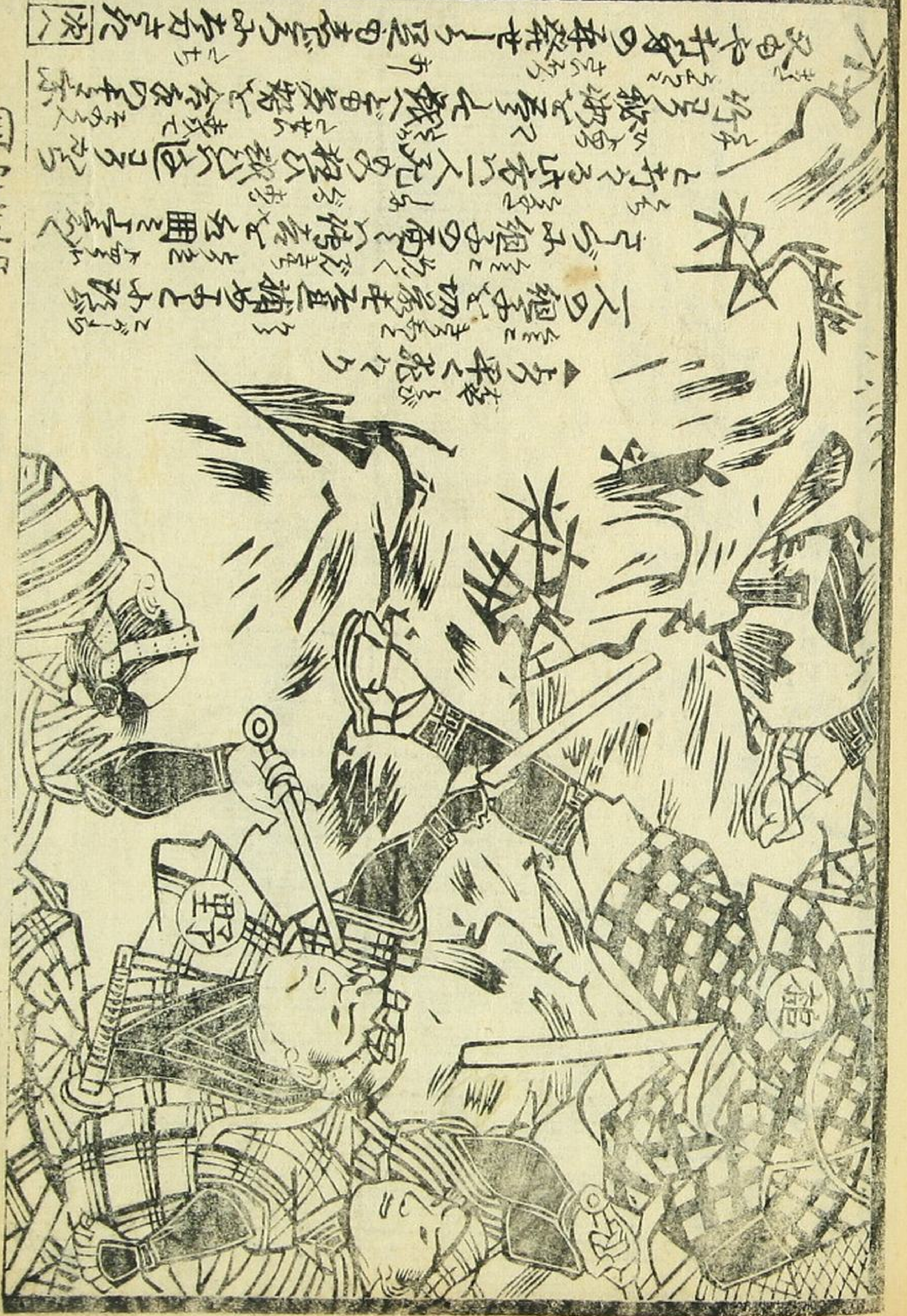
△又ふ傳吉見へ人且いゝ言あらがる

つゞく



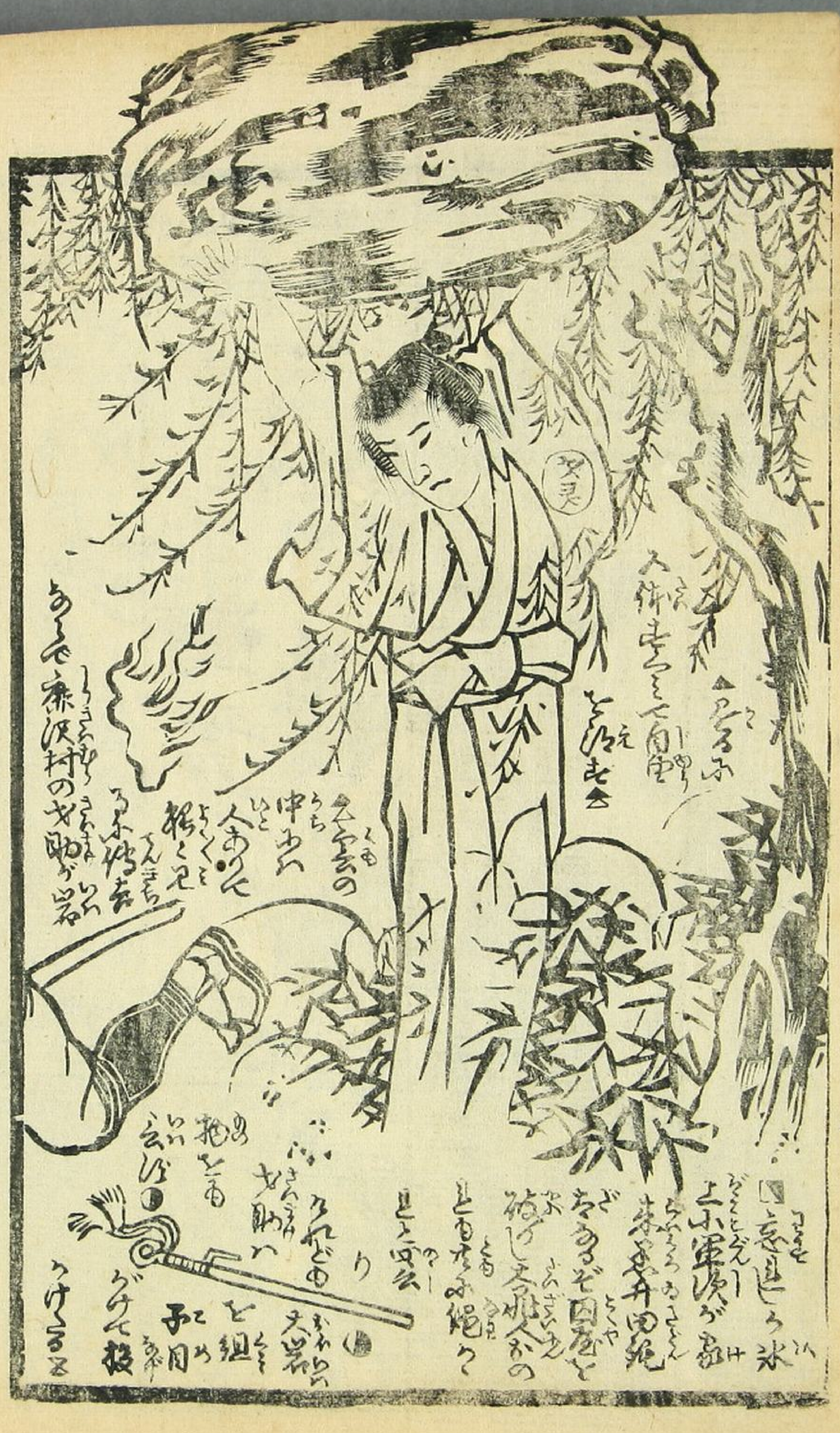


[illegible]



[illegible]

次へ

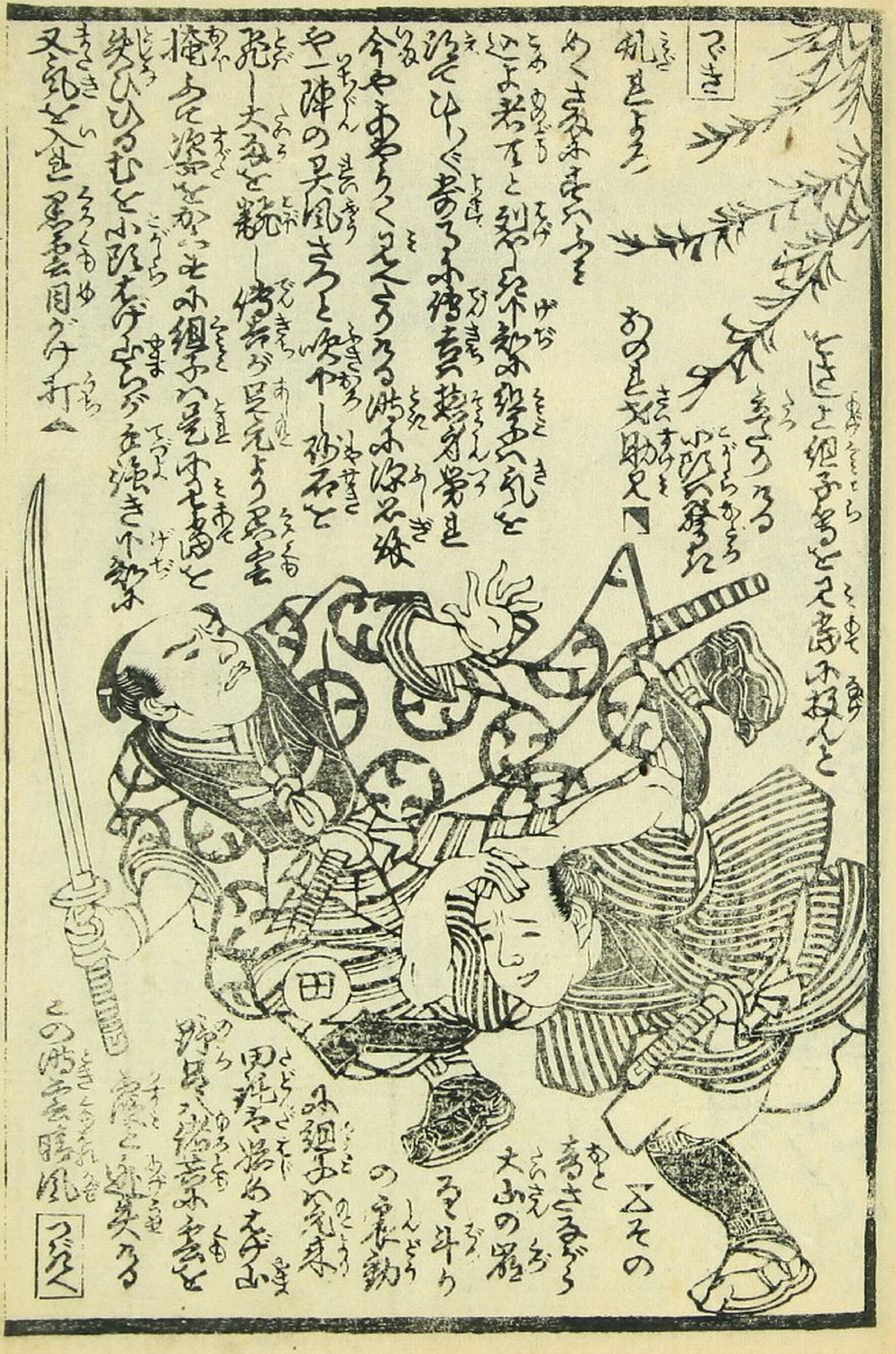


▲かゝる所へ入来りて自由を失ひ▲

[illegible]の中より人ありて 猿く見る [illegible]ろふ[illegible]ち [illegible]の女助が岩 [illegible]で赤沢村の文助が岩

▽こゝぞ意退しろ氷 よふ軍源が家来井田氏 [illegible]ぞかくる [illegible]を [illegible]し [illegible]かの とも [illegible]ぞ縄くり 是と云

[illegible]れども文助は [illegible]と組 [illegible]大岩を [illegible] 抱きあげ [illegible]投げかける▽



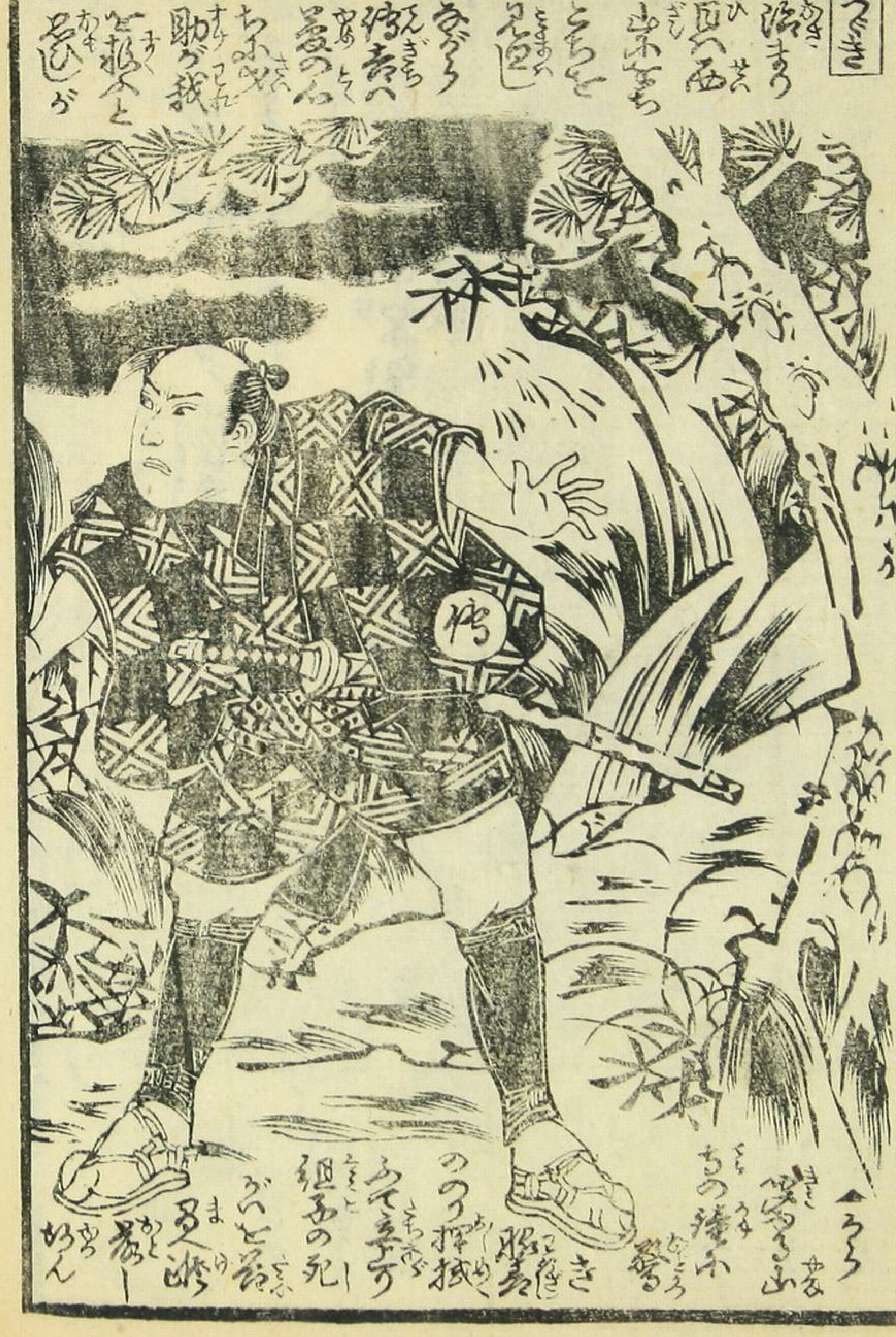
とさゝに細工なるを高ふ投んと 手ごろなる小石を抜すゝめ おのれ文助見▽

つゞき

覚悟よと めく文助に走りかゝるを 迎ふ若者と [illegible]にて [illegible] [illegible] 今や [illegible] 一陣の [illegible]風 [illegible] [illegible] 又 [illegible]をかいさ [illegible]

▽その [illegible] 大山の [illegible] の [illegible] [illegible] この [illegible]

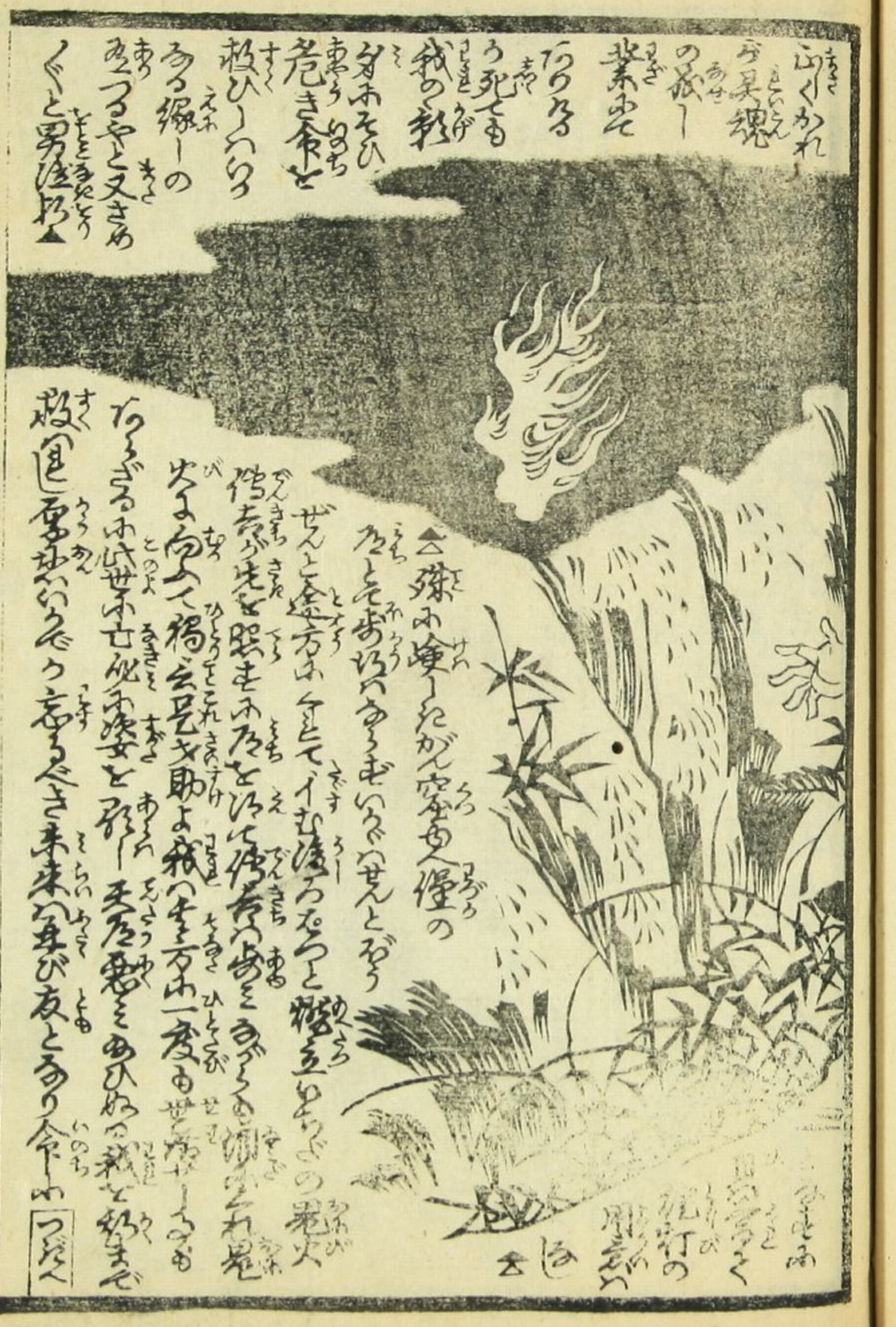
つゞく



つゞき

治まり日へ西宗旨ちともを主の邑なかう伝吉へ家の名ちふみ咲助が我一に杯をとあひが

△ろ出今宵ふ山もの種ふ驚きざし脳苦のり押掛るて来う組子の死しがいを落思之助わかうしん

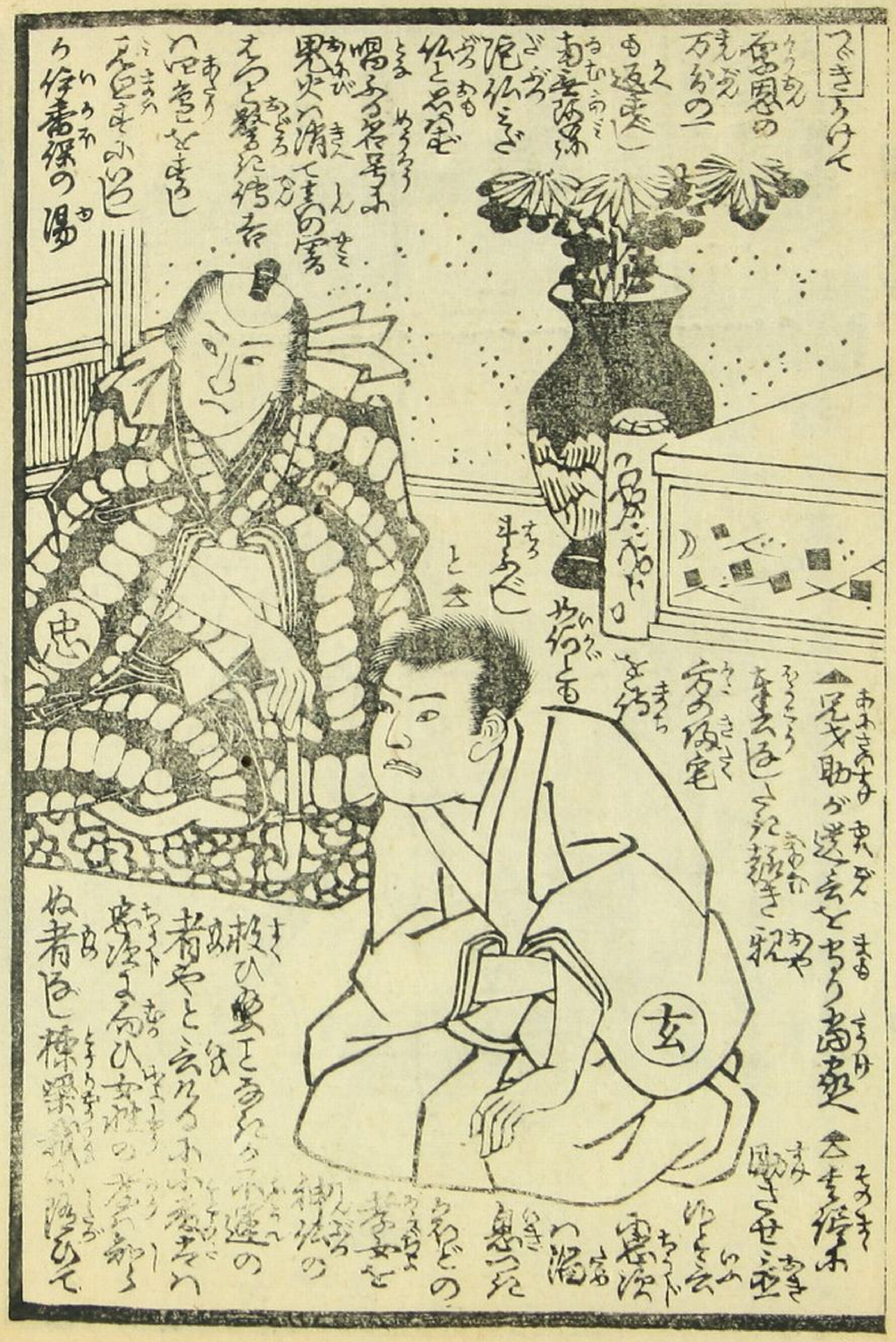


まさくふしくかれ邪魂の殺し業をそたりるを赤ら死でも我の報身にそひ悪らう危き命を救ひしらうある縁しのあつるやと又きめくと男泣き△

△殊に塗したがん窟女人窟のことそ出迎へあるぞいへせんとぞぜんと遠方に今とて、イむ落ろぞつと燃立おりよの鬼火伝吉が先を照ますにあとを追いて伝吉がたをまもるの道のわれ鬼火よ向って福云是戈助よ我へ遠方に一度世に誓しるのたるにふ世に亡びぬ姿を現し未だ悪をあひぬの我を報まで救ひ邑曹いへ忘るべき未来へ身び友とある命に

つゞく

さとみ里の花村の雨の口△



つきうけて

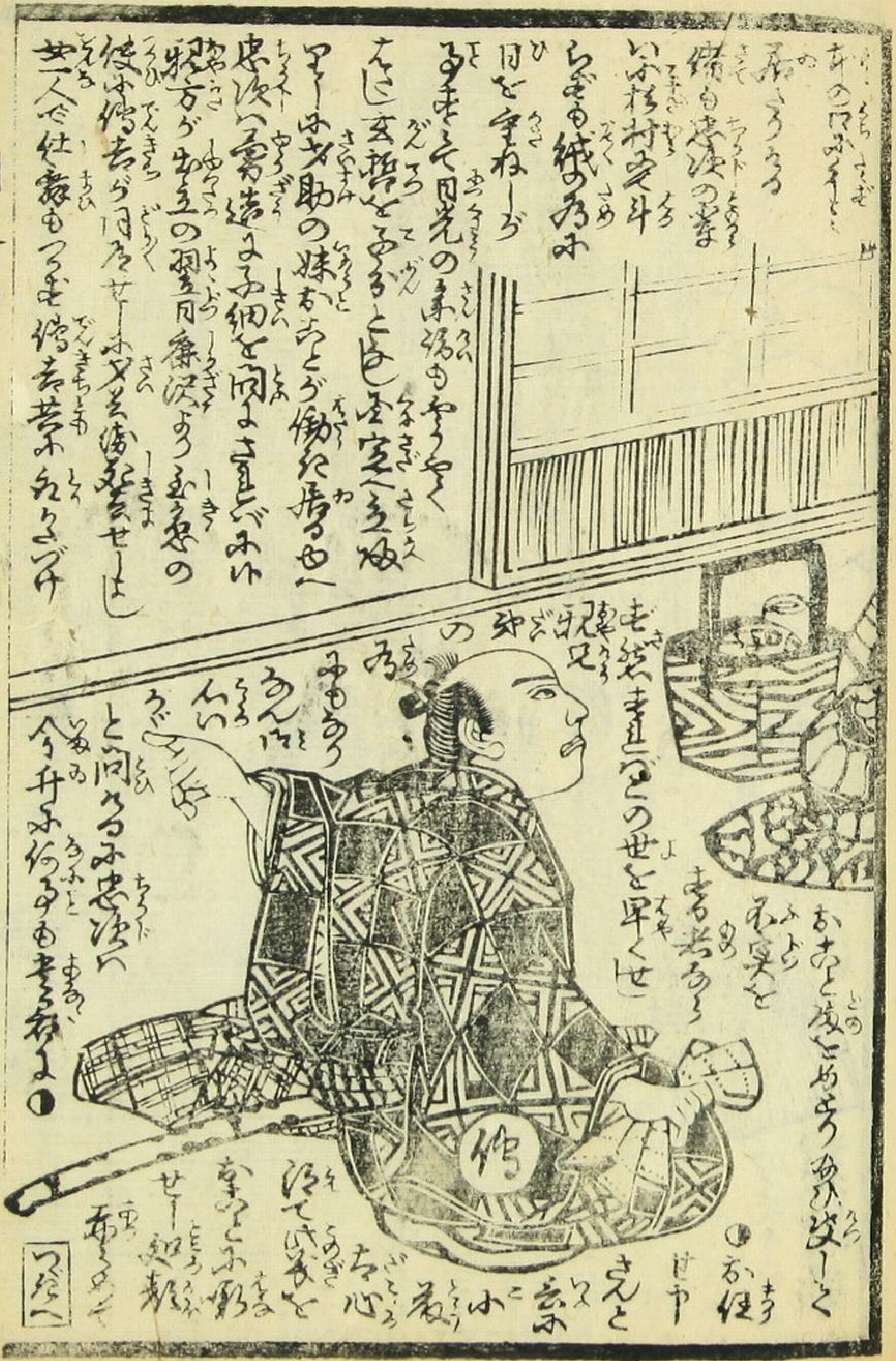
宿恩の見えず万分の一も返さし南無阿弥陀仏さ
仏と名宅唱ふる名号に鬼火へ消て青白雲まつら驚く侍者
一月の宅をまたしこの息をみいし
ら伴香深の湯

斗あろ
と

ひそかにも
おち

大友之助が遺言をもちり高貴人
玄蕃臣を打ち取り親の仇の屋宅

其様子聞き取ると
忠治と云
家の酒
息つめ
などの
孝女を
神仏の
救ひ出て遊の
者やと云るゝも
忠治まで云ひ女性の
ぬ者臣標深



あの門の
扇子
鎌も忠治の家
いふ松村定斗
らでも紙の名に
日を重ねしが
ある日光の来場もやうやく
大臣玄蕃をあらかじめ宅へ
又一は大助の妹おとが働き居る也へ
忠治へ勇造より細を聞き
親方が其立の翌月
彼は偽者が月
其一人で仕舞もつかず偽者

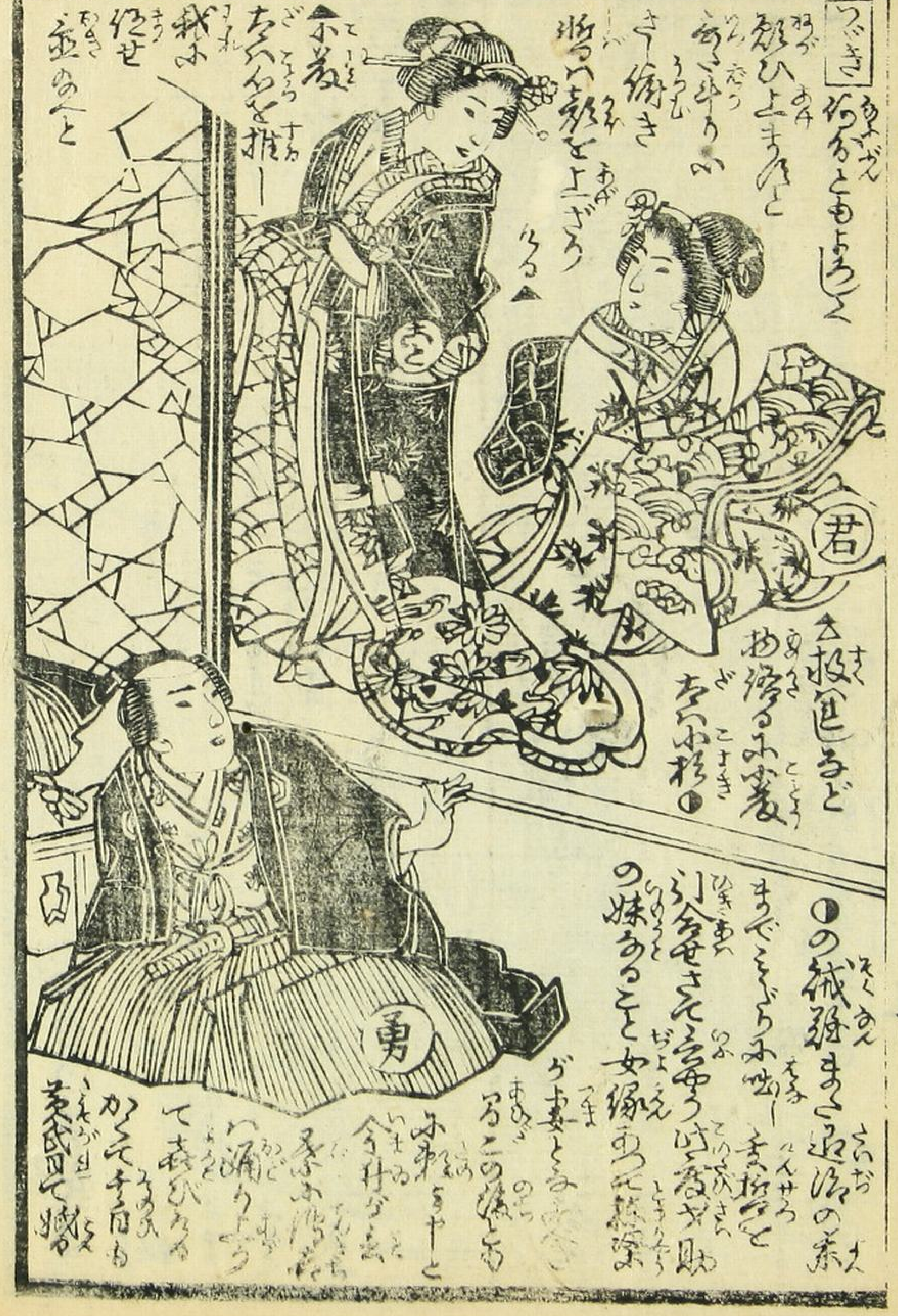
早く早く兄の
早くこの世を早くせ

この
おおと後と
書状を
不実を
扇の

さて
おれ
えと
宗
小
心
涙
家の
せし

と向ひ忠治へ今升に行き

つゞく

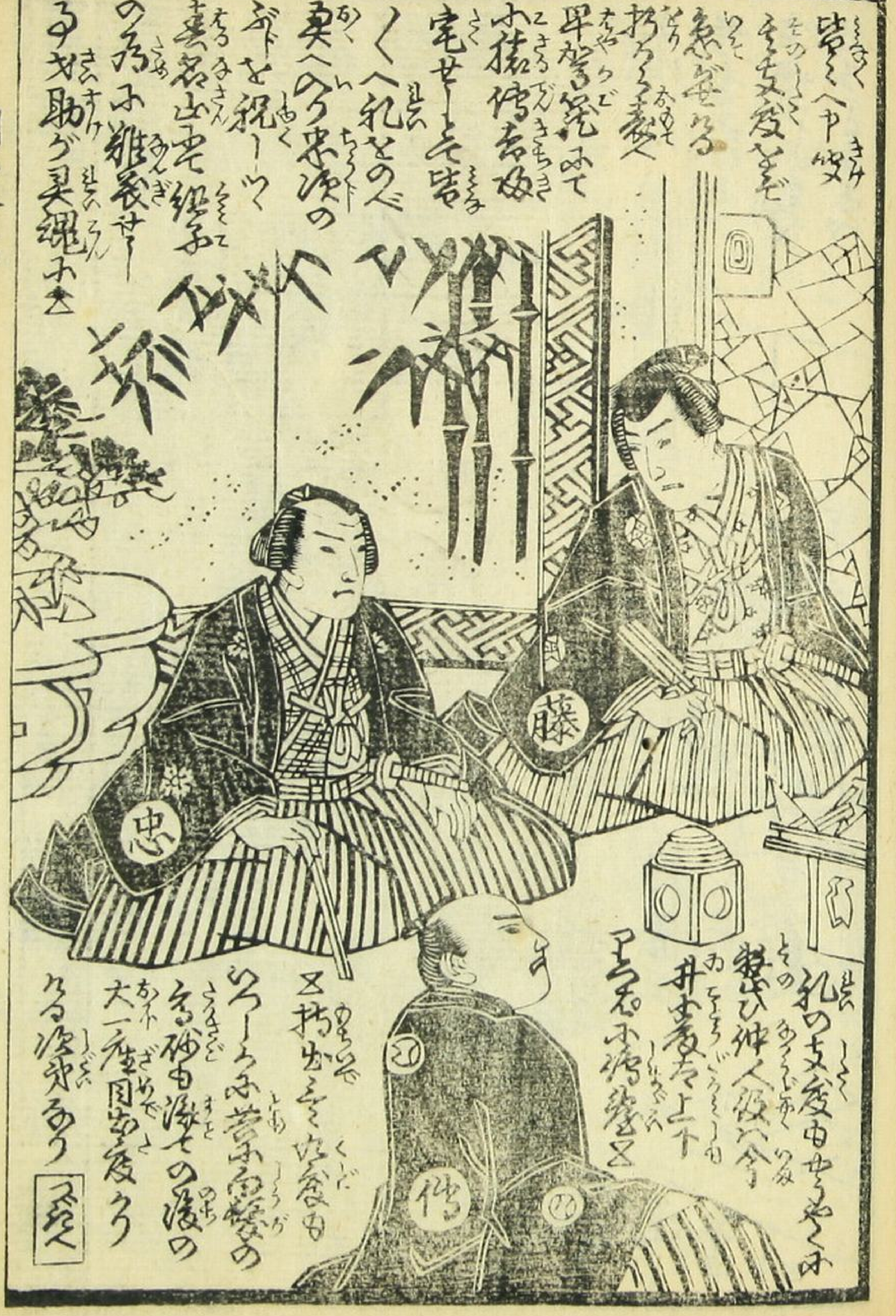


つゞき　身ぜんいかにもよろしく願ひ上まゐらせると云ふ手のうちに手術き将の顔を上ざるゝ▲

▲手前は左右を推し我に任せ玉のへと

太刀を抜ると御殿るに飛び込み小杉●

●の織孫まで返済の太刀までをもらひ申し遣はし候をこの度こそかの大助が妹なることに女縁あつて懸想の中がおとゝの縁をまゐらせた今宵が舟に参りし通りよう[illegible]かくて手前もいかなる事[illegible]



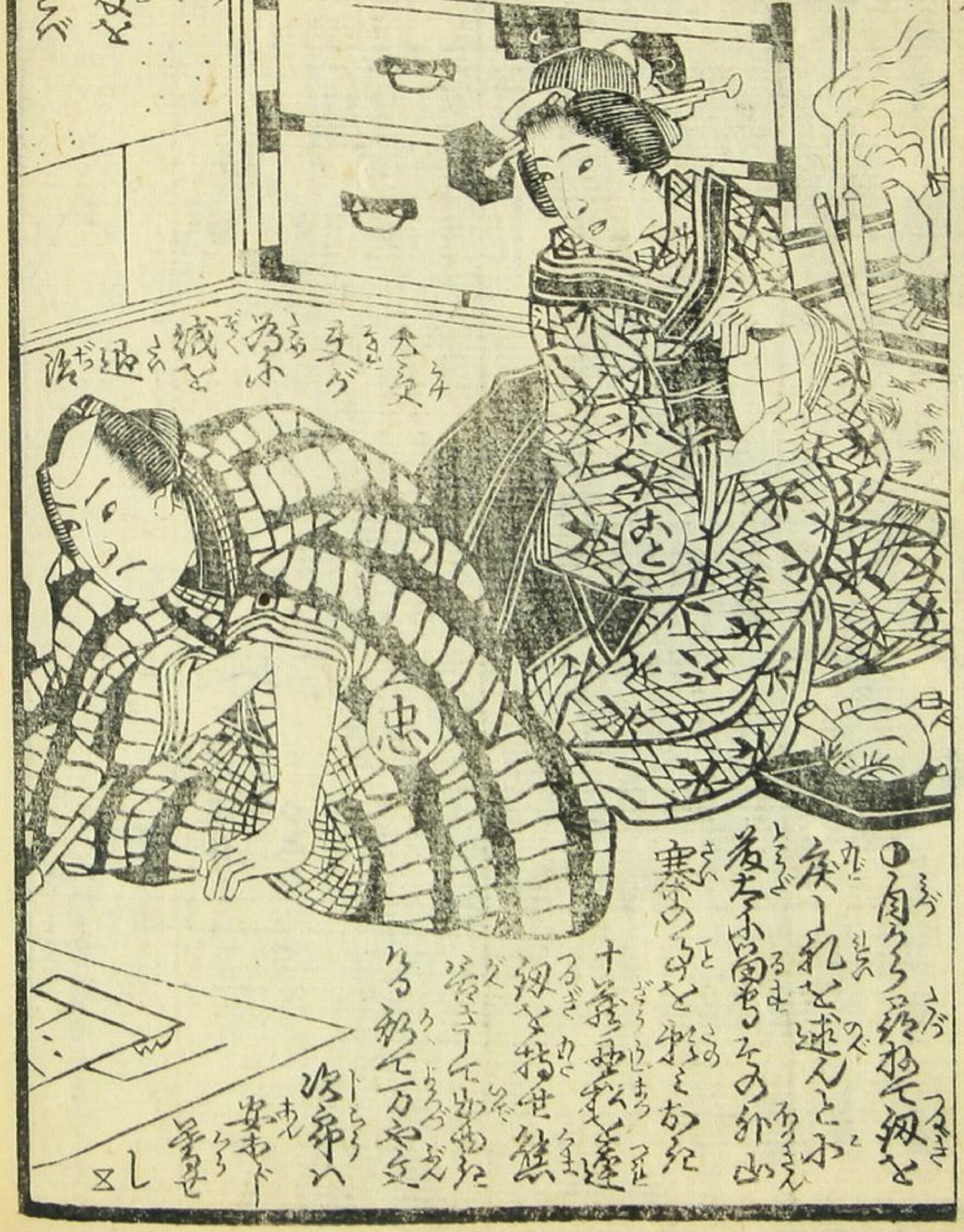
皆々へ申候そのもとの文も急ぎ候折から表へ早く参りて小揃を尋ねて宅せしと皆々へ礼をのべ奥への方へ来たり祝をしてある名山も縁子の為に難儀せしゝが助が身の上にて

礼の文を由来を申し其の御人役人今井表に上下すみやかに手をおとし出で候ひて大一座にて立ちよる迄

〔つゞく〕

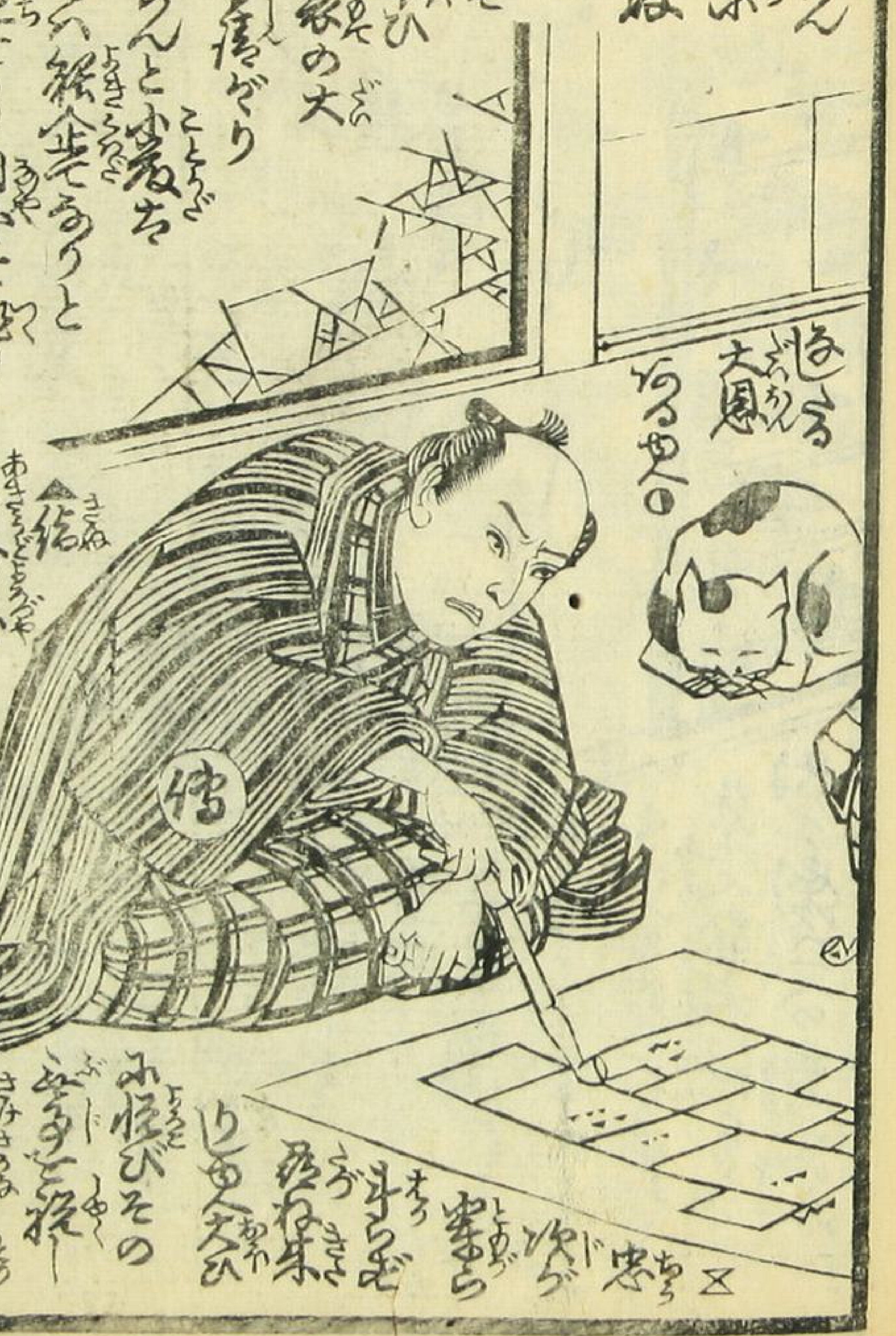
つゞき

さて備もかくとは知らず心静にぞ仲直りして大恩人とまた帰りたる中睦まじく暮しける其月の末つかた忠次は一人考ふる事ありて我家業は法度を犯す事なれば



①自ら筆を執りて紙を広げ礼を述べんとは言に留めその好ぬ寒の紅と彩を加十萬両の普請逢紙を精出し彫付てはじめ工夫なる新七万やと次郎は安本も思ひ

なお今にも石摘のからん由斗らず近江村内にありしは伝授を送る家仕方なく止むを得ず岩倉家の岩窟こそ屋竜の場所なり幸ひ小猪伝吉は江戸お屋敷の大工なるよし渠を巫事に頼みがりと近き山寨を造らんと心をと伝合せしものそれは紙傘をありとそこより密かに明地をとり納屋を作り伝吉を棟梁として職人を雇ひ切組をぞ拵へる忠次は一日小屋にて細工の▲

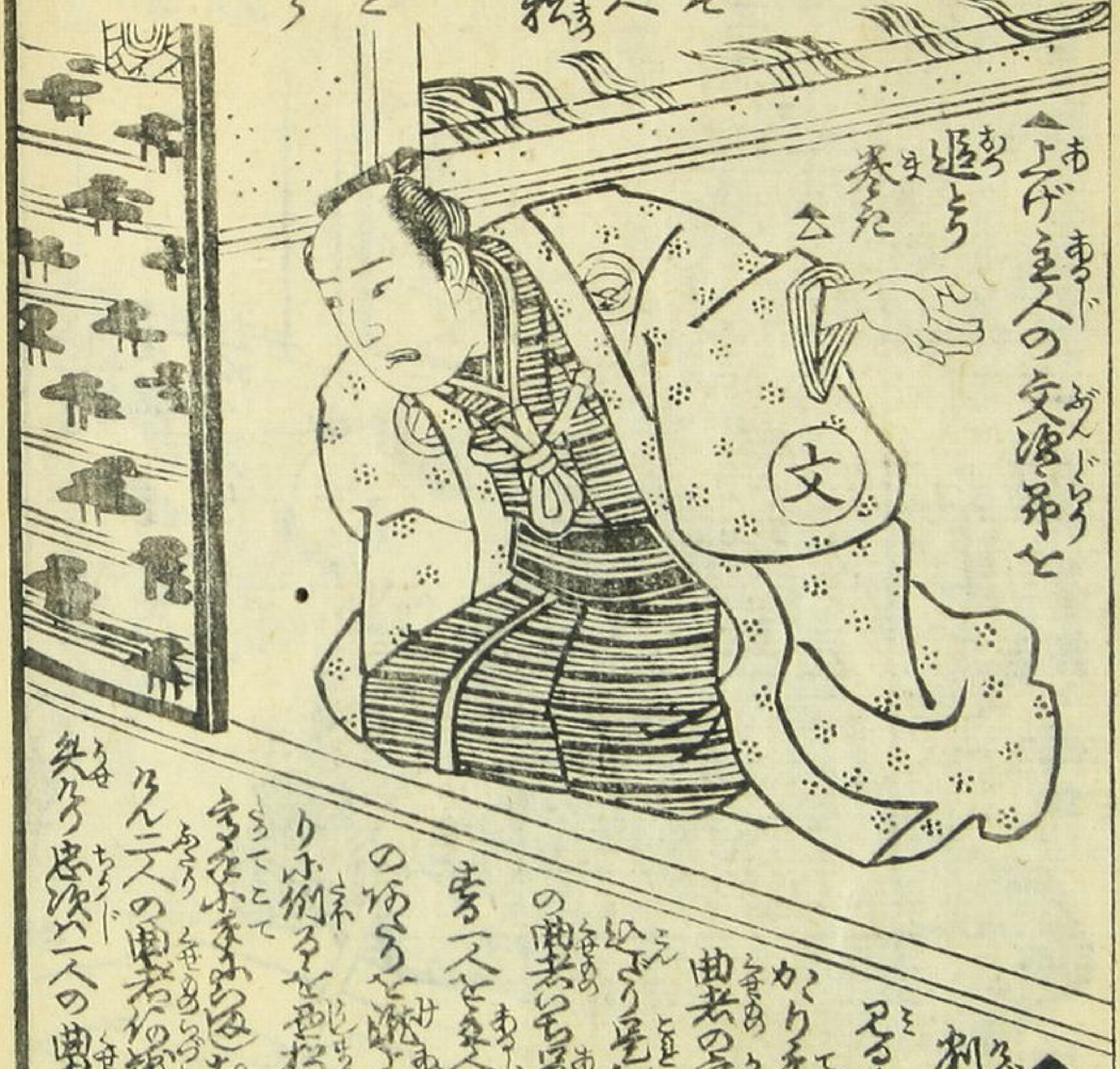


▲伝吉萬人万屋文次郎が情にて多くの刀鍛を得る▲

忠次が案じら斗らぬ思付しを人あれみ経びそのぶに手を施し酒肴を出し按人家内賑はしぞ

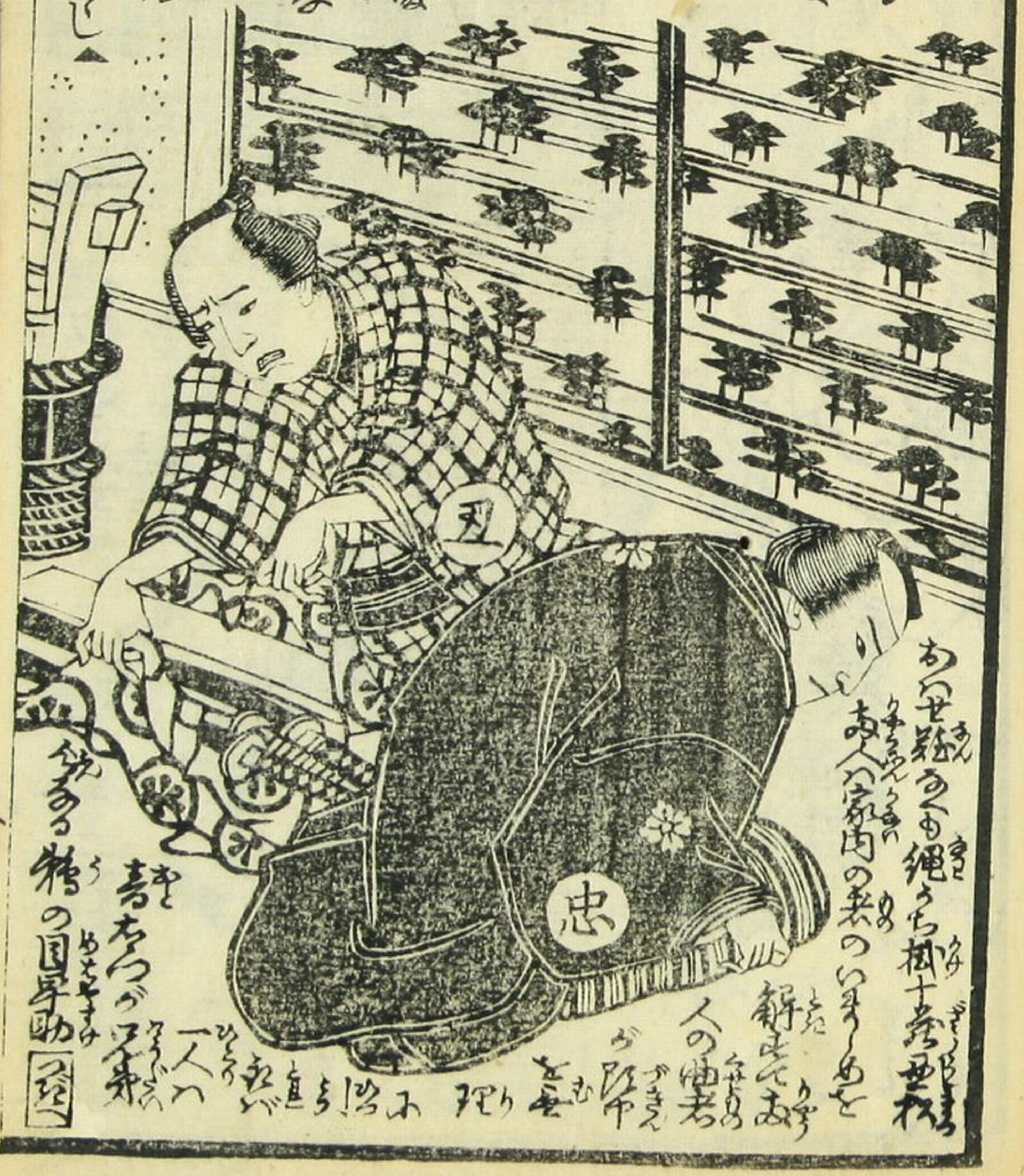
つゞく

つゞき [illegible]の咄しを聞て驚き顔勇を忍ぶ時を移し居る主人へ向ふて所持させ駆け出さぞ無眼らうん体を改め人と出ずる忠次が私十蔵は枕まつて猶も云く縁へ入るとひとしく文次郎のき灯の消ゆると見て爰へ早しが猶予ろうに人

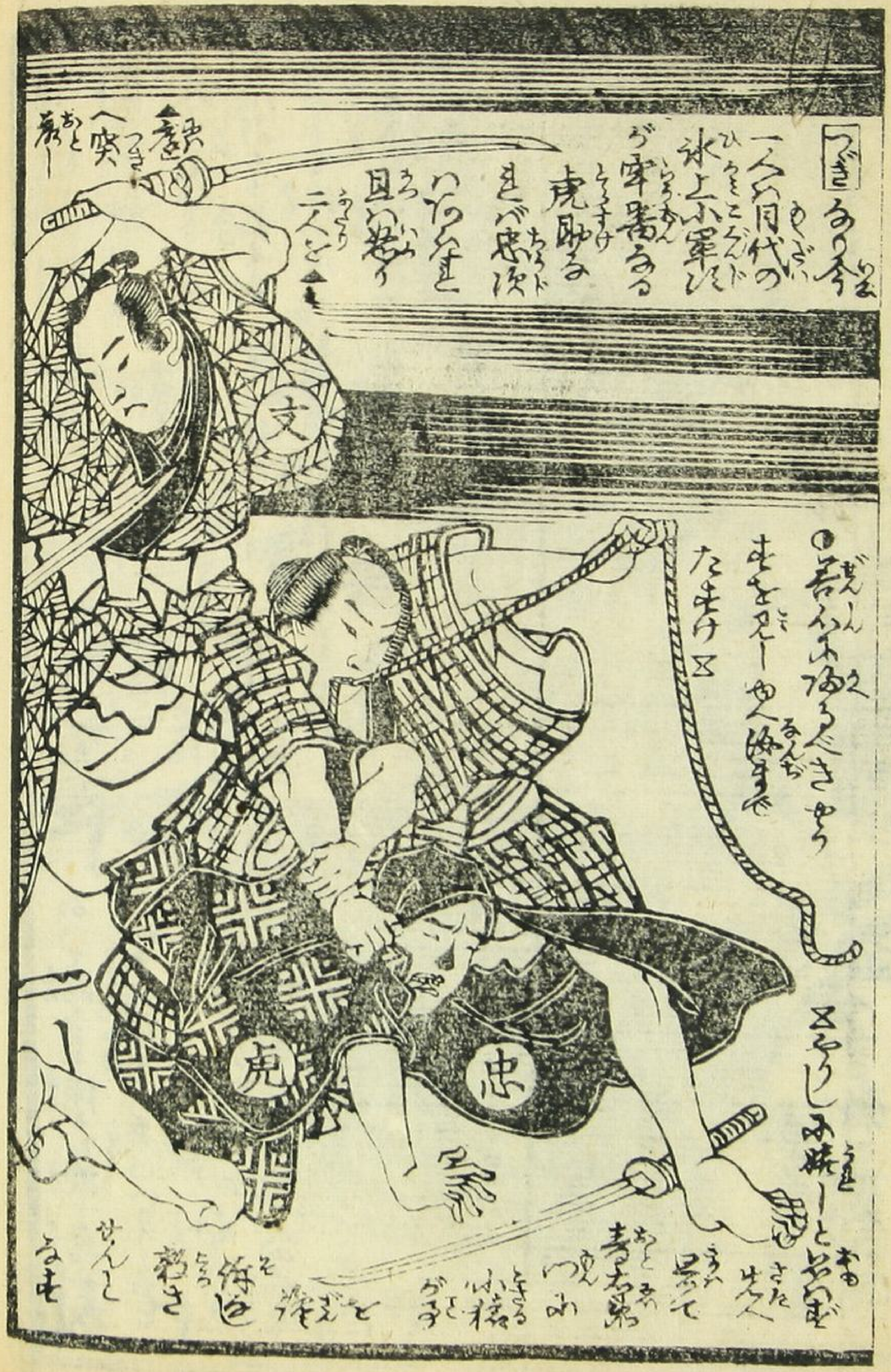


△志のかゞを剥りて鐵のかを見るに忠次は飛かゝりて之を受け止め曲者の肩先口を寸切込ぞり足をすりの詞曲者は其の足にて逃んと主人を気へくさくの足腰のかうを流しずれど斗り小僧を思松十蔵を世話さてこそかまかの足むなの二人の曲者の跡出もあく逃忠次は二人の曲者に脚を

一旦は彼より頼ひ又会せ親分も二人もえさうと吏会せおうろうやら発がし人件しめると云ふの国ゆる申を継ぐ知と主とを給ふ奴の者行かずやらんと三人へ身をぞう人もそとく不便を二重ちゞ開きなの立るみこへの不面を包とし曲者四人家内の男を乞し▲



あわせ給ふても縄うち掛十蔵が主人は家内の者の山もとめを解き主人の曲者が差に理り不浄に直し をいた一人の青木が弟鈴木の悪の目早助

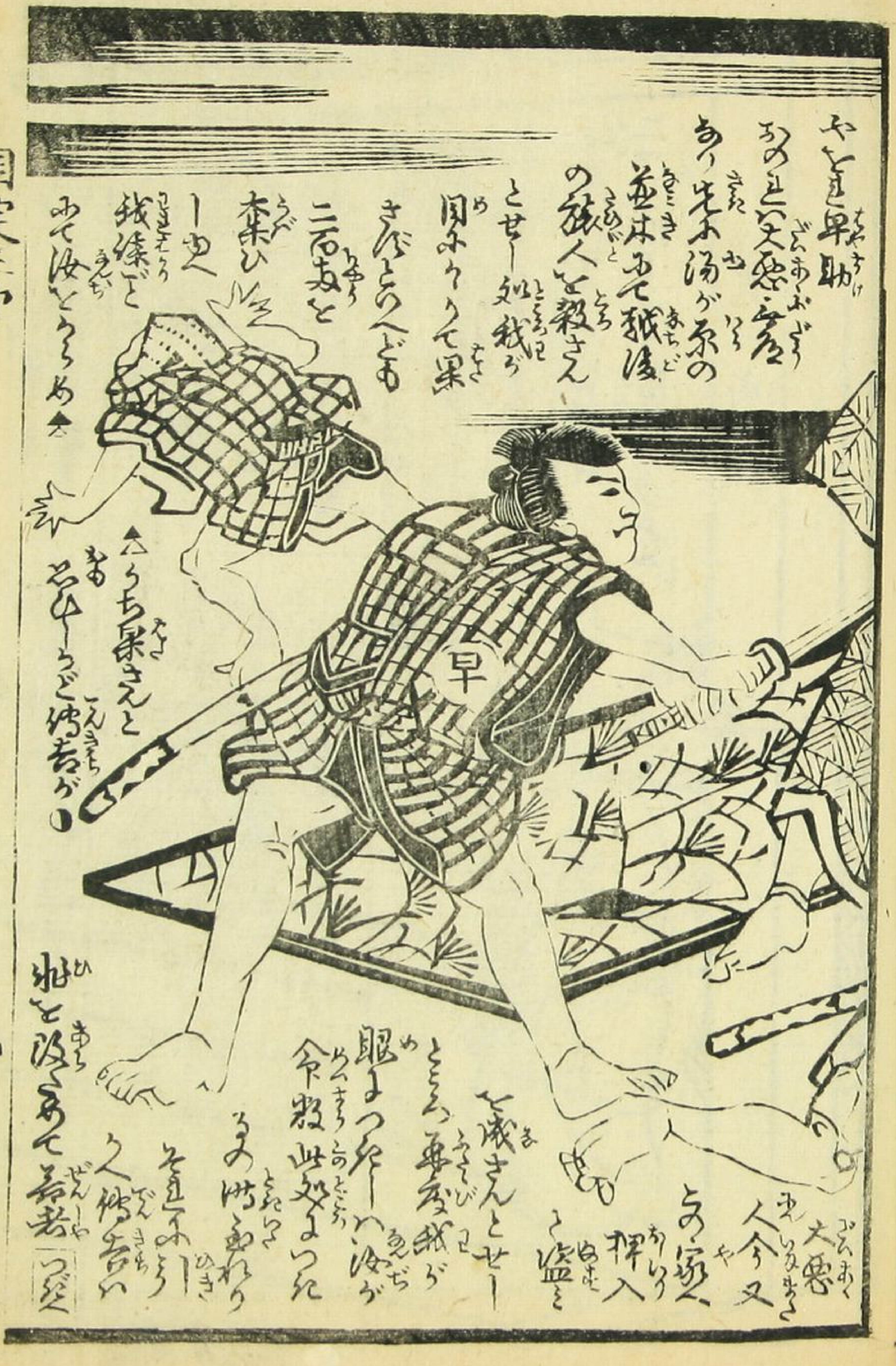


（つゞき）さる今（いま）
一（ひと）かど目代（もくだい）の
氷上小軍次（ひかみこぐんじ）
が牢番（らうばん）なる
虎助（とらすけ）
忠次（ちうじ）
いひ合せ
因（いん）果（くわ）
二人（ふたり）を▲

▲彦次（ひこじ）へ突（つき）おとし

◎善（ぜん）人（にん）を（?）さきゃ
まをゆるし忠次（ちうじ）
たまけ ⌛

⌛やりし膝（ひざ）と踏（ふ）まで
先（せん）人（にん）
見て
青布（あをぬの）
つみ
さる模（も）様（やう）
がる
と違（たが）へて
海（うみ）そ
縛（しば）さ
せんと
なせ

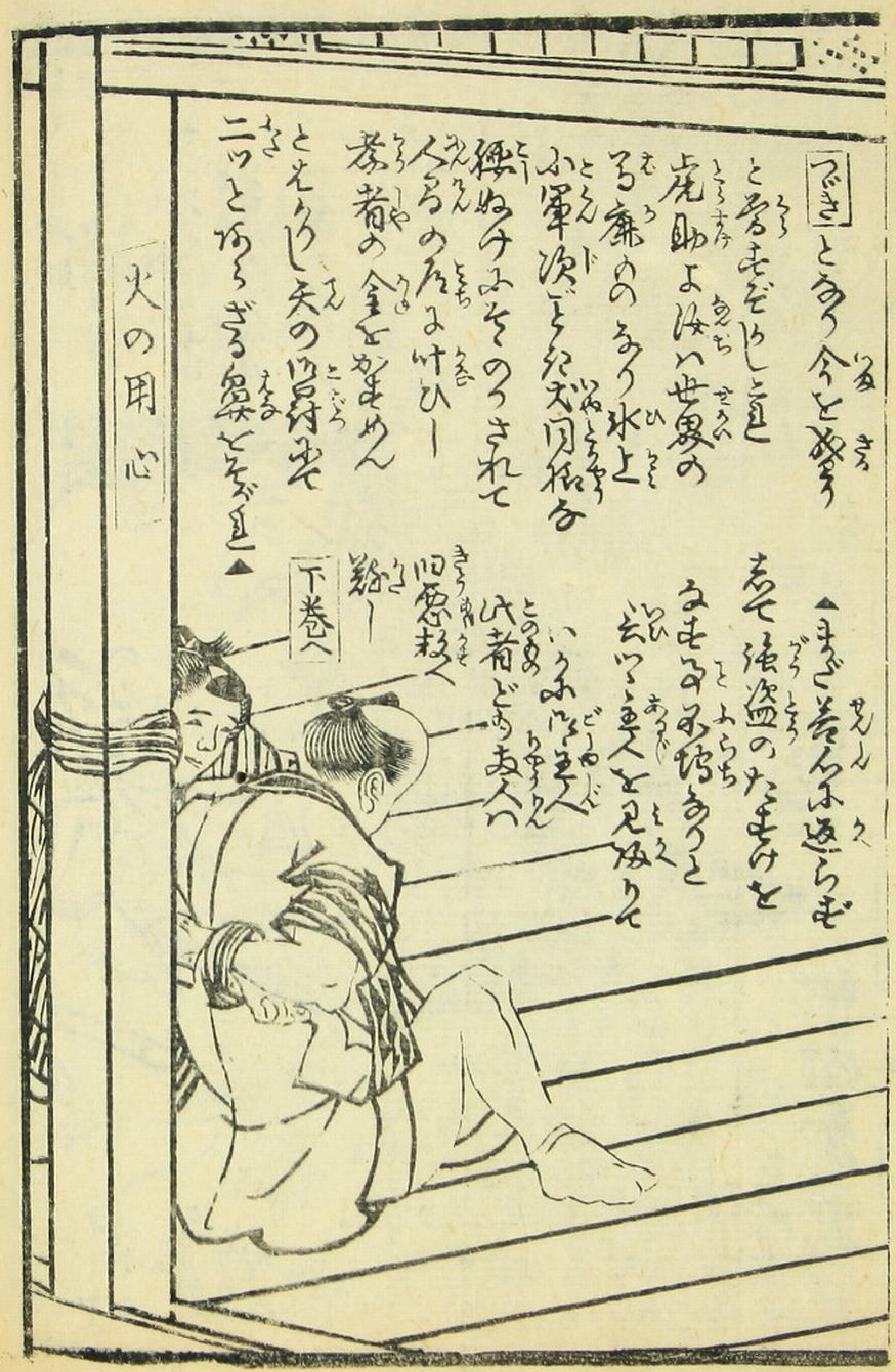


やがて早助（はやすけ）
あの五大悪党（ごだいあくたう）
あり先（さき）ほど湯が原の
並木（なみき）にて街道（かいだう）
の旅人（たびびと）を殺さん
とせし処（ところ）を我（われ）が
目（め）にかゝりて果（はた）さ
ざりしとへども
二百両を
奪（うば）ひ
しゆへ
残縁（ざんえん）で
みて汝をうらめ△

△うち果（はた）さんと
言（い）ひしかど悪者（こんきち）が◐

◐大悪（だいあく）
人（にん）今（いま）又（また）
この家（や）へ
押入（おしいり）
盗（ぬすみ）を
七蔵（しちぞう）さんとせし
ところ無（ぶ）念（ねん）我（わが）
眼（め）をつかれ汝（なんぢ）が
命（いのち）殺（ころ）せしより
其（その）所（ところ）へ
善（ぜん）でも引（ひき）
人（にん）殺（ごろ）しは
非（ひ）を改（あらた）めて善者（ぜんじや）（つゞく）

つゞき とあり今を盛と栄ゆる者ぞかし是虎助よ汝ハ世界の烏廉のあり氷上不罪次ぐる紀弍同格を經ぬ我ふそのつされて人多の庭に付ひし茶着の金をかすめんとそうし夫の所持を二つとなるぎる梟とぞ云是▲



▲まご善人に返らぞ其も強盗のたまみけをなせる不埒あること云ひて悪人を見捨りていふに寝き善人此着どもは悪人へ旧悪教へ給ひし

官許 朝鮮 牛肉丸 名法
大包代[illegible]十五銭
中包代十二銭五厘
小包代六銭二厘五毛

官許 たんせきの薬 天泰丸
一包代弐銭二厘五毛

此牛肉丸ハ男女子供とも此薬を用ひ[illegible]第一ひのをそこの[illegible]とも[illegible] 多く[illegible]薬[illegible]御[illegible] まじりて[illegible] なれバ[illegible]の人[illegible] む[illegible]

此天泰丸ハ[illegible]第一たんせきの○ぜん そく○[illegible]○[illegible] ○[illegible] さんぜん [illegible] 一切の[illegible] [illegible]

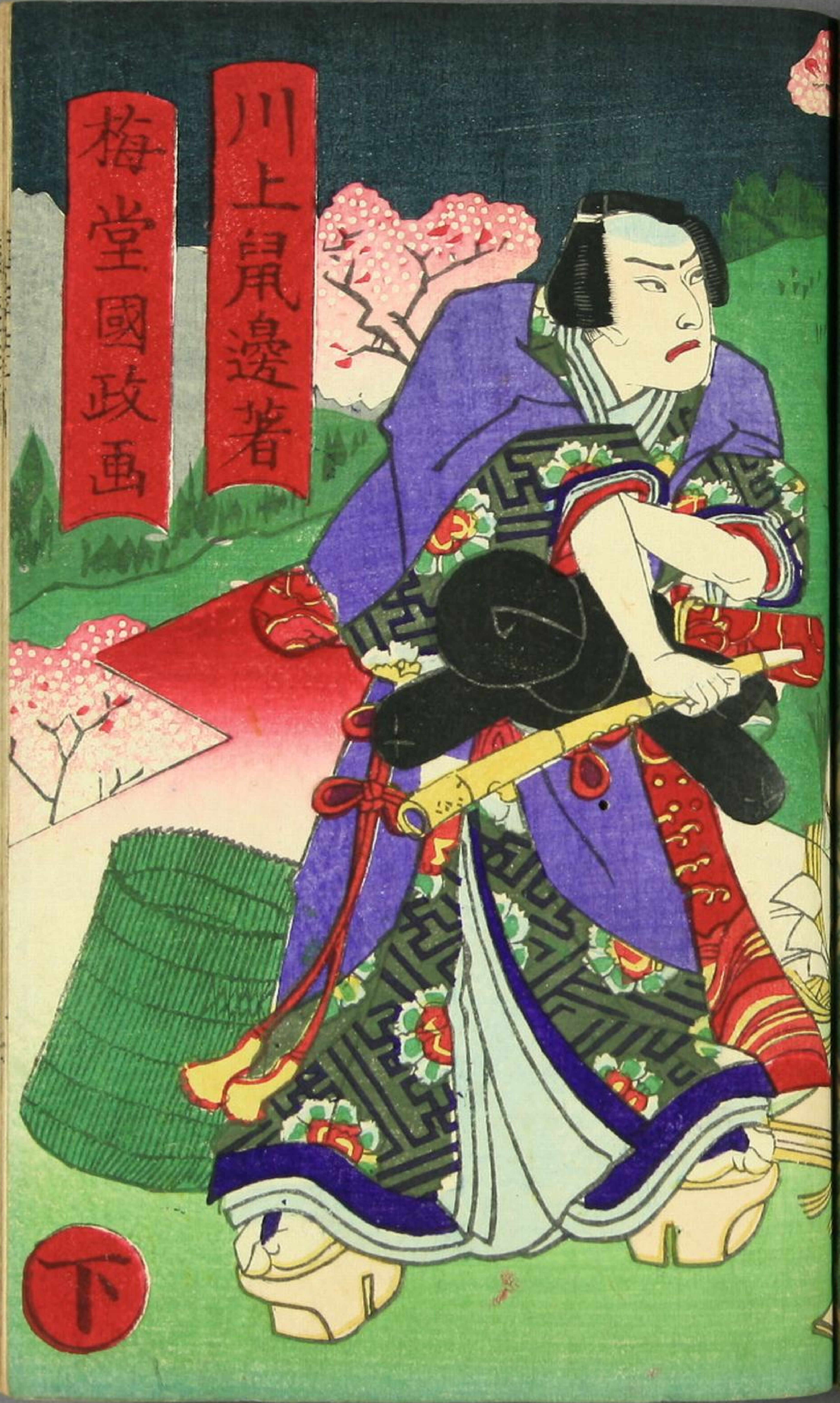
文

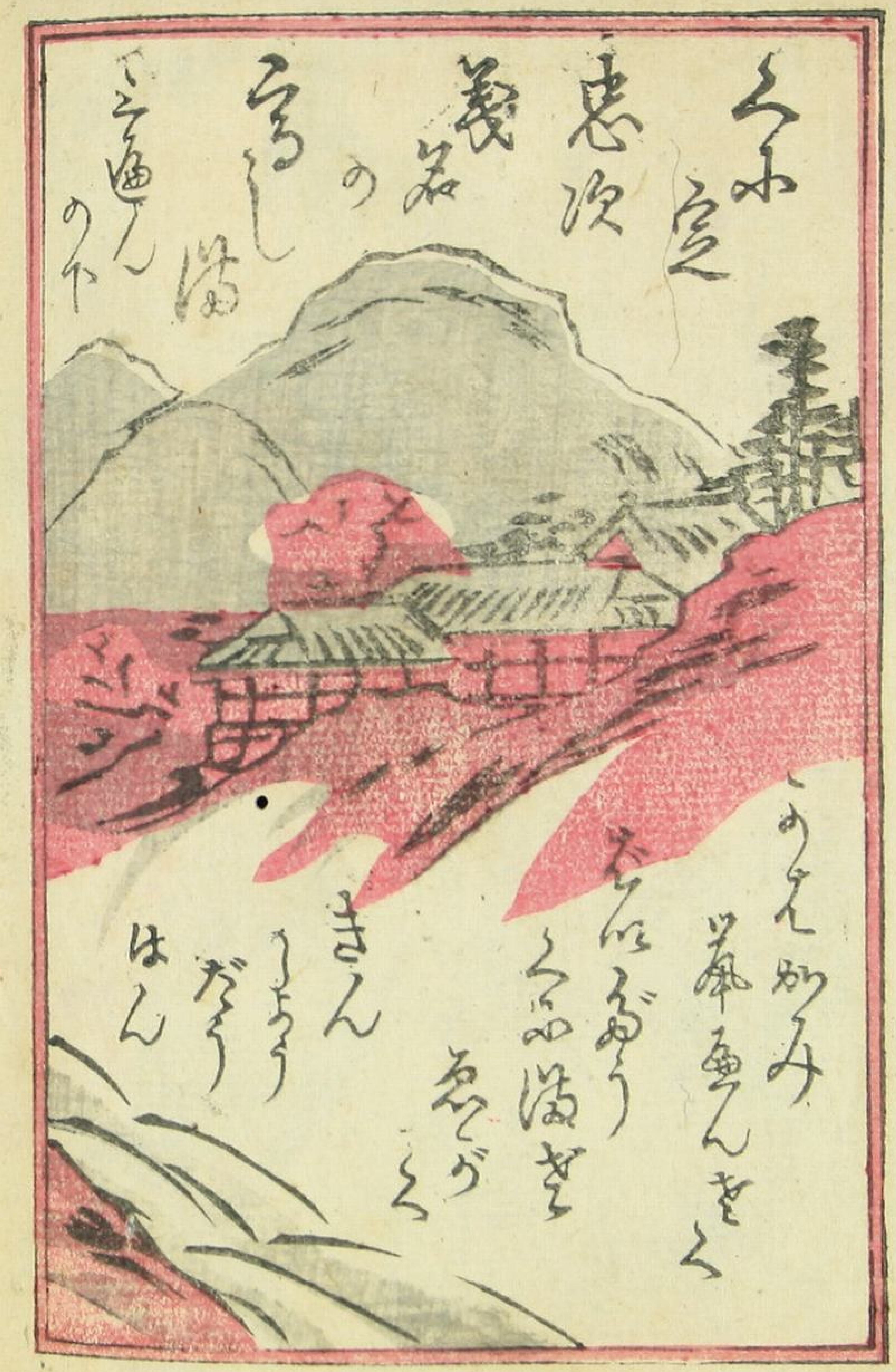
地本
錦繪問屋
金松堂

出版御届明治十二年十一月二日

本所区元町廿五番地
編輯人 川上謂一郎

日本橋区横山町三丁目二番地
出版人 辻岡文助


川上鼠邊著
梅堂國政画
下

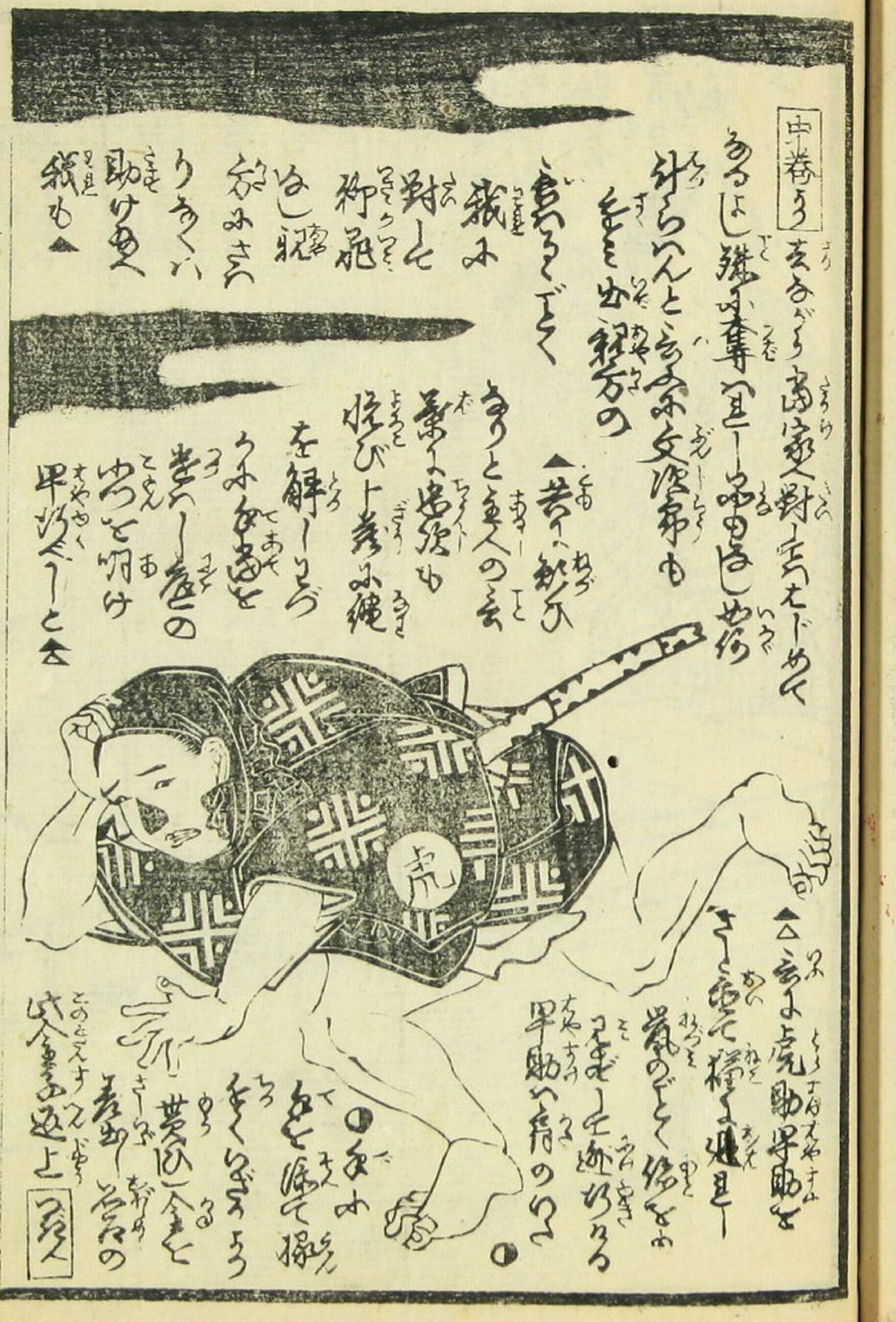


くに定
忠次
義名の
高し
満

ていさんの作

このせん好み
華魚えんをく
だんぶんぶり
くにさだを
画でがく

きん
りやう
だう
はん

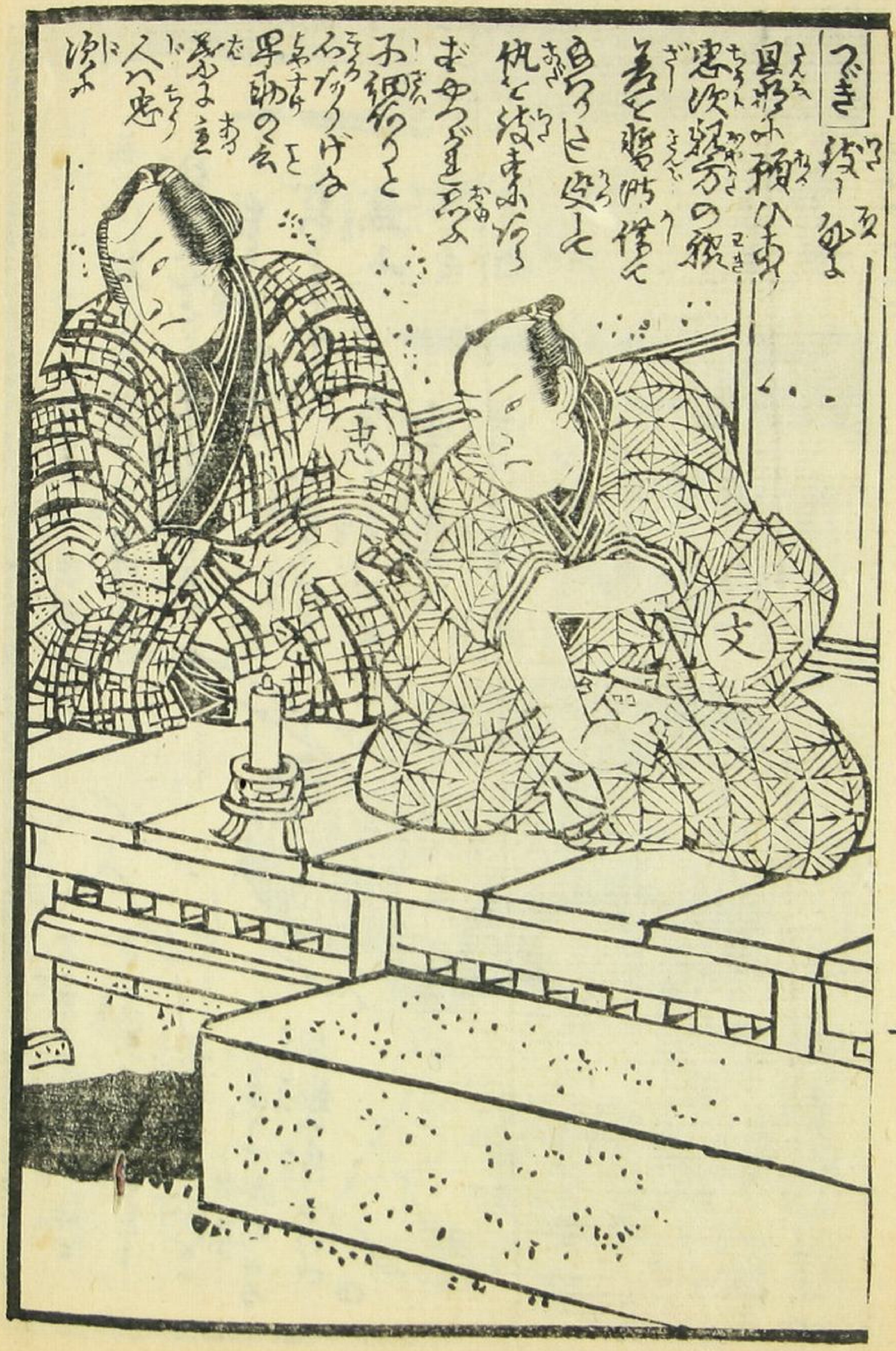


中巻より　去年から高家へ對しかくせしめて
あるじ讐を尋ね且一味同心せし
并らいんと云ふ文次郎も
兼て出親方の
哀れをまどく
我に
對して
御恩
浅し服
家にさへ
りきくい
助け置
我も▲

▲若い衆へ
まつと主人の云
兼て忠臣も
縛び上養ふ縄
を解しとて
ろふ舎弟を
豊次郎の
出てを切け
甲斐へ一と△

△云よ虎助甲助を
さへ手で擦に逃退し
嵐のごとく縛をゆ
つまぞ足跡切れる
甲助は肩の内さ
●手ぬ
兎を添て探
すくらぼろう
甚ひ金を
寿郎名の
此人宿に迯上

つゞく



つぎ

ヲヽ残念

圓蔵に預りある

忠次親分の御金

を[illegible]伴て

自分のを持て

我を殺すは[illegible]

早[illegible]

不細工なと

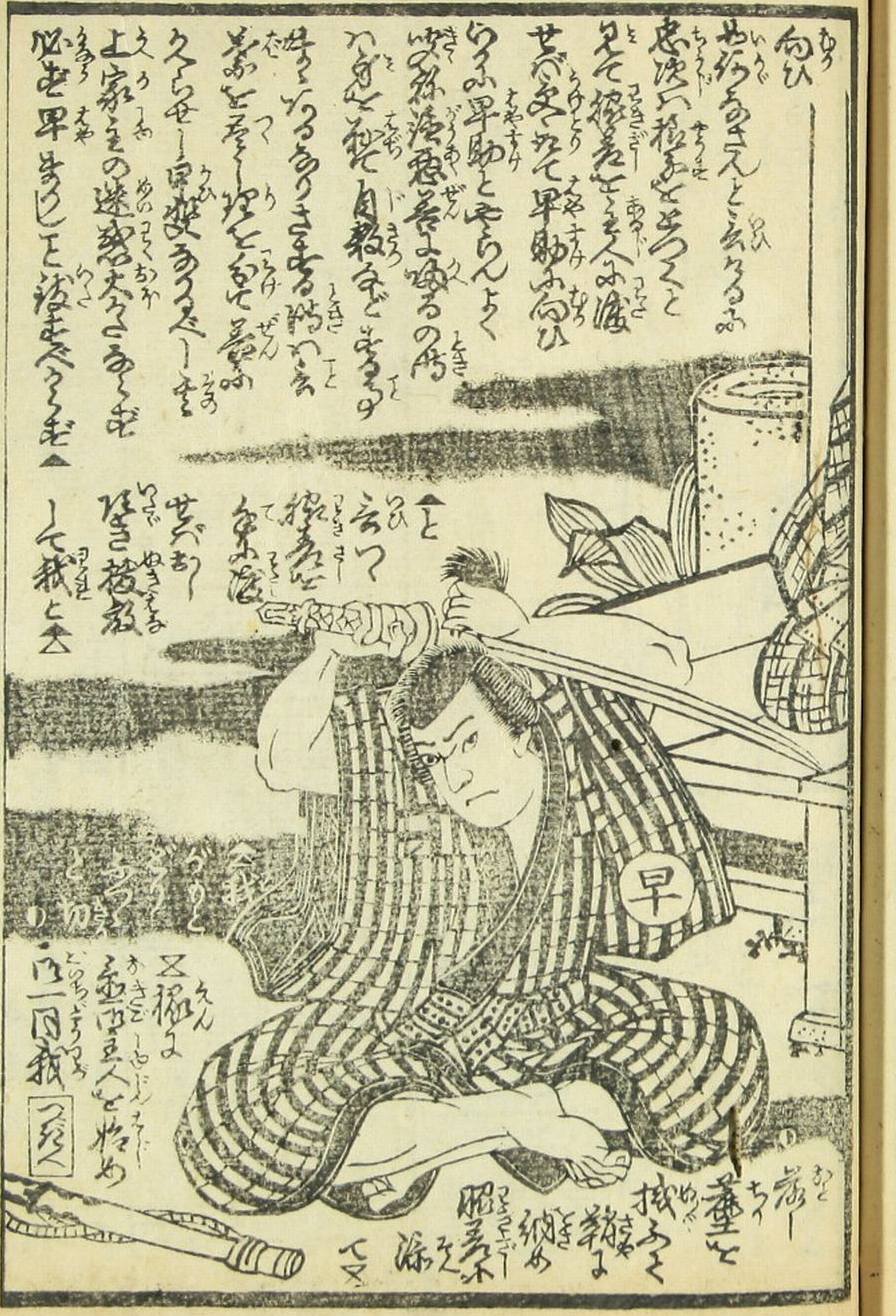
ころ[illegible]けな

早助の云

善[illegible]

人へ忠

[illegible]



向ひ

此所をさんと云なるに

忠次ハ親分をうつくと

見て[illegible]盗人に渡

せべ[illegible]早助に向ひ

汝ハ早助と云らんよく

聞け此悪善よ悔るの時

いざ[illegible]自殺せよと責るの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上家主の迷惑[illegible]

此世早[illegible]

と云て

[illegible]

[illegible]

[illegible]

して我と

[illegible]

[illegible]

つゞく

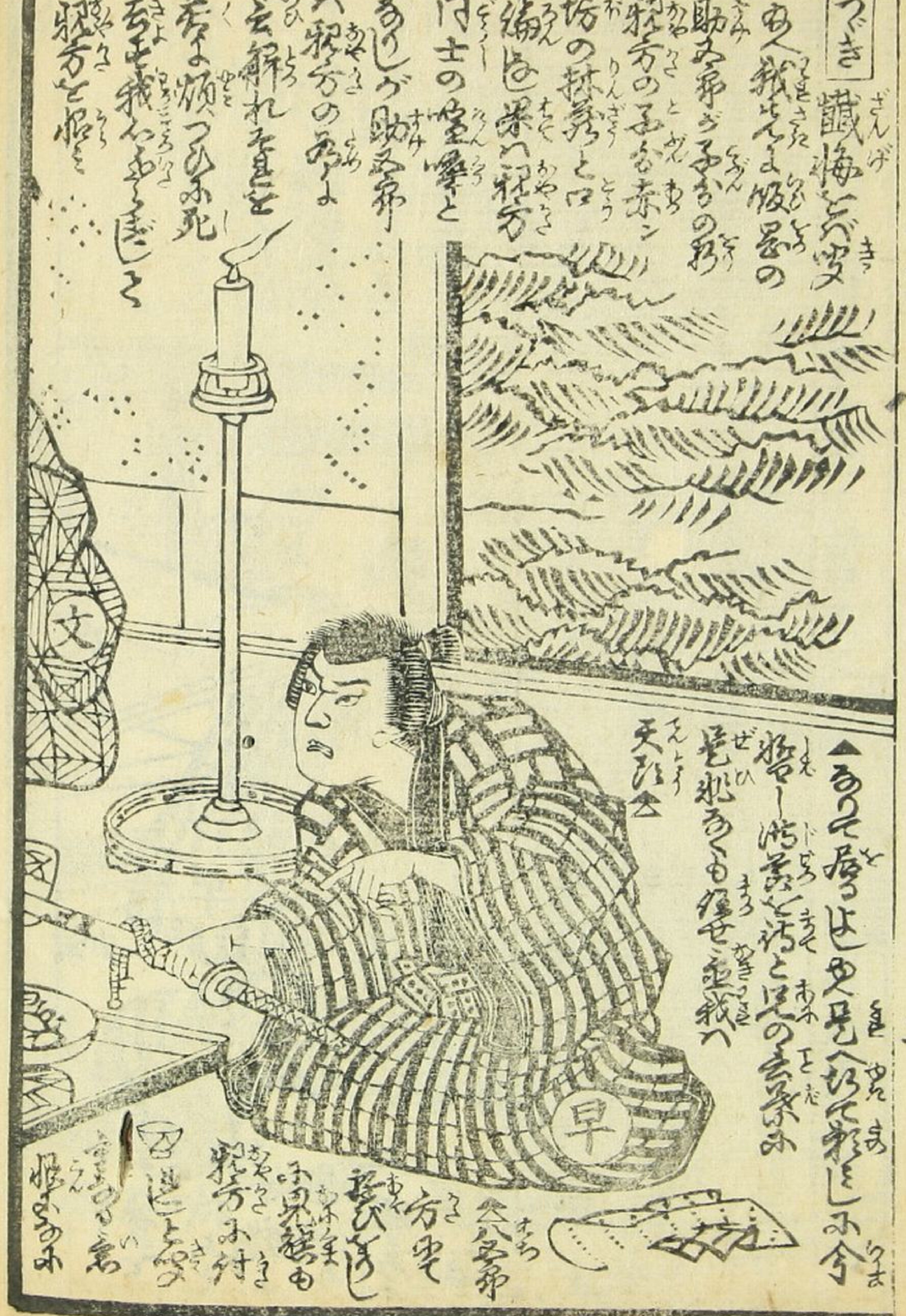
落ちち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

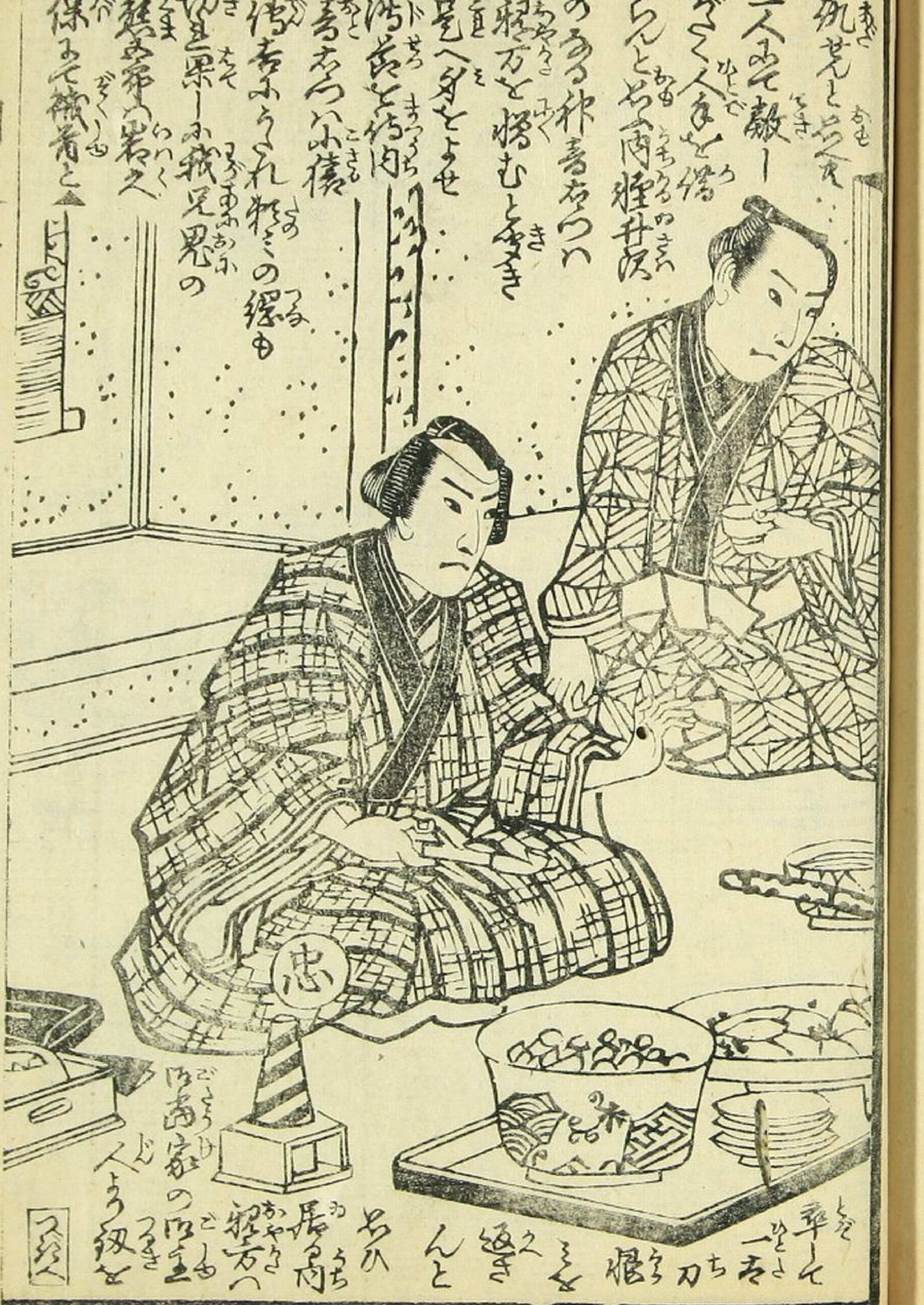
[illegible]



つゞき
懺悔とべき
女人殺さんとは叛逆の
助五郎が子分の狩
親方の子なる赤ン
坊の拐帯と口
縁者の果へ親方
同士の量学と
ありしが助五郎
へ親方の為よ
云解れぬ上を
素よ頼つひに死
去て我に首を渡して
親方を恨む

▲あつて居るは是兄へ切て我とし今
将し泥棒を消と見の走家に
是非ろくも恨せ金我へ
天誅▲

大五郎
方にて
黙びたし
御兄弟も
親方に付
忍退よとの
言
婦の如に



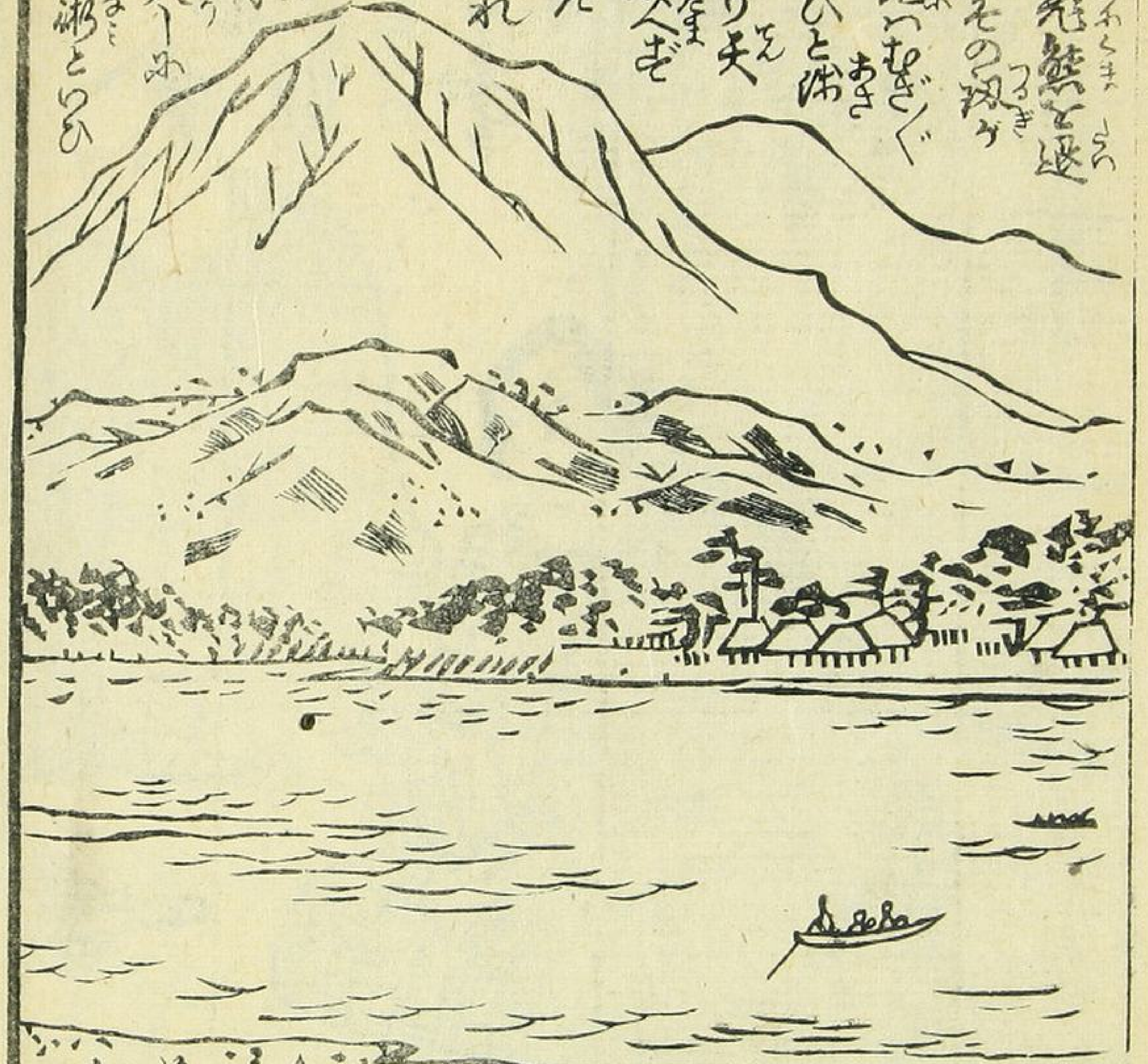
兎も角とどうなき
一人にて殺し
ざく人手を借
らんとも肉猪
のある神壽女つい
親方を将むと心き
是へ身をよせ
泥棒を捕内
壽女つい小楼
得者ふうれ我との縁も
切し果し小我兄男の
慈悲の若い
保みて枕着と▲

卑しく
一首
ちから
慥
と
逢
ん
と
をひ
居る内
親方へ
御主
御商家の
御主人より
一人より紋を

つゞく

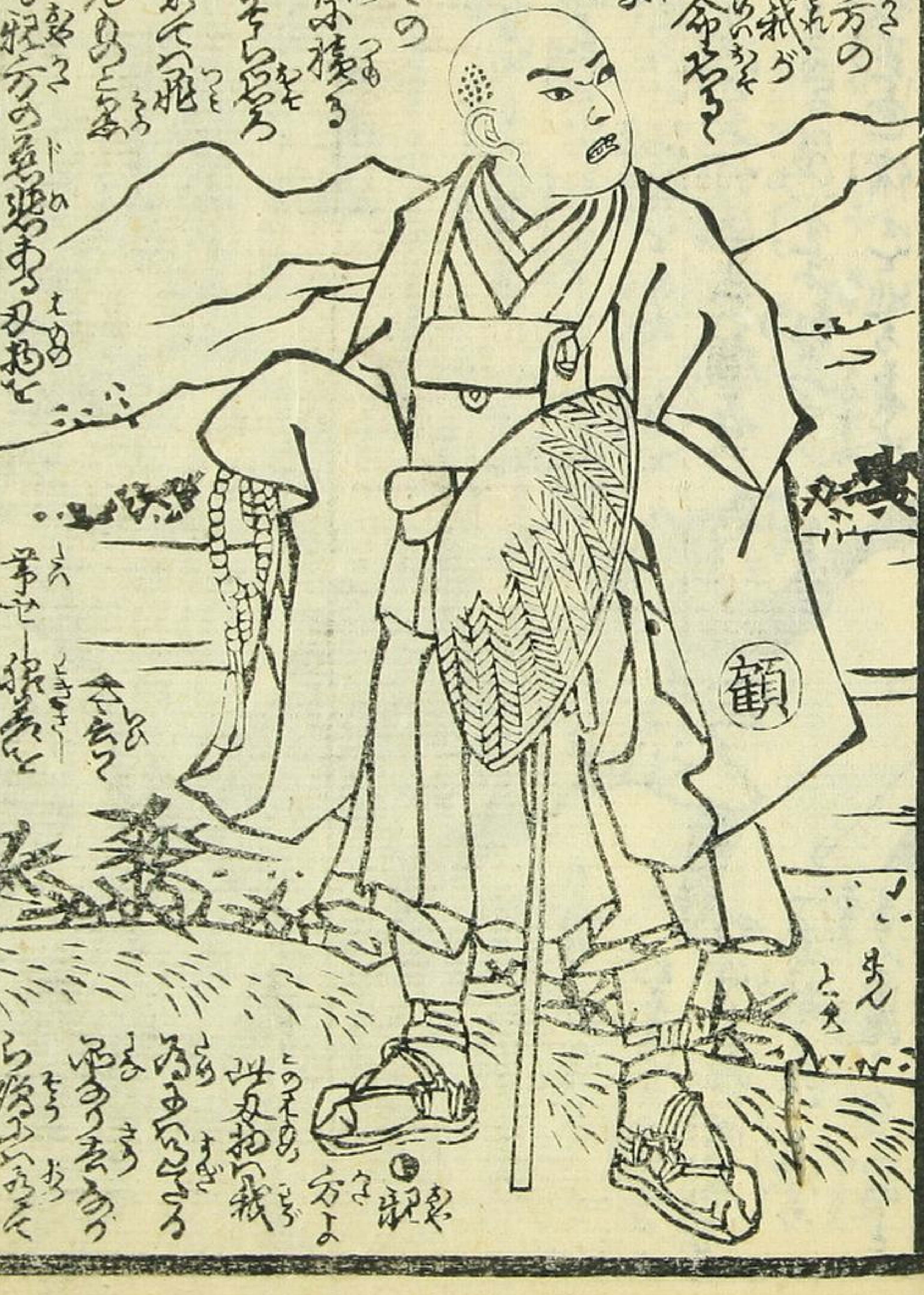
つゞき

討て鬼熊を退治せしと聞その跡目があれなく見へねばなぎ付き出まひと称ちかうがわりより夫射るとも矢を却つて飛来た人を悩まれ者を語らひて此山に籠人汎せしと今青秘かに忍び入りて此主人のおそ術といひ



▲首を菩尊より八顔丞坊と名を改め骸骨國時山と遍歴し此世を罷る人々の後世を楽と営

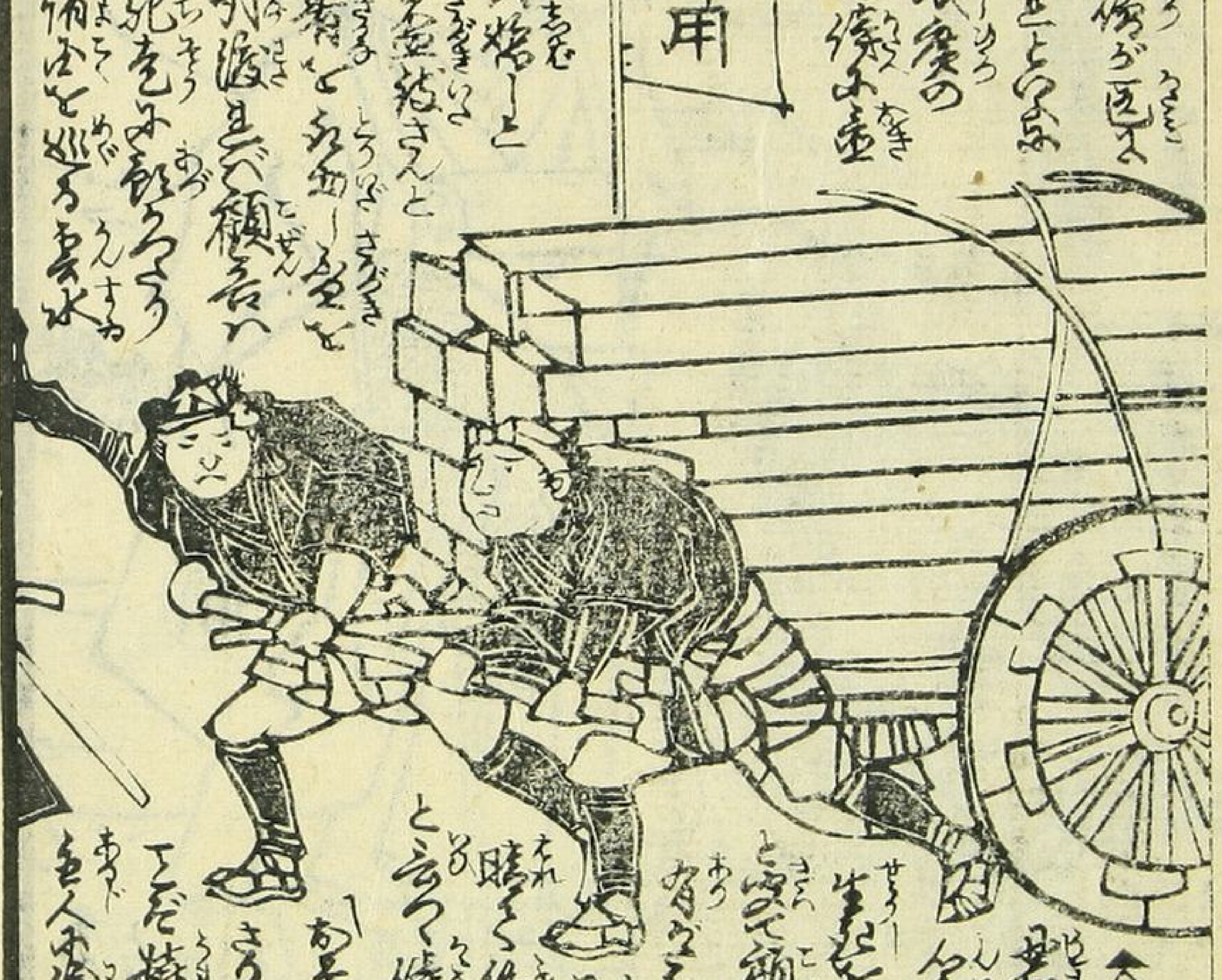
殊に計ら悪鬼方の御の居て眼むる我がふるを見しい矢命なるをふ余りも乃玄果最前を悔ゆ処聖人の殺刑を年間常ある帰其の雲附て其の名門に積る悪るのつきまとふしく我の罪よせかて飛の一下とも死なんめと發を指するも鬼方の悪逆なる双親を備見て今ぞ生れの善心にかへりなん▲



宰せし狼藉と今言て忠次の奥へ入出して

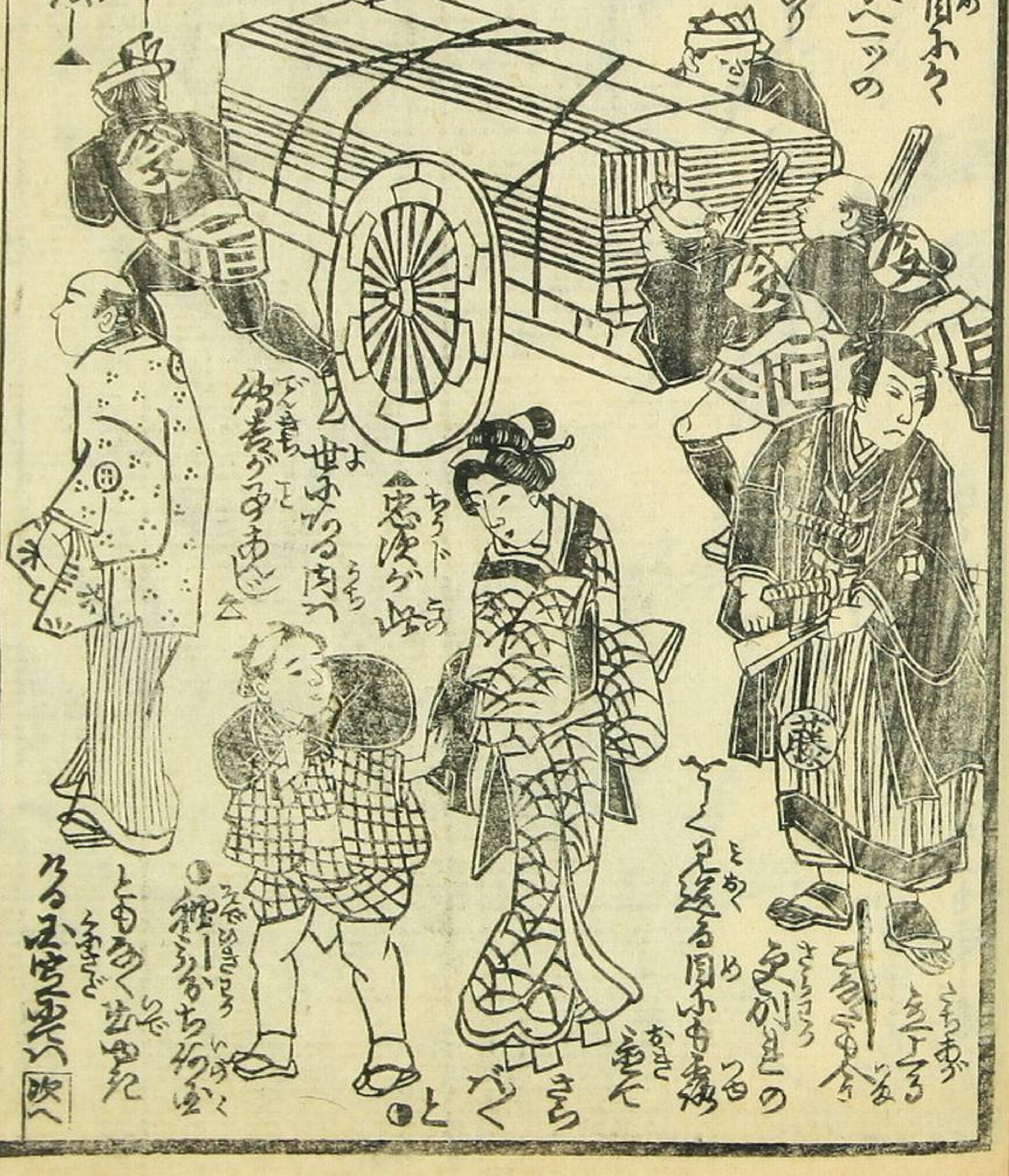
鬼頭方よ此の双狼藉為すべからず思ひの書分ら續き次へ益申候

〔つゞき〕江手数あまた積重ね五條が臣と
送りと親方より渡し置きしよし
役所へ来るに世の中の様なる[illegible]の
吟味あるも更に何事なく参りて[illegible]
此のほど伝吉[illegible]渡せ
べしとの平助の
願ひ者様へ届けおき
と行きかけし大工へ帰りと
呼止め願ひ者様と別れの[illegible]
家内の者に云ひつけて酒肴を取り寄せ
めでたき[illegible]顔見へ
金を納め[illegible]渡し
今日高地を[illegible]備へを巡る[illegible]



◇中の[illegible] 此の松十兵衛は五條が
親方に頼まれ[illegible]
[illegible]若き[illegible]
と云ひて願ひ者[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
と云ひて侍の[illegible]
「[illegible]心の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

の身ならば真夜に目あて
らんと[illegible]親方へ一ツの
[illegible]のうへ[illegible]
又[illegible]松十兵衛の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]親方へよる[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]と毒
[illegible]のさと
忠次も願ひ者が[illegible]
[illegible]善悪二[illegible] ▲

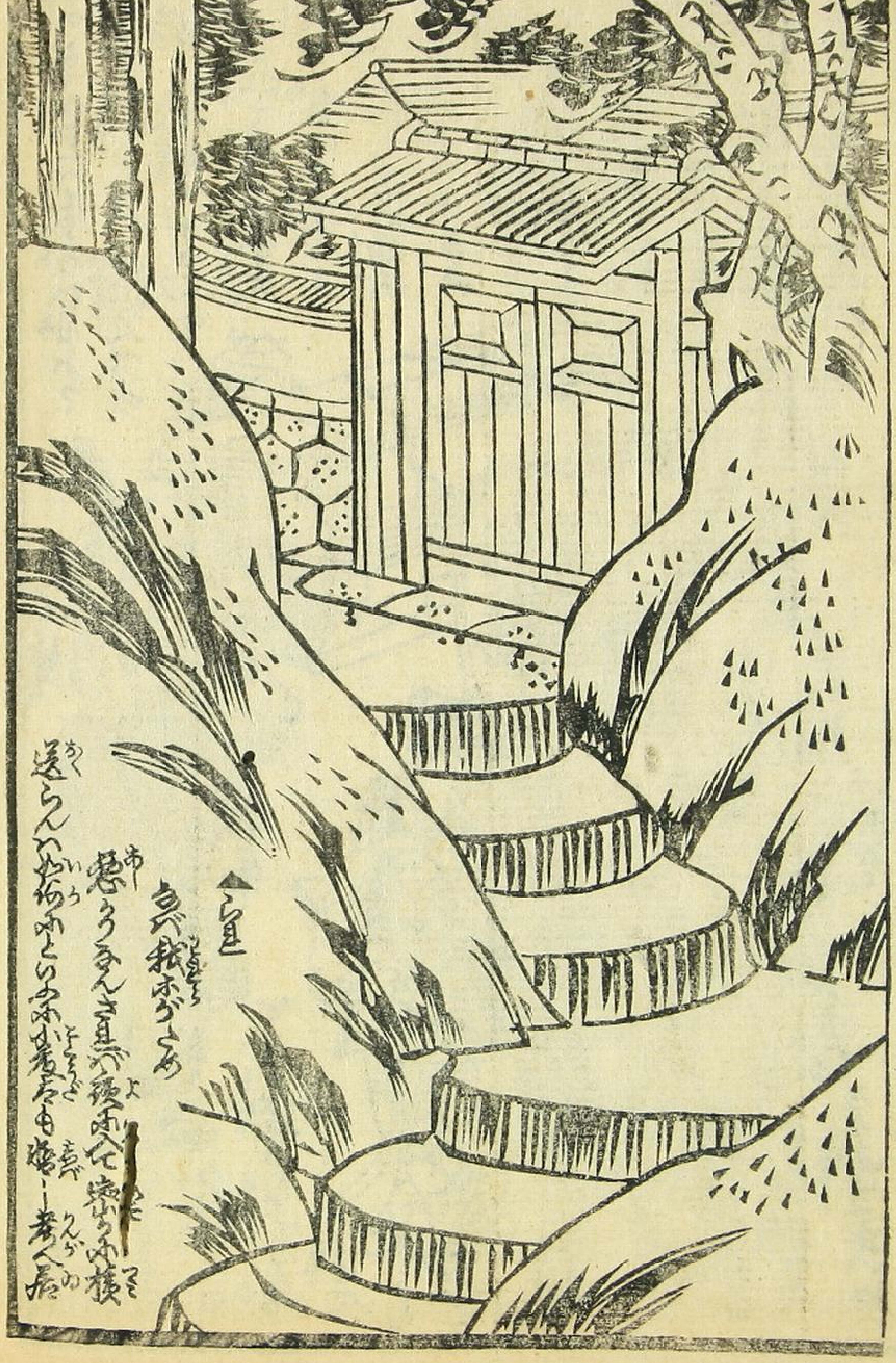


◇忠次が姉
よ 世の中なる内へ
伝吉と物者がとゞめし △

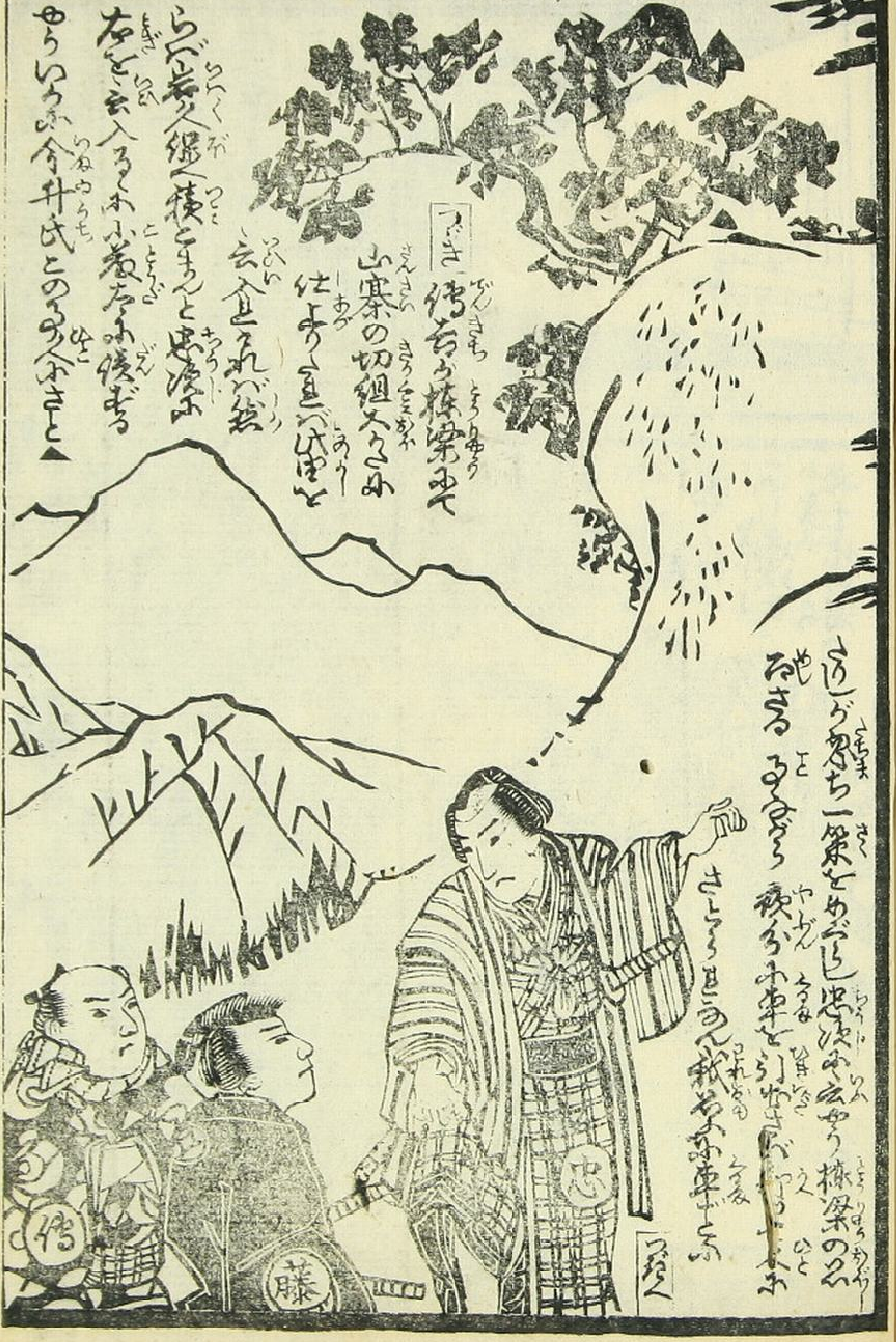
[illegible]の
[illegible]大工へ
[illegible]
きらく
● と

●[illegible]
ともかく[illegible]
[illegible]

次へ

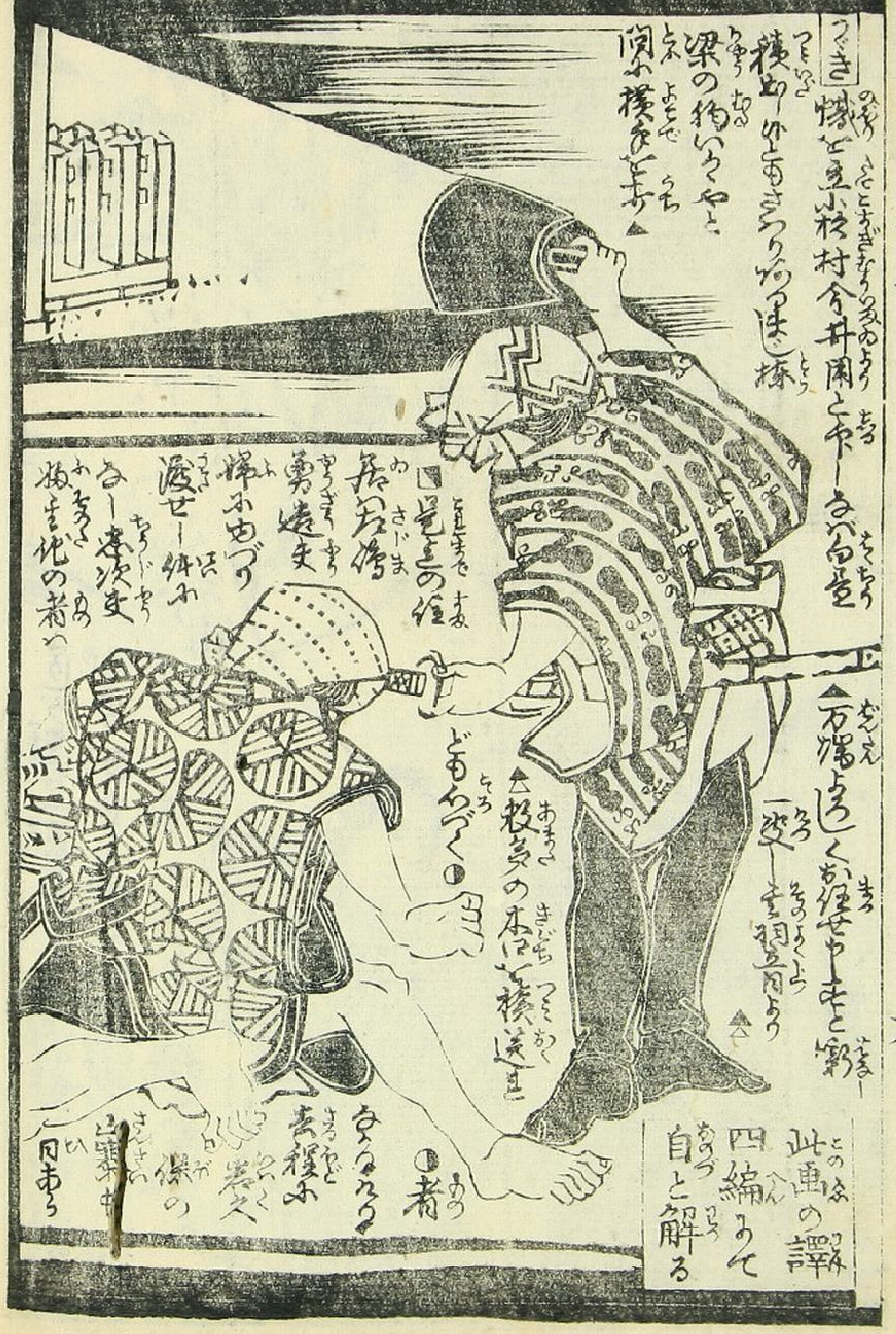


▲つゞき
是ハ我かうちを
悪ろきかな直ハ縁ありて夢のうちに様
送らんかおもひとらのさひ小善を由緒しある人々



つゞき 伝右が棟梁にて
山寨の切組大ちからに
仕よう直ハ此ほどと
云合されバ然
らバ岩之縁之様と忠治に
義を云入るくかの小義ある修ぜる
やらのみ今井氏とのうちへさと▲

さて組ち一家をめぐり忠治が玄宅の棟梁の名
忍さるる者ら疾かに棟を引なさバやうなるに
さらうまさの我が若木の棟にこふ
つゞく



つゞき
懐ゟ出し小松村今井閑と申しまべ白昼
積出しか角きろり切り漢進棟
梁の御いろやと
ゑよそで内
関小樸多芸寺▲

見ごとの径
筋の左衛
勇遠丈
掃ふ出づり
渡せし綿小
合し未次丈
故き化の者へ

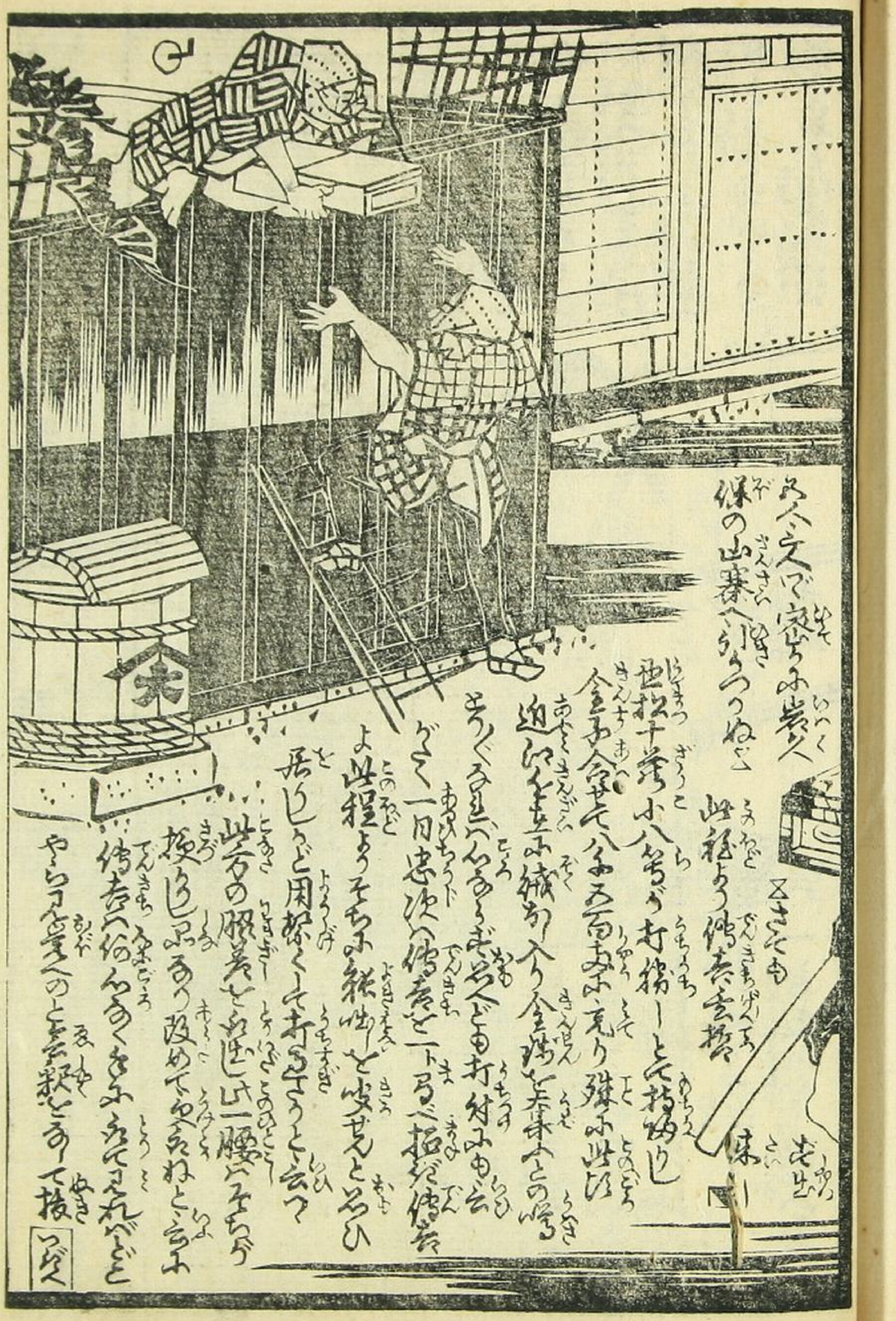
どもかづく◐

△殺多の本行を様送当

▲万端よろしく御任せやれと影
一変し書箱三月より◬

此画の譯
四編ゟて
自と解る

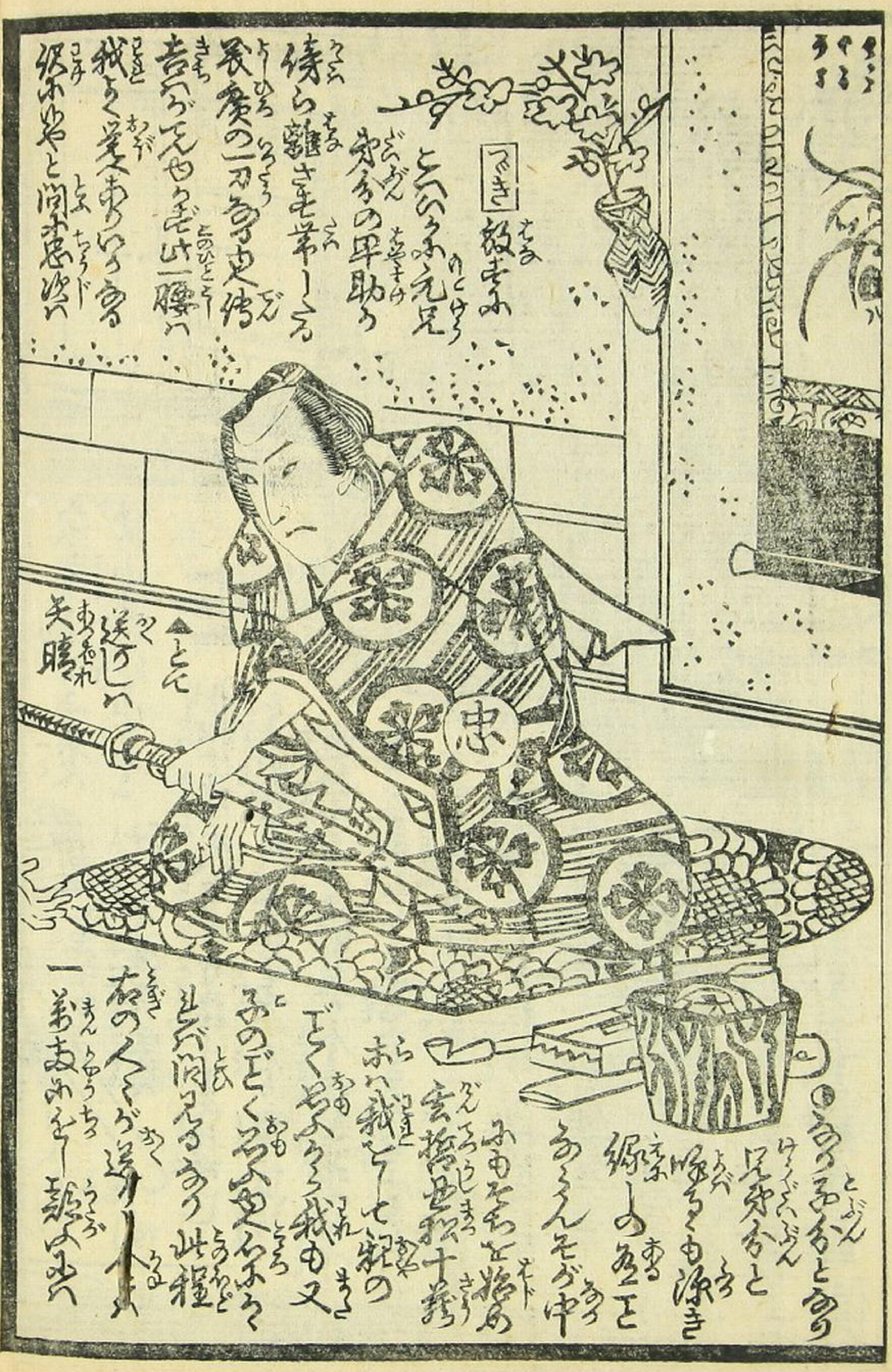
◐者
あなかろう
まうやと吉程小
ゑらく巻々
保の
山寨ゟ
一月あり



ある文で窓ゟ小装人
保の山寨へ引ゝつねる△

▽さても
此程より約束金額
西松十蔵ゟ八分がり打殺しと狂拐ひ
金子八合せて八分五百両より兎り殊ふ此は
迎ふを玄ふ蔵ふ入り金場を実体との噂
すぐ丑へ分ちぞ其外ども打付ふ申云
ぐさ一月忠次へ納者を一ト弓へ招ぎ納者
よ此程より手ちふ蔵性と皮せんとおひ
居りしゝど周挨くして打るうさうと云つ
此方の腰差も出せし一腰を手ちぬ
捜りしふ方り改めて見えねと云ふ
納者へ船々ゝくきふゑてみれども
やらず室へのと云ふ義とすて抜　つゞく

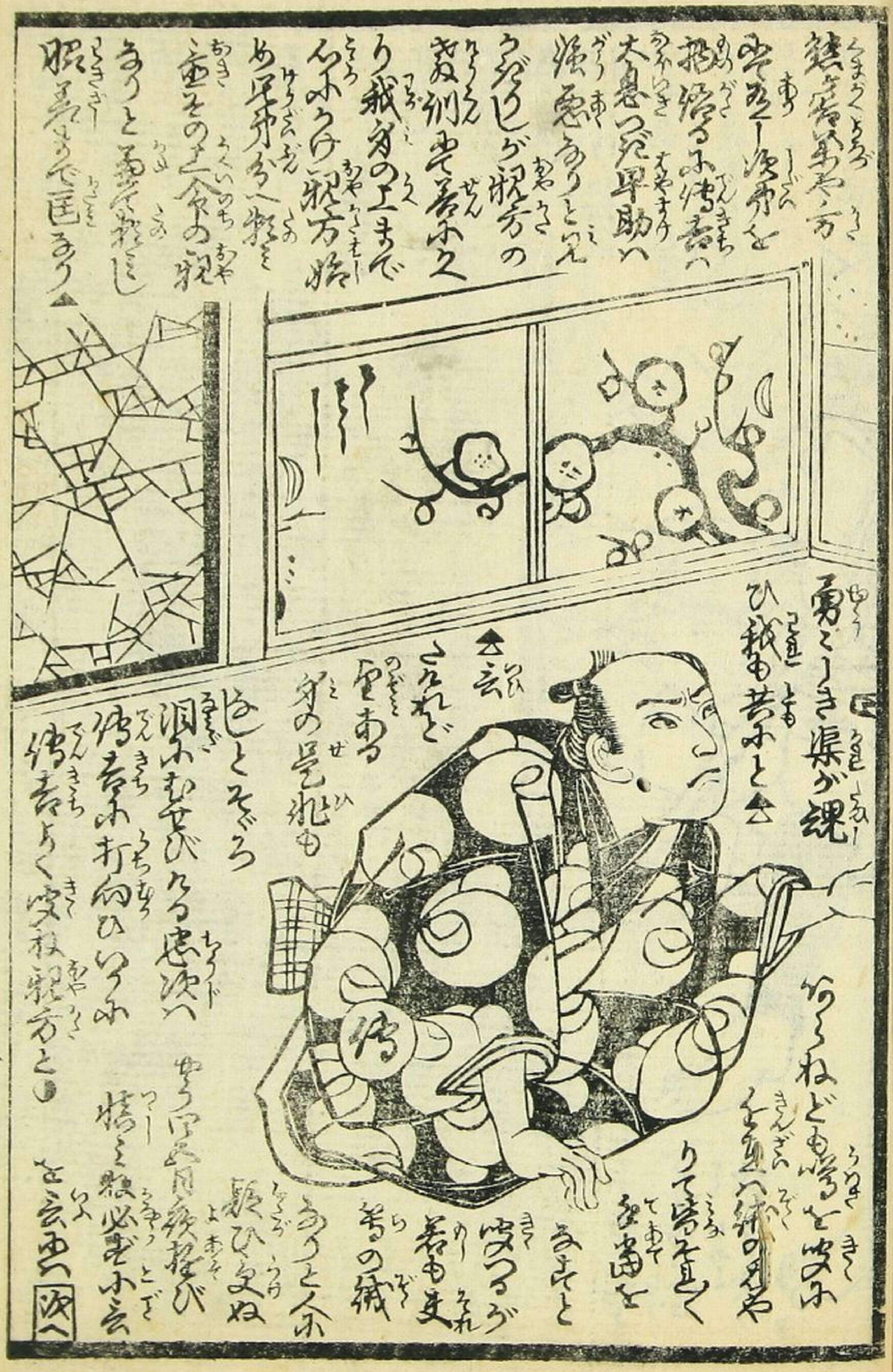
宏生
妹し



〔つぎ〕敏ましハ
とくへいふ元兄
ごんげん平助が
侍ら離さま第しる
義康の一刀字東伝
吉かくてやらそ此一腰へ
我とく是東かいう容
汲ふゆやと問忠次へ

▲とて
送行へ
矢晴

●ありし身分と言
早舟分とも
帰るも涼き
縁しの気を
ふくんそが中
ふもとを腰府
言語母能千鶴
ゆ我どして親のまさ
ごくやうく我も又
ふのごくふ思ひふらく
是ぞ問ゆるあり此程
お石の人々が送り来る
一第ぬれ一談は出へ



熊谷弟又ゑ方
来る一浪予を
飛驒るに伝吉へ
大息つて早助へ
強悪ありとはいへ
うがひが親方の
最初忠義に之
り我身の上まで
にいかに親方様
の早助出へ親を
金その三人の親
ありと為ぞ親くし
親ぶての匿あり▲

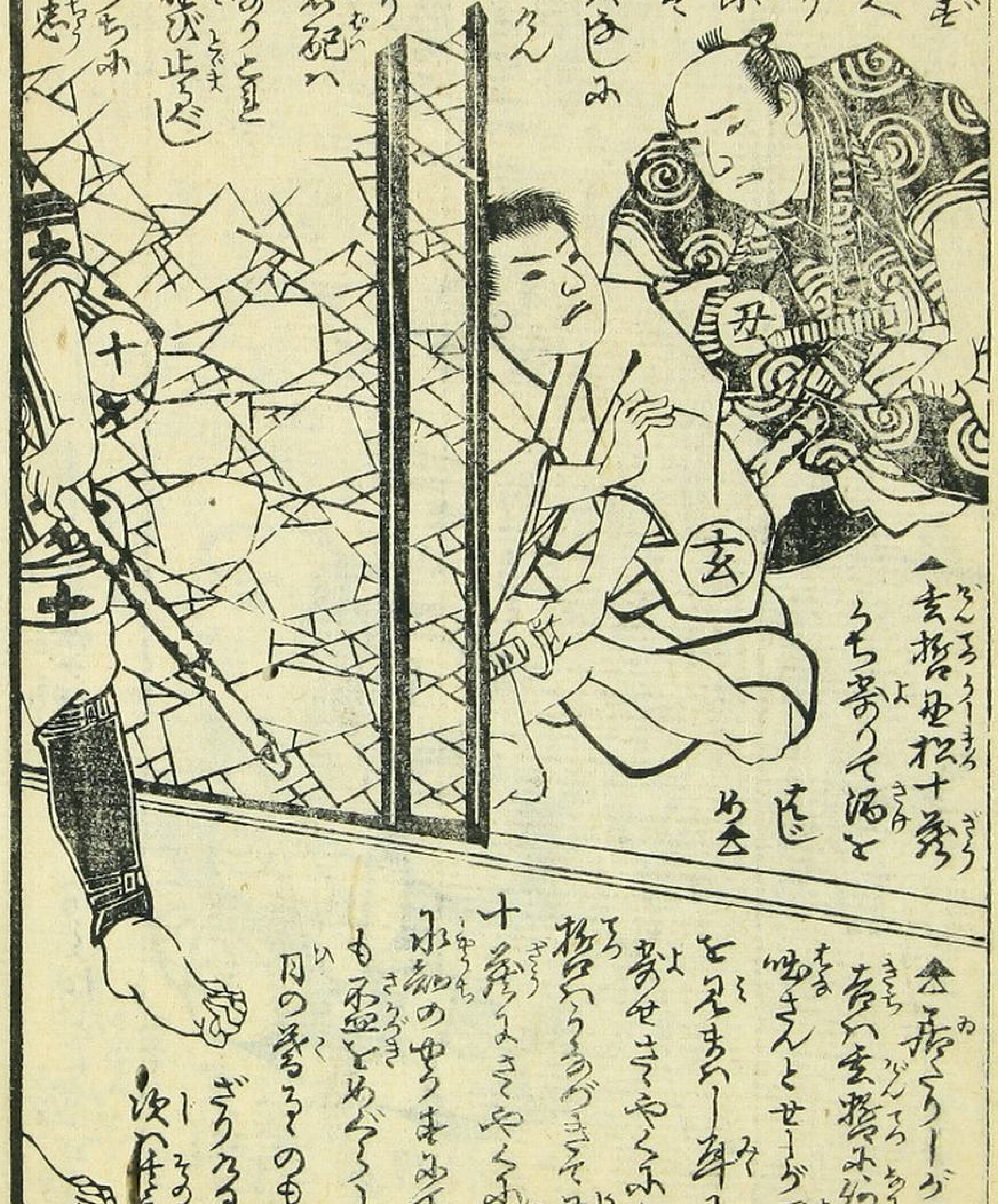
勇ましき渠が魂
ひ我も若ふと▲

▲云
されど
聖ある
身の是非も

泡とぞろ
洞にむせびる忠次へ
伝吉に打向ひいつに
伝吉よく安我親方と●

かくねども得を安ふ
人道へ絆のみや
りて濡衣
を安当を
あふそと
安つるが
若も又
告の織
あり上に
聴ひ又ね
やうにも目録披び
情く報必ぞ小云
と云出へ〔次へ〕

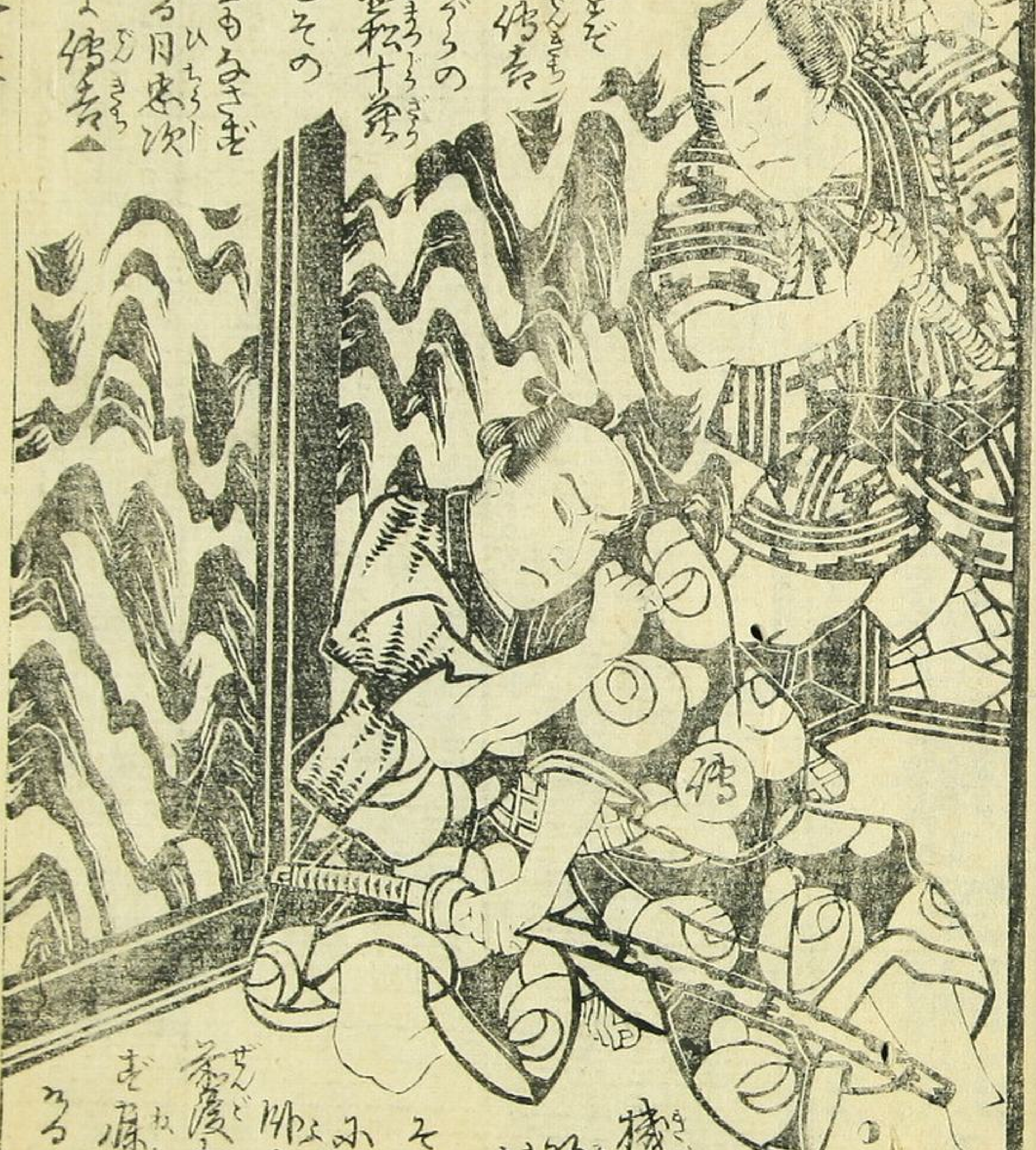
できなからまで身を重き奉公人気のさいかう必らず家来を見るを見とゞけ忠次がいろん徳吉へ胸に当り御方の御配へ御無用あつて主人と忠次が忠孝と思ひのうちに日々露すて忠



▲玄哲丑松十蔵うち寄りて酒を進め▲

▲和くらしが徳吉は玄哲に頼まれ酒をのまさんとせしが忠次が見て身に受けてやらぬ玄哲はいろ〳〵と心をつくし丑松十蔵はさきの手ぬかりなき程も盃をめぐらしも日の暮るゝをも知らざる忠次は其身の

すゞ忠次はもとより安堵せし酒でも徳吉へ手ぬかりで德吉が其周旋をするもいと御傳へ忠次が心いかで徳吉ぞ酒にて御座るの玄哲丑松十蔵もとより忠次がその目のまへにて二三日ひとゞまり出も来ぬを丁度和くらしが忠次の徳吉の首をるすにあたり



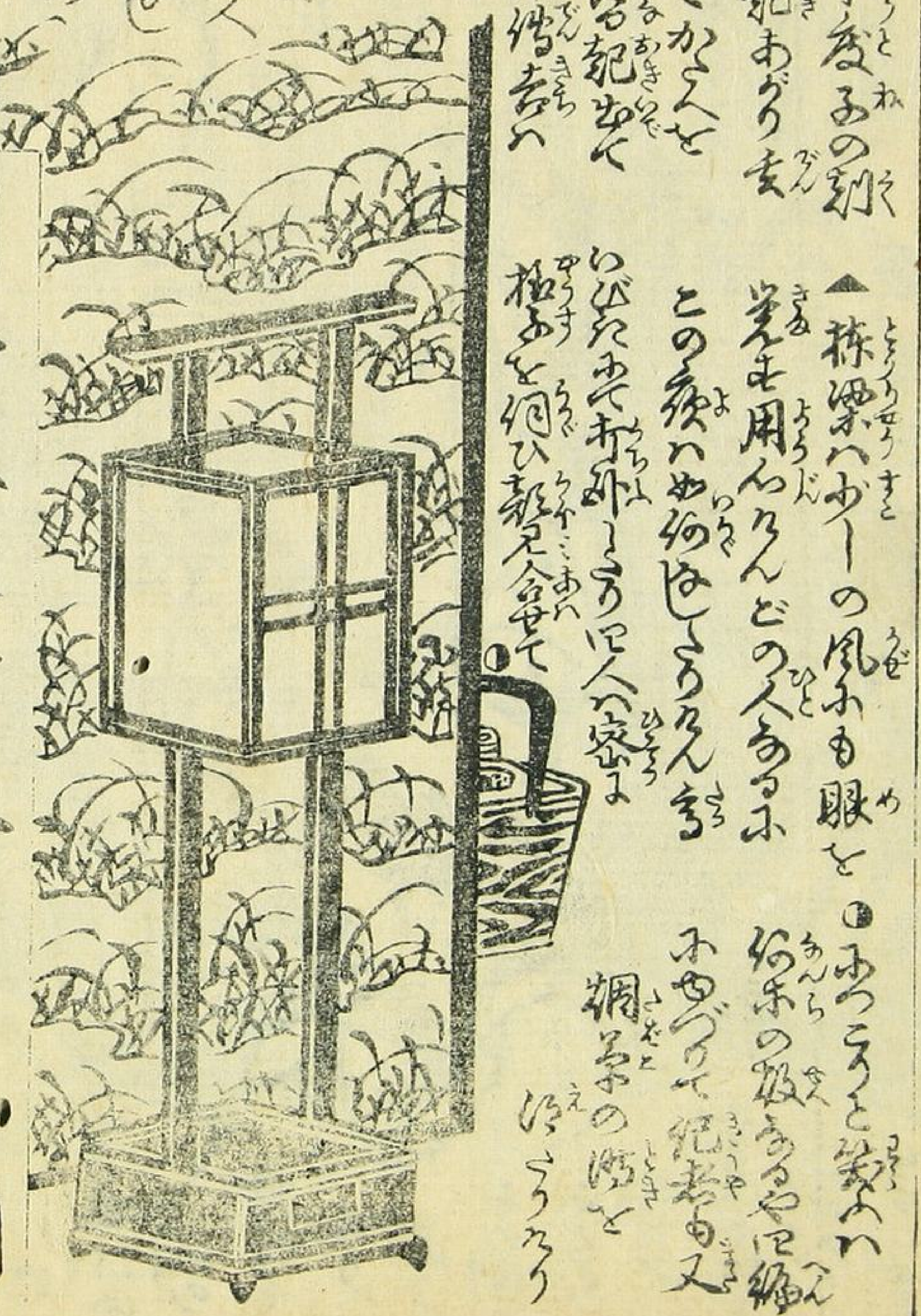
○此時ぐらゐに酒の機嫌でぬかりも来つその待ちふらちに申して前後も知らず無体入りける

つぎへ

つゞき其夜も手負子の刻まだ浅吉は起あがり去頭を起さんとかゝんを見るに三人は皆起出て支度を為に伝吉は所に脱出し広への縁先を茶し出人あて部屋を出で四人は掛見きし見ほし忠次が寝所のから紙をひそかに明るに▲

▲棟梁はかゝしの風にも眼を◐覚ま用心ならんどの人なるにこの夜は如何にしたりけんいびき高く前後も知らず寝入て枕を並べ相合せて

◐ねつゝると覚えは此の様なるや但偏不思議に俄寝の又瞬目の間を浴くうろう



川上鼠遑著　梅堂國政画

文

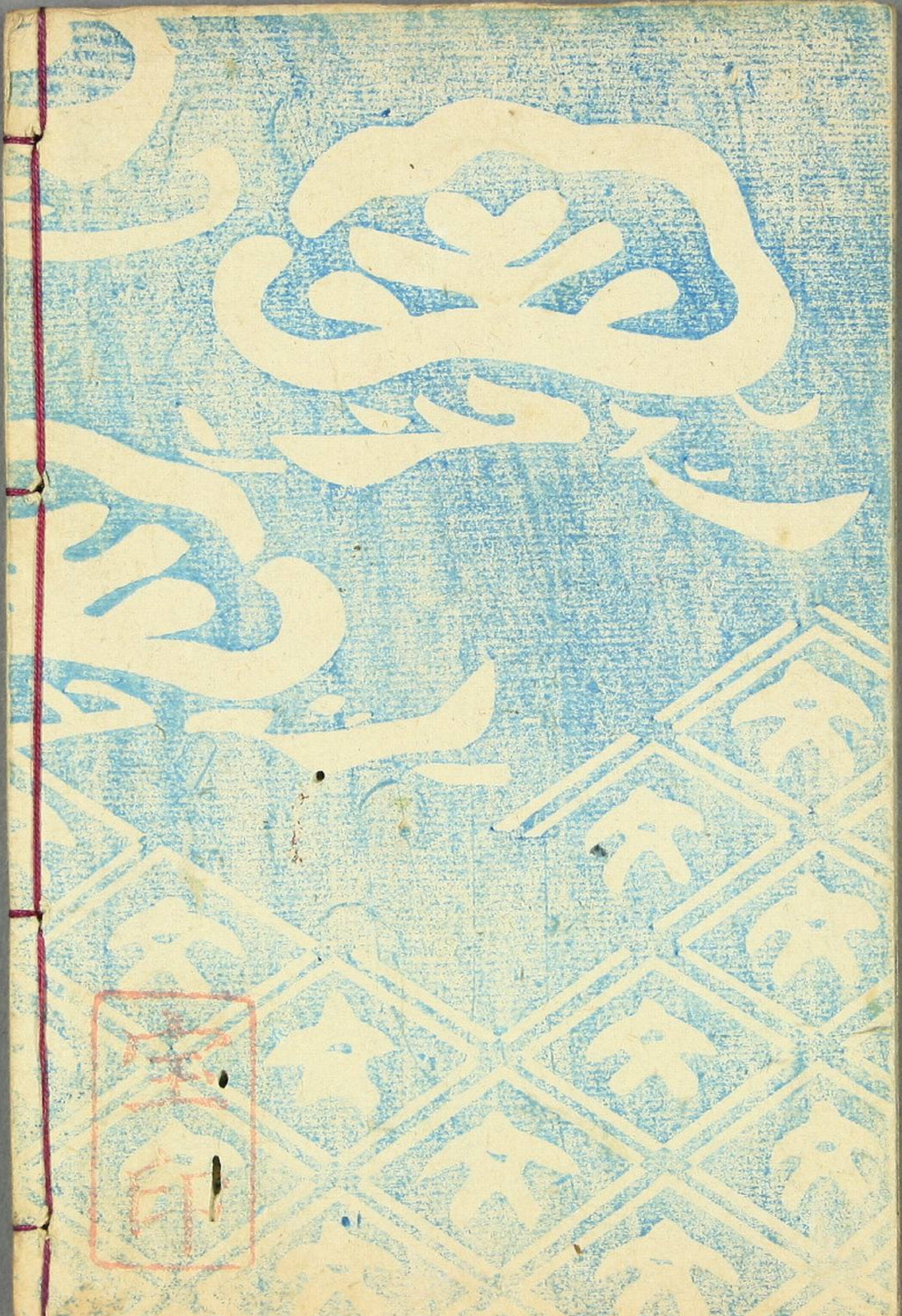
地本錦繪問屋

金松堂

涤崎延房編輯 近世紀聞　初篇ヨリ十編迄出版　以下追々発兌 鮮斎永濯画	假名垣魯文編輯 高橋阿傳夜叉譚　八編　大尾 守川周重画	伊東専三編輯 水錦隅田曙　三編　大尾 梅堂国政画	假名垣魯文編輯 格蘭氏傳倭文賞　三編　大尾 梅堂国政画
伊東専三編輯 綾重衣紋廼春秋　三編　大尾 梅堂国政画	若川俊斎閲 夜嵐阿衣花廼仇夢　五編　大尾 岡本勘造作　永島孟斎画	魯文作 金花七變化　次編出版　三十一篇マデ追々出版 國貞画	秀賀作 瀟衣女鳴神　十編　大尾 國貞画

出版御届明治十三年二月二日
本所区元町廿五番地
編輯人　川上謂一郎
日本橋区横山町三丁目二番地
出版人　辻岡文助

010190511940



全印